明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

明治卅九年十一月一日發行（毎月回一日）

女子文壇

第二巻　第拾四號



價菊



重松せい子女史筆

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

六十日間實費特賣

日本家庭百科事彙

邦文百科辭典之嚆矢

東京帝國大學文科大學教授 文學博士 芳賀矢一先生
女子高等師範學校教授 文學士 下田次郎先生
編纂

印刷部數…貳萬部 期限後は嚴に實費特賣を停止し定價金拾圓に復す

▲但期限内と雖も印刷部數盡くるときは、實費特賣を撤回すべし

(甲種)…金五圓五拾錢 着金順により來る十一月一日より送本す (印刷既成)

(乙種)…金六圓 來る十一月廿日迄に金壹圓を添へ申込み殘餘は特賣滿期後六十日間内に送金する時は乙種特賣購買者たることを得。但拂込完了と同時に送本す。

▲遞送料…東京市内金五錢、市外金五拾錢、(臺灣、韓國、清國各廿錢增)

▲大冊挿繪入見本 御入用の諸君は郵劵四錢を封入して御申越次第進呈す

裝釘極美・紙數一千五百餘頁 六號活字廿四字詰卅行三段振假名附大形四六二倍判 大小項目約三萬

▲精巧木版挿圖約千個 ▲石版二十度刷彩色寫生圖畫 本文大二頁大 十七枚 石版八度刷精巧鮮明 本邦世界各國并に著名都市詳細地圖十四枚

郵便振替
貯金口店
五〇一番

東京 合資會社 冨山房 神田

電話本局
一〇三六番

女子文壇の廣告に依り御注文の節は其旨御書添を乞ふ

秋の溪流



三宅克己先生筆

大日本女學會

●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に戴き鍋島侯爵夫人會長として會務を統監す●小學卒業後進んで高等女學校に入學し難き事情ある女子達は本會の通信教授に依て家庭に居ながら必須の學科を修められよ●本會發行の講義錄は高等女學校の科目よりも一層多數の諸學科を網羅し第一流の名家を撰びて講義を囑托せるものなり●本會は高等簡易の兩科を設け女子素養の程度に應ぜしむ月謝は高等科四拾錢簡易科二十錢とす目下入會に都合よし會則は葉書か電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢束修四拾錢

○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎭子）○敎育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歷史（大森金五郎）○萬國歷史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事衛生（同上）○小兒衛生（三島博士）○家事敎育（三輪田眞佐子）○家事經濟（後閑菊野子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖書（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸諭介）○附錄機關雜誌なでしこ

●簡易科（學期二個年）　月謝貳拾錢束修貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎭子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歷史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭敎育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖書（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

目下入會の好時機

東京市麴町區下二番町三七
大日本女學會
電話番町一三三〇

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的舊式賣藥)のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價) 壹劑四拾貳錢 貳劑八拾錢 參劑壹圓拾錢 郵券代用貳割增し

新輸入美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢 特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月閉止したる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時類々怪しき無効なる**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



腋臭 わきが

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

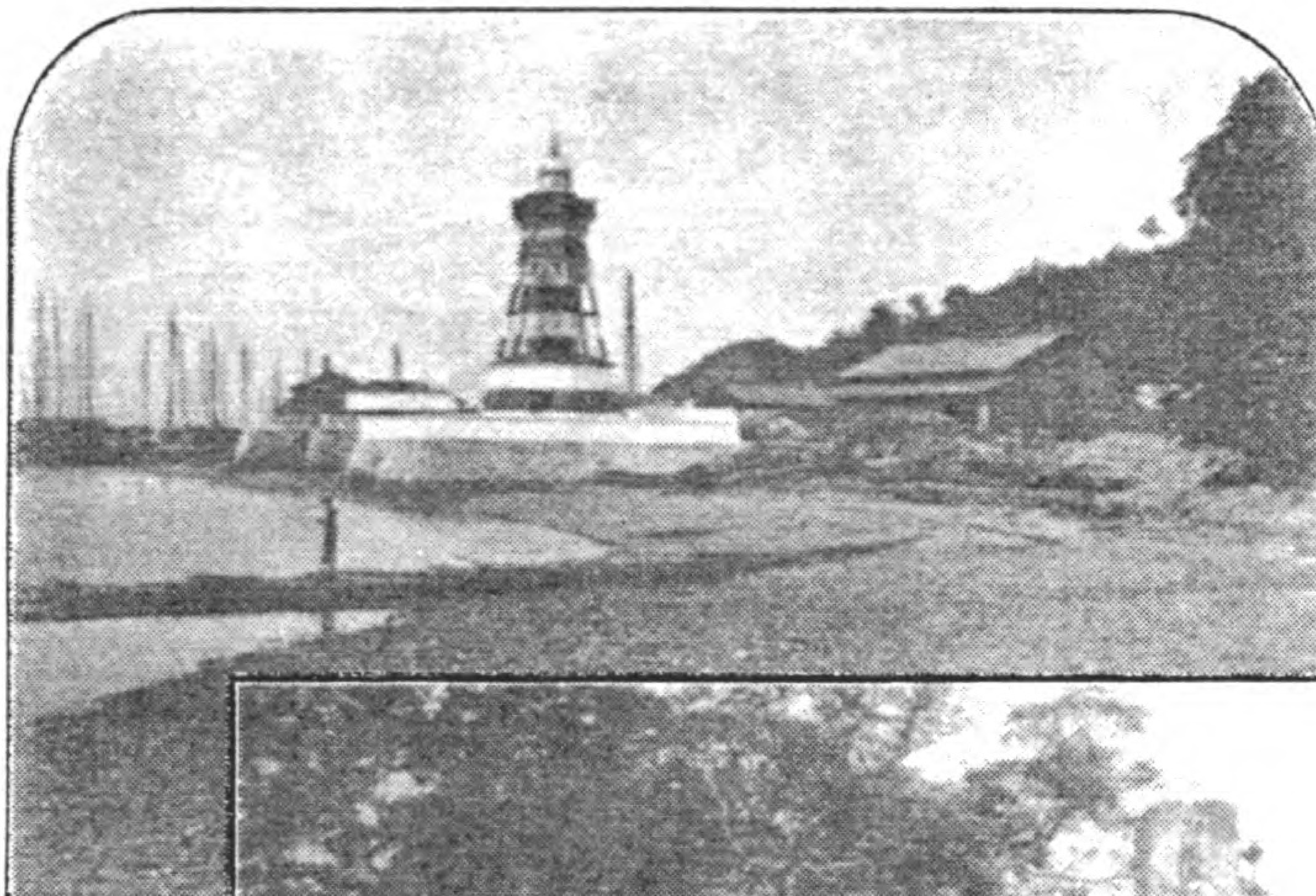
以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)

樂しき家庭



（英國　ソロモン氏筆）

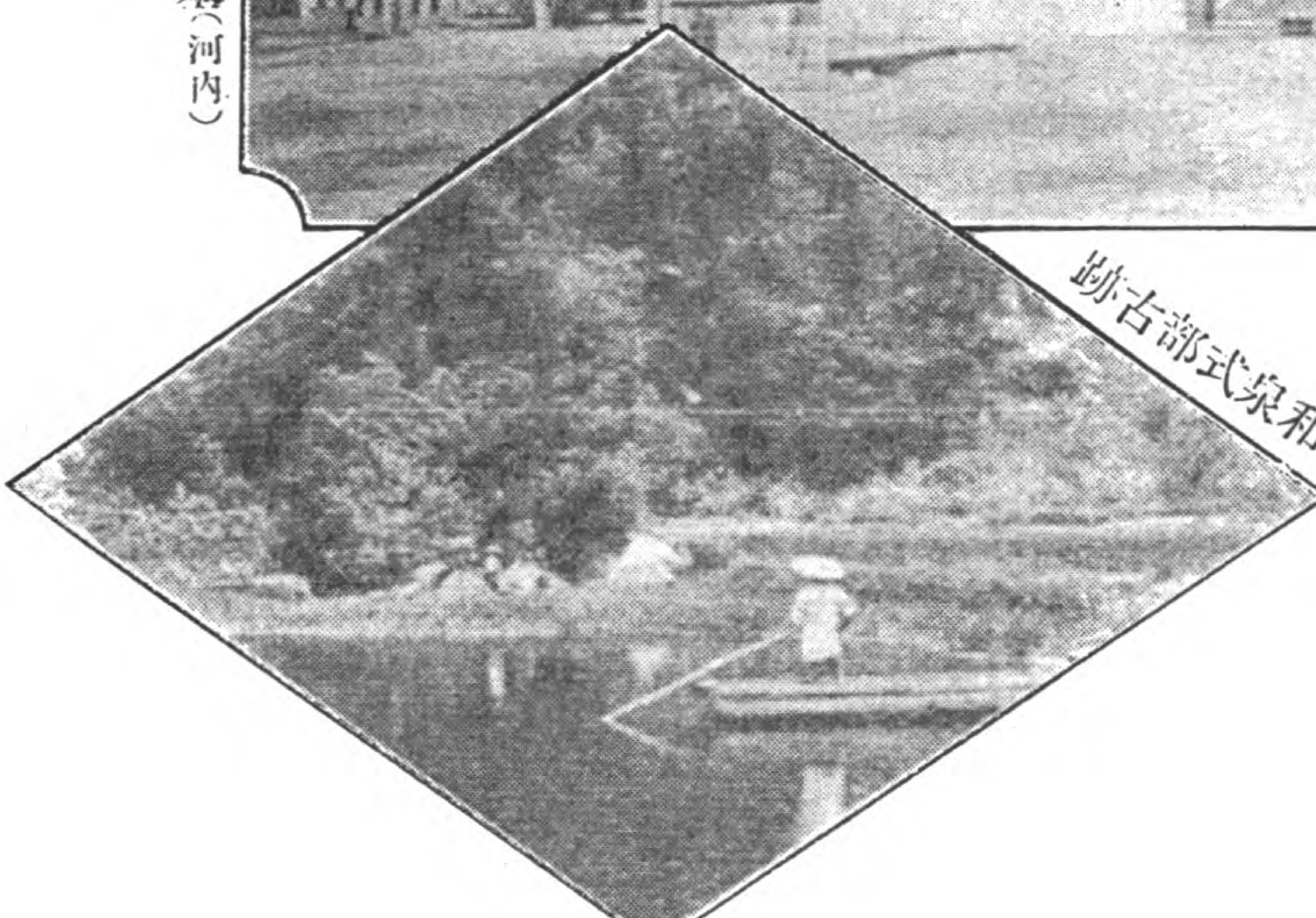
壇の浦燈明臺（下關市）



（長門　國弘きく子寄）



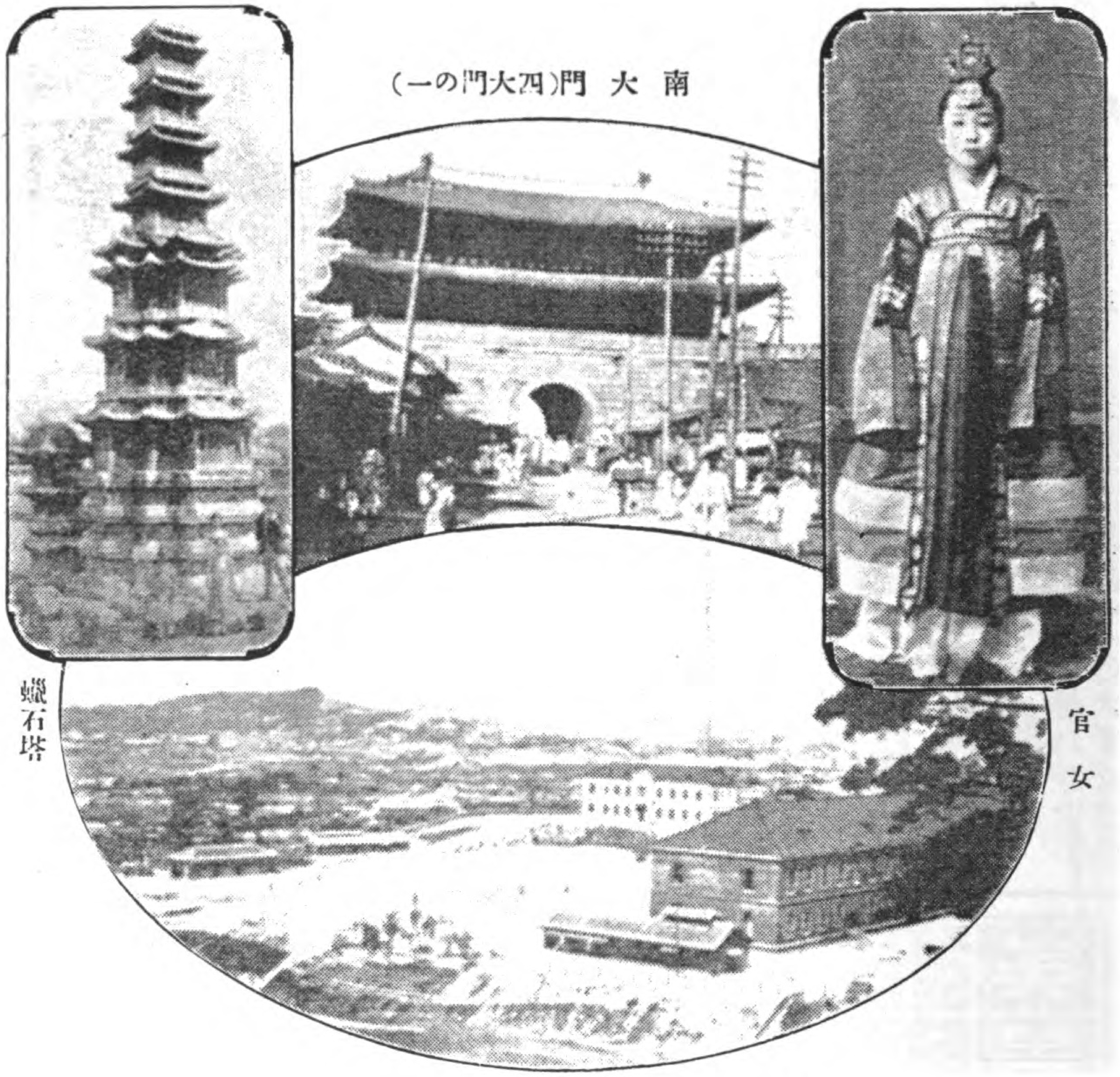
楠正行の墓（河内）



和泉式部古跡

韓國名物

南大門(四大門の一)



蠟石塔

官女

駐劄軍司令部

朝市場



(京城 奥田惠以子寄贈)

誌友おもかげ



(浅草)大沼きさ江



(京橋)青木すみれ子、余よれ子



(能登)牧野志嘉子



(豊後)安田初子、安藤貞子、平川正子



(日向)吉原富子



(茨城)内田きさ子、石なみ子



(駿河)渡邊久子



(上野)森村葉間子



(京都)高谷静尾子

誌友諸嬢の肖像を始め風景の優秀なるものは歓迎しますから其寫眞を澤山
御寄贈下さい掲載は到着順により未載の分は次號を逐つて御紹介します
(寫眞は御希望によりお返しいたします)

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

少年之友

少年少女の作文(雜誌)できれいでおもしろくッて安い皆様が日本一の大きなのは是れです。

第壹貳號は賣弘めの為特に増刷出來致しましたから又賣切にならぬ中に早くお買求を願ひます。

第參號 十一月分發行 目次

◎鼠の天長節(伊留間)◎新浦島(蝶二)◎わたしの日記◎幻燈 うつし繪(蒲原太郎)◎相模太郎(歴史)

懸賞 少年文壇 ▲作文▲和歌▲俳句▲新考物▲お笑草▲百事問答▲友達會其他滿載

正價 一冊たッた五錢 六冊郵税共金廿七錢 十二冊五十四錢

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目二十三番地 文光堂 振替口座一九五五五

市内特約 賣捌 神田區表神保町東京堂 裏神保町上田屋◎京橋區尾張町東海堂 其他北隆館良明堂外

少年之友

三宅克己先生書 (第一輯 第二輯 發賣)

美景水彩 繪ハガキ

上等舶來紙八色密刷新式砂目模様

無比廉價 壹輯三枚(一組)金拾二錢 送料九組まで二錢

平和紀念端書

こゝの重

一枚特製 金五錢

東宮侍講 本居豐穎先生閲 大町文學士 中内文學士序 國學院學士 小森松風君編纂

(全一冊中判美本 正價金三十五錢 郵税四錢)

古今名家 短文軌範

本書は○師範學校○中學校○高等女學校其他同程度の男女學生諸君の為めに作文上最も先にすべき短文の指南として極めて懇切に古今名家の傑作を編纂せられたる者なれば學生以外何人に取りても益する所大なるべし

製本發賣

發兌元 東京市神田區旅籠町一丁目 文光堂

天長節を祝ふ婦人は必ず婦人世界を讀まれよ

妻君必讀

婦人世界

令孃必讀

十一月三日 發行 毎月一回 第十一號 一冊 拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共九十錢 一年分一圓七十五錢

口繪

◎三皇孫殿下最近の尊影◎名家新婚寫眞◎◎有栖川宮姫宮殿下◎閨秀畫家とその畫◎◎高木博士の家庭◎悉く皆本誌獨特の珍品

彩色石版

川端玉章 跡見花蹊 小泉勝爾

弦齋夫人料理談

△菜は如何に漬けるべきか
△豆腐の天麩羅は如何に造るべきか…
△鯖は如何に料理するか…
△大豆は如何に料理するか…
△豆腐汁は如何に製するか

◎夫妻の選擇法…坪井博士
△男子は如何なる婦人を選ぶか…
△女子は如何なる男子を選ぶか…

◎如何なる家庭經濟法が五萬圓の財産を成したか
…月給取りの妻君は此實驗を聽け…
…貯金を望む妻君は此實驗談を見よ

小兒胎毒の話 ドクトル加藤照麿

▲胎毒は如何にして生ずるか…
▲胎毒は如何にして治療すべきか…
▲母體は如何に注意すべきか…
▲分娩後は如何に注意すべきか…

新式の月經帶 醫學士伊庭秀榮

月經の手當に苦む婦人は御覽なさい

婦人と寫眞

△古寫眞は如何に複寫すべきか
△婦人は如何に寫眞を學ぶべきか
△寫眞は如何に保存すべきか
△寫眞は婦人の職業に適するか

◎結婚前の準備は如何にすべきか
◎三輪田女史の面影
◎音聲を美しくする法…佐藤ドクトル

婦人の日常生活 …村井弦齋

▲臥床は如何に敷くべきか
▲夜具は如何に造るべきか
▲枕は如何に造るべきか…

▲寢卷は如何に造るべきか
▲湯たんぽは如何に用ゆべきか
▲燈火は如何に用ゆべきか

▲身體は如何に臥すべきか
▲寢臺は如何に用ゆべきか
▲不眠症は如何に治すべきか

家庭の平和と幸福を望む婦人は是非讀んでごらんなさい……

發行所 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社 郵便振替貯金口座參貳六番 賣捌全國書店

丙の二

(本科第一號　十一月三日發行)

最新式 婦人技藝講義

會員募集

●本會は時勢の要求に應じて起つたのです

●本會は女子に技藝と品性の修養學科とを獨修せしむる事及び修得の技藝を活用せしむる事を目的とす

●本會は以上の目的を達する爲め販賣部を設け會員の製作品の委託販賣を爲し一は國家の生産上に一は個人の生活上に强固なる基礎を建つる事を期す又實地練習所及研究會の設備もあり

●本會は機關として毎月二回技藝講義を發行します講義科目は刺繍、造花、袋物、編物、割烹、圖書、の諸技藝を主として加ふるに修身、家政、國語、英語、習字、法制、音樂、禮法、茶道、挿花、園藝等女子普通教育上必須の學科を講じます

●講義は各斯道の大家にして女子美術學校女子職業學校青山手藝學校高等師範學校女子大學跡見女學校三輪田女學校の諸先生

●講義方法は平易明晰なる文章を以てし且つ繪畫若しくは寫眞を應用して叮嚀懇切に講じます

●名譽贊助員として三輪田眞佐子、跡見花蹊、棚橋絢子、下田歌子、山脇房子、佐藤靜子、津田梅子の諸先生を始め其他知名の教育家本會を贊助せられました

●入會志望者は至急御申込み下さい●入會金は貳拾錢、會費は一ヶ月五十錢

●見本入用の向は廿五錢、會則入用の向は郵劵二錢御送り下さい

東京京橋區銀座一丁目六番地(振替貯金口座番號一七〇二)帝國婦人技藝協會

●名譽顧問として大隈伯、辻新次、佐藤進諸先生承諾せられました

毎號　皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第二巻　第拾四號目次



▲前號は發行の當日本社は賣切となれり

石版密刷 口繪—三宅克己先生 水彩畫(秋の溪流)　◉鏑木清方先生 繪はがき(紅葉)　◉竹内とよ子女史 繪手本(菊)

女子文壇



第二巻第拾四號

十一月一日發行

貴婦人たるより良婦人たれ

女氏なうして玉の輿に乗ると云ふ俚諺は、女子の虚榮心を挑發し、婦人の生涯を誤らしめた事は少からぬてせう、是を善い意味に解釋すれば、女も男子同樣、心掛次第で出世すると云ふ事にも取れますが、多くの場合に於て然うでなく、一時の僥倖、男子に盲從して榮華を極めることに用ひられるやうです。近頃は又同じ意味に近い事を、具體的に世に行はれる模樣があります、即ち地位とか身分とかの高い、所謂貴婦人は敬すべく尊むべきものには相違ありませんが、貴婦人は社會の極く少數者に限られるので、凡ての婦人の模範と云ふ意味にはなりませぬ、玉の輿に乘つて居る婦人より、賤が伏屋に煤けて居る婦人に、却つて摸範とすべき者が多い、多くの女子は貴婦人たる必要なく、又貴婦人たる運命はないので、徒に是を羨み、あこがれるのは其品性を荒ましめる許りて、それよりか人格の立派な良婦人になつて欲しい、海軍大將であるから東郷氏は豪いのでなく、謙讓の德を具へた良將であるから、萬人是を仰いて、海軍の光輝を一の東郷平八郎と稱ふ人格の勝利に歸するのです、男と女との相違こそあれ、慕ふべきは人格にある事を忘れてはなりませぬ。

あはれ月よ

變ロ調　四分ノ四拍子（短旋法）



あはれ月よ

小森松風作歌
高井鳳南作曲

一、千草にすだく虫の音を、
尾花のそでに招かれて、
きゝつゝたどる野路の末、
のぼりし月のさやけさよ。

二、岡のしたみち過ぎくれば、
流るゝ音はかすかにて、
土橋かゝれるいさゝがは、
そこにやどれる月のかげ。

三、この川かみに寺やある、
この川しもに誰かすむ、
かねの音さへも響くなり、
ふえのねさへも聞ゆなり。

四、悲しき虫の音にそへて、
思はずしぼるわが袖の、
鐘のひびきにふえのこゑ、
なみだにつきも宿れるか。

繪畫的の言語

文學士　武島羽衣

文章、ことに美文は作者の心に感じた事を言語にあらはしたものであるからして、その言語といふものは作者の感じたとほりを讀者に感じさせるやうな言語を用ゐなければならぬ、則さびしい事をしるすならば、それを讀むものが眞にさびしく感ずるやう、うれしい事をしるすならば同じく、心からうれしく感ずるやうな言語を用ゐなければならぬ。他の言にていふと作者の考へてをる事物が繪畫の如く人の心にはつきりと見えるやうに文章をかゝねばならぬ。實にこの繪畫的といふことがきはめて必要なる事であるので、これがあつて始めて人は感動を起すのである。

人は日露戰爭の旅順の攻擊談を聞いてあはれと思はぬではないが、しかしそのさまをあり／＼と書いた繪畫を見たならば必ず一層あはれな感にうたれるであらう。これ則繪畫的といふことが人に感動をおこす證據である。こゝにおいて美文が人に感動を與へることを唯一の目的とせる以上は言語を繪畫的にしなければならぬといふ事はいふまでもない事である。

さてしからば、いかにしたならば言語が繪畫的になるであらうかといふにこれに效力の最つよい五の法則があるかと思ふ。それは何であるかといふと、

一、たとへて言ひあらはす法則。
二、狹く言ひあらはす法則。
三、對照して言ひあらはす法則。
四、含めていひあらはす法則。
五、急所を捕ふる法則。

第一のたとへて言ひあらはす法則といふのは、事物をいはうとする時直にその物を表面からいふのではなくて外の一層いちじるしい物、目につきやすい物にた

とへてあらはす事をいふのである。たとへば大喝采といはないて拍手は急霰の如くに來れりなどやうにあらはすをいふのである。霰は音を立てるもので、その音の大なることは喝采よりもいちじるしい。よつて、喝采を以てこの音のいちじるしい霰にたとへていひあらはしたので、喝采のひゞきのさも鬨然たりしことが想像されるのである。歌の例ではあるが古歌に

空の海に雲の浪たち月の船星の林にこぎかくる見ゆ。

といふのがあるが、これは

大空に雲たちわたり三日月の星の中にぞかくれたる見ゆ。

といはうより繪畫的である。これ前の歌には空を海にたとへて空の海といひ、雲を浪にたとへて雲の浪といひ、月を船にたとへて月の船といひ、星を林にたとへて星の林といふやうに、たとへがあまた用ゐられてあるのに、あとの歌には少しも用ゐられてないからである。吾人は前の歌を讀む方がはるかに感動をひきおこすのである。

第二の狹くいひあらはす法則といふのはいかにといふに、すべて世の中の事物は、細視すると、必ずあまたの部分から出來あがつてをるのである。それでそれらの部分の中にはいちじるく目にたつ部分もあるし、また目にたゝず、いちじるしくない部分もある。さういふ事物をあらはすに當つては、その全體をあらはしてをる言語を用ゐるよりも、そのいちじるしい部分をあらはしてをる言語を用ゐる方がかへつてその事物を判然と、いちじるしくあらはす事が出來るのである。たとへば美人といふよりも娥眉などいうた方がすぐにうつくしい美人といふ考を心にうかべる。娥眉は美人の一部分であるてあるけれども、しかし、ことにいちじるしい身體の一部分で、以て美人を代表するに足るべき部分であるのである。或は船といはないて白帆といふとか、年といはないて春秋といふとか、僧といはないて墨染の袖といふとかいふのは皆このせまくあらはす方法を用ゐて事物のありさまを一層よくうかばせ

ようとしたのである。

第三に對照していひあらはす法則といふのはあるありさまをあらはさうとする時にわざ〳〵その有樣と反對したありさまをならべしるすことをいふのである。たとへば白いものをあらはさうとて、それと並べて黑いものをいふとか、賑やかな事をいひあらはさうとて、それと並べてさびしい事を述べるとかいふやうにする事をいふのである。宮殿の燒跡を歌によみて、

今朝見れば燒野の原となりにけりこゝや昨日のもゝしきの庭。

といふたならば意味はわかるが、おもしろくない。それよりも、

今朝見れば燒野の原となりにけりこゝやきのふの玉しきの庭。

といふた方が、さも蒼茫たる原野のさまが浮んでくるのである。これは全く燒野の原といふ意味と全く反對の玉をしく庭といふ言語が下におかれてその力で上の燒野の原のさびしさが一層引立ちてきたのである。

奈良の大佛の繪をかくのでも、たゞ大佛ばかりを書くよりも下に人間一人をかきそへておくならば大佛は大きく人間はちいさいといふところから、對照の力でもつて大佛がまことに大きく見えてくるのである。

第五に含めていひあらはす法則といふのは十なら十の思想をあらはさうとするに十の言語を用ゐてあらはすのでなくて、五とか六とか、七とかの言語であらはしてあとの思想はおのづからその中にふくめられるやうにあらはす事をいふのである。歌と例をあげて見ると、夏若竹の長くなるのを見て、

時の間に若竹の背たけが窓より高くなつてしまつた。あゝわが子の背たけもこのとほりに早くだんだんと延びたならばさぞ嬉しからう。

といふ思想をあらはさうとして、これだけの言語を用ゐたならば未だ思想を含めていひあらはしたといふ事は出來ない。しかし、

時のまに窓より高くなりにけり我子のたけもかゝらましかば。

といふたならば前と比較して言語の數はわづかであるけれども、前と同じ意味はふくめていひあらはされてをるのである。半面の美人は、かへりて眞向の美人よりも愛嬌がある。言ば少なに多大の感想をあらはした方が、はるかに人の感をおこすのである。

最後に急所を捕ふる法則といふのは、ちよつと考ふると第四の法則と同じやうに思はれるが、實はちがう。第四のはある思想をあらはすに、なるべく言語を少くするやうにといふことを説いたのであるけれども、これは、言語の數の事は云々するのではなくて、ある思想をあらはすにその思想の急所ともいふべきところを看破して、それをあらはして全部の思想がおのづから浮びきたるやうにすることをいふのである。たとへば春の頃古寺のさびしいありさまを見て、それをあらはさうとするに、そのさびしいさまをあらはして思想にはいろ〳〵ある。堂のかたむきかゝつてをること、鐘も鳴らずになつてをること、僧侶のをらぬこと、櫻がちつてをること、塵がつもつてをること、風が悲しさうに吹いてをることなどいろ〳〵あるが、その中でも鐘の鳴らぬ事、櫻のちつてをるといふ事が最さびしい思想の眼目であると考へて

古寺や鐘もいはず櫻散る。

と一首の句に歌うたならば、これは巧みに急所を捉へてあらはしたといふことが出來るのである。

柔道に通じて急所をおさふれば大兵の男もころりところがす事ができる。文章の道に通じて事物の急所を捕ふることを知ると天地間萬般の事物を宛然眼前に躍動させることが出來るのである。

文章を書くことについて

大塚楠緒子

名家の方々でも文章を書かれるには皆それ〴〵流儀や習慣がお有りになつて、始から終まで水の流れるが如くに一勢に書かれてそれで名文を成す大家も有らうし、又一言一句澁りに澁つて書かれた一言一句が、そ

の儘名文を形づくつてゆくといふ大家もあらう、然し初歩の人がこれから文章を書き學ばうとするには大よその心得が要ると思ふ、先づ第一に己が趣味に合せて想を搆ふること、第二にはその組み立て方を考へること、第三には書かうと思ふ文章の姿を思ひ浮べてみるといふ事であらうと思ふ、櫻のことを書かうと思へば、先づ櫻の何ういふ點に想を搆へて書かうか、花の美しいといふ事のみ書かうか、或は美しいけれども暫時にして散つて仕舞ふ人生も其通りに果敢ないといふ樣に喩へて書かうかなど〻考へて見る、さうして第二には、その組み立て方を考へるので、始めに自分の家の庭の樣子を書き、次に一本の櫻が在ることに及び、その櫻の盛の時には友達を呼んで共に眺めた、然しもう散りはじめた、共に眺めた友達も既に遠國へ旅立つて往つたと續け、人の世も此通り無常で有るなどと結べば、兎に角に一の文章の形を成すのである、それから第三に文章の姿を考へ美文なり言文一致なり何ういふ躰にしやうかといふ事を思ひ浮べて、さて筆を取るのが順序であらうと思ふ、しかし筆が老熟して來たならば隨分人の意表に出づるやうな逆な書き方も面白いのである。

それから氣を注けなければならないのは文章の始と終とである、文章の躰にもいろ〱あつて、終始その論旨が能く通り意義明瞭でさへあれば先づ好い論文とか、又は其日〱のことを只其儘に書き付けてゆく日記躰のやうなものは別であるが、美文とか小說、殊に小品文などは殊更に始と終が肝腎である、とり分け始より終が肝腎である、終の括り方一つで龍頭蛇尾のうち壞しになることも有らうし、又死んでゐる全文に活を入れたといふ樣な具合になる事もあらう、それは書き起しの一行二行は、用意の無い讀む人の頭腦へ興味のある印象を書かせやうとする始めであるからなので、又終の一行二行は讀み終つた人の頭腦へ多少の勢力を與へ餘韻を殘させやうとするからなのであつて終の結びは殊更に大切である、未熟な私などは文章を書くにも至極亂雜であつて末段からまづ書いてゆくこと

がある、末の結び方を先づ思ひついて其一句二句が書いて見たさに新らしい一の文を組み立てゝみることさへある、それは勿論短かい文章のことでありますが、長い小説でも末のとぢめの拙ないのはどうも見劣りのする樣に思はれる、解りきつたことではあるが、文章を書かうと思ふ極初歩の方のために一寸一つ二つの注意を申してみました。

紛想録（承前）

文學士　沼波瓊音

工場の汽笛、豆腐屋の喇叭などが交つて、一時喧ましく聞える。そのうちに其等の音が消え去つて、唯遠くて子供の大勢遊んでる聲のみが殘る。非常に遠く聞えるので、聞くともなく耳を欹てゝゐると、心が次第次第に遠く往くやうで、一種悲しみに似た感が起る。幼時を追想するでも無く、健康を羨むでも無い、言はゞこの物質界以外に何物かを捕へむ〳〵と焦慮つて、心が浮游してるのに、なか〳〵捕へ得ないので悲む、といふやうな感である。

斯ういふ感は健康な時には仕事に紛れて起らないが、爲すに事なく唯惘然と病床に横はつてると起る。哲學はこんな心の狀態から産出されたものであらう。原始時代には健康な人間は或は敵人と戰ひ或は鳥獸を狩り、疲れては熟睡して考へ事をする暇は無かつたが、病氣勝ちな人間若しくは不具な人間は勞働もせず、坐るか臥るかして居り、健全な同類が晝間跋渉した山野を夢みて快く鼾をかいてる靜な夜も、目を覺まして居るので、自然想が遠くなり大きくなつて、哲理めいたことを考へるに至つたものであらう。即ち哲學は病人若しくは不具者が發明したものであらう。

空想といふとも、現實界に貢献することがあるものである。たしかエマーソンであつたかと思ふ。天文地理物理等の科學の大發見も、其端緒を開くのは古來文學者で、科學者はそれに覺醒されて實驗に着手して其發見を大成するものである、といふことを言つた。この論

は大に面白い。

白隠和尚が病僧に贈つた手紙に、病氣の時は大悟するに最適する、といふ意味の言があつた。

ところが平凡なる我輩は唯平々凡々と横はつてるだけて、空想凝つて世界を驚倒すべき大發見の端緒を開きも得せず、眞正見性の人となつて山河大地萬象森羅悉く是れ微妙稀有の莊嚴海なる事を徹見するとも得せず、甚以て天下太平である。

段々と夜の色が室内に淀んで來た。空氣は冷えて重く沈む。天井の木理ももう見えぬ。怒濤の中から斜に十字形の岩に飛び付いた女の畫の額の其の白衣のみがくつきりと白く書架の上に見えるのが今ぞ目につく。

あゝ夕暮、病人の堪へられぬのは夜よりも夜半よりも、寧ろ夕暮である。

人戀し灯ともし頃を櫻散る

といふ古人の句、折こそ違へ、身に泌々と感ぜられるのである。

婢が、點けた洋燈を持つて來て、枕許の小机に載せて行く。部屋中の物が悉く生きたやうに輝く。浮游して居た心が正に己れに還る。

日の光によつて物を見る晝は、己れが自然の一小部分たるに過ぎぬと思はれるが、燈によつて物を見る夜の室内は全く己れが作つた世界の如くに思はれる。燈も人造物、室も、室内の物も悉く人造物て、それがいづれも己れに使役され服從されてる。而して室外の大なる自然はしばらく忘れてしまふ。己れが俄に大なる者に感ぜられる。「我」といふものを意識するとが強くなつて來る。故に著述の如き、確なる自信を要すると外界より得た諸の經驗を「我」の手によつて解析綜合するを要するとは、日光の下に行るよりは燈の下に行る方が便利であるらしい。作家が多く夜筆を執るのもこの爲であるだらう。

しばらく夢路を辿る。

隣の人が「あアいゝ月だ」といふのが耳に入つて目が覺め、障子の方を振向くと、いつの間に雲が切れたのか、月光が一杯に漲つてる。

流石に興が湧いて、手を拍つて人を呼び障子を開けさせ洋燈を暗くさせる。すると櫻の葉の影が疊から蒲團の上まで涼しく流れる。己れが主になつた室内の世界は朧氣になつて、室外の自然が又もや大きく侵入する。

今日は御嶽樣の縁日で、太皷が賑やかに聞える。いつか或會で江戸の名物狸囃子なるものが問題になつたとを思ひ出す。牛込の友人が狸囃子が今度聞えたら同好の友に急使を發するから、直に集合して、聞きながら小酒盛をしようと言出し、僕も是非行かうと云つておいたが、その後また何等の沙汰が無い。しかし今頃では興が淺い。秋更けて月影寒き夜など狸囃子を聞きながら靜に酒を酌むなどは、大に寂びた宴だらう、と思ふうちに、又夢に入つた。（をはり）

女子文壇増刊

菊花月

十一月十五日發行

趣味ある生活（下）

巴里影

▲女性の勢力權威

消極的自衞の途より言へば、可憐なる女性の運命を擁護するに、風貌の美裝飾の美に注意するは勿論の事であるが、猶女性は智識を磨き地位を進め、立派なる家庭を作り又社交の花たるべき大なる天職がありまず、入つては所謂良妻賢母、出てゝは社交のオーソリチーて、社會の純淸なる趣味、高尙なる感情、單純なる敬虔の美德は、春晴の日光に浴しつゝある百花の如く、能く女性の感化擁護によりて生育せしめねばならぬのであります。女性の勢力は獨り家庭に止まらず、女性が現在出席せざる處にても、能く其勢力を認めらるゝので、男子の言語行爲習慣に及ぼす情況はなかなか優勢なるものです、假令へば社會の成功家の大半は婦人の潛勢力感化力によると云つても宜しい、靑年

紳士が才色双絶善良にして正直なる妻を娶りたりとすれば、最早成功の階段に上りたるので、銀行會社取引所に於て聞ふるは男子の音響のみなるも、其男子の音聲の一高一低は、家庭の裡より來れる勢力ある感化が始終其心思を刺衝したる反響の外ならぬのであります、進むで社交に對する理想より言へば、世の所謂不信僞善粗暴虚名非理も、清純なる女性の叱咜を受けて直に逃遁する等、地上における道德上の問題は總て女性により解决せられねばなりません、其他禮式、流行等趣味上に於ける問題もです。

▲女性が力量の泉源

女性が使命天職、及有すべき勢力範圍は中々重大廣汎なるものでありますが、風貌裝飾の美は可憐なる渠等が運命を保護するに必要のみならず、社交に於ける美の勢力範圍もまた非常なるものであります、一代美人の一顰一笑は直ちに一大潜勢力となりて政治上にも影響することさへ數々てす、併し美といふもの丶外に猶一層重大なる性命があります、力量の深き泉源があります、ソレは愛及涙若くは同情で、阿田か慈悲の涙、妻君が愛情の涙、婦人が感動の涙皆是恐るべき力量を持つております、帝王の威、陶朱の富も其力量に抗する事は出來ません、同情なる働きの結果は、女性が白い手も花の顏も絹の膚も水火に入ることを辭しませぬ、愛なる强烈の火は飽まで自己感想中の摸型に入れ炎々たる情焰の火で鑄成せねば已まぬのであります。さて又其優しい心は野の姫白合にも接吻を與へ小川の畔の名なし草にも涙を灑ぐのです。是か女性の內容の美、肉眼に映ずる風貌の美以外、異性を感化吸引する一大勢力、一大生命であります。たとひ外容の美は衰へても內容の美は不朽に其生命を傳へてをるのて、女性が力量の泉源は全く玆にあるのです。

▲運命開展の花

斯樣に特質使命を有しておる女性に對しては、是非其美質を助長せしむる爲めに、詩星グレーの所謂修養

を要求したいのであります。所謂其特質使命に適應せる事物の研究工夫です、實踐です、そして其事物の趣味によりて愉快に女性として品藻ある生活を送ることを言ふのです。

女性の力量及性命たる美や同情の志想を涵養せしめ、趣味ある生活幸福なる運命を作らしむるには、如何なる事物を研究するか、其は兩々性質の一致する點から文藝の趣味を持つことを推奬せねばならぬ、少くとも文章、繪畫、音樂等の修養工夫を積むで貰ひたいのであります、夫は各自の力量によりて科目の撰擇はありませうが、好きこそ物の上手なれて、諸孃の嗜好の方を研究されたなら、必らず趣味、快樂を獲得することが出來ます。美術中の最も感情的で人の性情を醇化せしめ向上せしむる音樂や、天地自然の美造化雄崇の思を描寫し遠くは宇宙近くは人事に機緘せしめて美と涙と愛との味を致ふる文章、繪畫抔は、主義的感情的に富める女性の本質より言ふも尤も適當であらうと思ひます、文藝の修養工夫を積みて其趣味を掬し得たる人は、風貌の醜を酬うて夫君の愛情を得べきは疑ない事です、美しき風丰は美しき顏に勝れり美しき行爲は美しき風丰に勝れり則ち美しき行爲は塑像若くは繪畫よりも遙に美しく總ての美術中最も美しきものなりと一般に唱導さるゝ位、たとひ眼に映ずる國色の美はなくも、精神の奧底より輝く婦人の强き光明は一生を通して消滅するものではありません、私は實に各自の力量に顧みて其使命特質に適應する事物を研究し、修養の結果高尙優美にして快活なる趣味を收得することは、女性が運命開展の花であると思ひます。

消極的に言へば、如何なる不運に遭遇しても、常に趣味上の快活なる慰藉によりて益々奮亢しつゝ遂に家庭の成功者となり、進むで積極的社交の人となりては、恰も櫻花の旭日に映ずるが如く、讃美崇敬の中心となりて、榮ある舞臺に翺翔することが出來ます、是に至つて私は趣味といふ意義の奧底に分け入り、寧ろ女性の運命を左右する一勢力として研究を求むるのであります。

（完）

想像力を養へ

（詩を作る人の爲に）

河井醉茗

本誌の新躰詩を見るやうになりましてから、恐らく何萬と云ふ多數の作を讀んだでせう、通じて言へば、諸孃は未だ大いに修養に努力なければなりません、新躰詩を作るには何と云ふ本を見れば作れるやうになるでせうとは、多くの孃樣から受ける疑問ですが、書籍よりも更に必要な、根本の力を養はんければなりませんので、書籍を讀んだゞけで直ちに詩は作れません、詩を讀み味ひ得る力を養ひ、更に自分の創意を養はねばなりません、創意ないものに作は出來ません、就中詩は此獨創の力が籠つて居ないと光彩を放たないので、今日新躰詩が獨立した文藝として、重く視られるやうになつたのも此所以です。

鳥は生ながらにして翼あり、詩人は生ながらにして想像ありとかやて、想像力のないものは第一に詩人としての資格が無いものです。諸孃のお作を拜見するに此想像力の無いものは大多數です、想像力が無いから詩題を捉える事からして既に平凡で、海とか、朝とか、花とか、戀とかを描いても、人の言い古した叙景や、比喩も、形容も無い但だ歌らしい辭を並べたゞけのものや、甚しいのは未だ今樣ぶりの夢を見て居られるのもある。例を擧げて言へば限りありませんが、一つ二つ言つて見ますと、「いさゝ川」と云ふやうな題であると屹度花瓣が浮いてあるとか、歌を書いて流すとか、笹舟とか、さゝやきとか、歌はれる材料がちやんと極つて居ます、「行く春」と云へば春の輦とか、佐保姫とか、少女の胸とか、夢とか、惜むとか、所謂紋切形の行く春です。兎に角詩歌の集を御覽になつて居るだけ、歌らしい辭は連なつて居ますが、誰でも連ねられる連ね方が、成程此人は此う言ふ風に海を見て居るとか、雲のゆきゝを斯う云ふ風に感じて居るとか、其人獨得の感想が少しも表はれて居ません。之れ一つは努

力が足りないから、成る可く自分の頭腦を苦めずに、人の使うた辭を並べて詩の形を製造しやうとするから起る弊所です。辭も其通りですが、想も亦其通りて、他が明星の光りに若き戀のきらめきを歌うて居ると、自分も其通りに明星を歌ひ、他が牡丹を火と喩へて居ると自分も火に喩へる。それも新しく出た詩人の先輩の最も好い處を眞似するのなら未だしも、初心の中は免れない手段として或は推奬もすべきてせうが、諸孃方がお互に同じやうな着想を言ひくらべして居るのは、甚だつまらんことてす。手本にするなら成る可く優れたものを手本になさい、自分と同じ程度の人の作を手本にして、想像を搆へたり、着想を練つたりした處て、其以上に出る事は困難て、何時もコンマ以下て甘んじなければなりません。月と太陽は水平線の上に表はれてこそ光輝があります、水平線下ては何の光輝がありませう。

　斯く申した處で諸孃は何うしたら想像力を養ふ事が出來るてあらうと、お問ひになるてせう、前申した通り一つは生來てあつて、何うしても理窟詰の頭腦の人には、想像力も養ひかねるだらうと思ひます。矢張自然に想像力の豊かな傾向を持つた人てなければなりません、文藝に興味を持つ人なら、多少想像力のあると云ふのは實際で、數學の好く出來る人が、數理的の頭腦があると云ふのと同じ理由です。其多少持つて居られる想像力を、或ひは自然を觀察するに當りて新しい眼て見るとか、人間を解釋するのに新方面を發見するとか、想像の餘地はいくらでもあります、詩歌類の優れたものを讀むことも勿論想像力を養ふ好い助けになります。何れ追々例を擧げてお話をいたしませう。

東京だより

▲二十種に近い新聞紙は必ず未明に配達せられ、毎日幾種かの出版物は新しく發行せられ、電車のレールは幾尺宛か延び、市區改正の道路は幾寸宛か廣くなり、十萬の男女學生は三四時間乃至五六時間の新智識を得、汽車の新橋に發着する數は百回以上、圖書館はいつも滿員、劇場はいつも大入、郵便局のスタンプは一分間をあやまらず、電話のお話は三分間で濟む、長屋の奥にも酒屋の御用は注文を聞きに廻り、房州の鰯は魚河岸に躍る、黒塗馬車はやんごとなき方を乘せ參らせ、一代の學者政治家も往來に手車を飛ばす、勝手元の栓を捻れば玉川上水は滾々として溢れ出て、電燈は暮れるを待たずに輝く、陳き物は壞れ、新しき物は築く、物質的文明の力は海潮の寄するが如く寄せるが、是皆思想界の進歩に伴ふ現象たるに過ぎない、あゝ活動の都會、東京の一日▲一人は友染縮緬の長い袖を垂れ、羽衣ショール、白のリボン、重ね草履を穿いた我令孃一人は天鵞絨に鳥の羽を挿した花冠を冠り、薄黄色の裾ながやかに石疊の上を摺つて行く若き西洋婦人、相並んで銀座の街を語り行く、勿論兩個とも英國語、斯う云ふ處を見ると日本が大きくなつたやうな氣がする▲純粹の女學生で海老茶の袴を穿く者は次第に少くなつた、紫がゝつた色が多いが必ずしも一致しない▲一日前後に雜誌屋の店頭に立つて見ると新刊雜誌の山を爲して居る、『文藝倶樂部』の新しいのが出たか、未てす、じや又と云つて歸る人もあり『女學世界』は出ましたかと聞く女學生、少年雜誌の投書欄を一心に立つて見て居る書生は、自分の投書が出て居るか居ないかを見て居るのであらう、而して最も早く市中の雜誌屋の店頭に積まれるのは我『女子文壇』である▲與謝野晶子の最近の詩集は『夢の華』と題して金尾文淵堂から出版された、躰裁は『舞姫』と同じこと。近く『三人叢書』と題する小説が祐文社と云ふ新しい書肆から發行せられるさうだ、三人とは風葉、秋聲、春葉で、年四回此叢書を出して新作を公にするとの事。『秀才文壇』は『青年と處世』と題する趣味ある增刊を出し、本誌も例の通り增刊を出す題は『菊花月』。家族合せの出版元内外出版協會は新年の遊戲品に『國旗合せ』と云ふのを賣出す由、又新年當込の日記類は方々から出版される、矢張博文館のものが一番信用あるらしい。











○お車（特別二賞）　日本橋區南茅場町一六、升本方　田川よね子

○海岸（特別三賞）　小樽區色内町六一　岩谷緑子

○搭（天賞）　相摸國中郡平塚町廿四軒町川岸方　馬島とよ子

○草刈（地賞）　神戸市山本通五丁目廿一番地　林董雨

○夜なべ（人賞）　東京市深川區佐賀町二ノ二〇　海法佐世子

文學士　沼波瓊音先生選

論文

天

○成功と失敗

名古屋泥江町　小山かく子

廿錢の日給に忠實なるものは、又奏任官たり勅任官たるの資格あり。

『なに今の位置は、ほんの糊口凌ぎの腰掛さ……』と憶面もなく腰掛根生をさらけ出し、自己のヨリ以上の人物たることをほのめかす人は、遂に其腰掛にも居たゝまれず、果は路傍にたつ乞食の一人とまでなり下るに至るべし。

成功家たらんには、勤勉、忍耐、克己の諸德に加へて、臨機應變の頓才を要す。

吾人は成功家とまで持囃されずとも、失敗の生涯を送らざれば可なり、四千萬人悉く成功家たらんには、成功は失敗の異名たるべし。

己が職に力を盡して眞面目なる人は、終りまで失敗せざるの人なり。

眞面目は絕對に成功の要素ならざるべきも、百に百失敗せざる要素たる也。

成功を希ふ前に、先失敗せざらんことを怖れよ、やがて之れ成功の門に入るの道なり。

（評）斯る質實の論當代に甚必要なり。

地

○吾人の快樂

能登羽咋郡釶打小學校　森田みつ子

人間は誰しも其職業に於て、其生活に於て快樂を望まぬものはないが其望み樣が人によりて各違うて居る、或者は麗衣を纏ひ美食に飽くを以て最大の快樂となし或者は金銀珠玉を積むを以て最大の快樂となし或者は豪農豪商となることを望み或者は政事家となり又は大臣大將となることを目的とせるものもあるであらう、けれども唯獨り最も高尙であつて而かも偉大なる快樂を得ようとして居るのは吾人小學敎員である。

斯く云へば氣の早き者などは驚いて或は云ふであらう何たる低小なる見解を有するものだ俸給は妻子を養ふ

に困しむ有様ではあり、日々集つて來るは鼻垂らしの椀白ものばかり、それを守して居たからとて何が快樂を得られうやと、然り、然らば云ふ人に問うて見る、其日々集つて來る椀白者は後年成長して猶鼻垂らしの不甲斐なき者なるかを、前に列擧し來たる豪農豪商大臣大將は其幼時鼻垂らしの椀白者でなかつたらうか、彼等は何れも其幼時吾人先輩小學教員の手に依て今日の地位に至つた根本教育を施されたものである、吾人小學教員は決して麗衣美食金銀財寶を目的とせるにあらで唯精神的に其の快樂を求めらうとするものである、我教へたる兒童の他日有爲の人物となるを以て滿足するものである、一例を擧げて示さうか余一日修身教授の時恰度訓話が元寇の忠勇者河野道有の事であつたから附説として日露戰爭に於ける決死隊の有樣を話し引いて教訓して曰はく此後猶一度日露戰爭の避くべからざる所以を説いて其時こそは皆さんが兵士である今より覺悟せよと云ふに何れも切りに手を摑み拳を固めて曰はくハイッと語氣鋭く答へた余は此時恰かも天に登る心地し快感今尚忘れられないのである。

（評）余は實着なる小學教員に逢ふ毎に聖賢を目のあたり見る心地して涙を垂る。



かげ（賞外）　加賀鶴來町　波佐谷碧子

◯人影

紀伊那賀郡川宗村　前田かほる

人常に信濃なる田毎の月の影を賞す、これ田毎に映れる月影を翫ぶなり、人多く函嶺なる逆かさ富士の勝を愛す、これ湖水に落つる山影を稱するなり、春の曉に柴扉を出て丶淡霞の奥に立つ村舍の朧ろなる影を見ては、吾も坐ろに歌情を起し、秋の夕に窓戸を推して炊烟の間に峙つ小阜の微かなる影を眺めては、吾も轉た詩嚢を探る、山を縫うて木の間に消ゆる汽車の影は繪にも畫かるまじく、川を渡りて蘆洲に隱る丶漁舟の影は筆にも寫さまほし。月を指して盈虚を説くの翁の影と、星を示して地球を語る學者の影と亦をかし、五畝の田に落つる雁の影、

十歩の園に佇む人の影、何れか繪ならざる、月下にそぞろあるきすれば、我を追ふものは我影なり、夏のまひる旅に疲れて渇を覺ゆるの時、樹蔭の清水には行人の影を止め、冬の夕まぐれ業に飽きて饑を感ずるのとき寒村の茅屋には燈火の影をうつす。

若し夫れ吾を待ちつゝ門に佇む、弟妹の影はうれしき中のうれしきものにして、飽かず惜しと思ひし友を乗せし車の心なく森のかなたに影をかくすは、悲しき中の悲なり、誰れかまた忘れん。

嗚呼思ひ來れば影ばかり奇しくまた面白きものはなし其形ち見るべくして、捕ふべからず、寫すべくして、語るべからず、むべなり、書く人の心苦しむるものは、影の配合にありといふことや、景は影を得てます〳〵よく、勝は影を待ちて。愈々よろしといふことや。

（評）新奇なるを愛す

（又曰）この頃唯といふ字と誰といふ字とを相誤りて用ふる人不思議にも甚多し序を以てこゝに注意しおく。

秀逸

○世渡り

播磨　奥平にしき

われ等の運命はまことに不可思議なるものなり、まことに危きものなり、思ひもかけぬに天災あり地變あり火事盜難病氣怪我たれかこれを豫知するものぞ、今日無事なればとて明日をはかるべからず、朝に樂しきも夕には如何なる運命の手に弄ばるゝやも知るべからず、はかなき哉人生、古人がこれを風前の燈葉末の露にたとへしもことはりなり、かく觀じ來れば世を捨て山寺にも入りたき心地やせん、されどこれ不可なり、然らば如何にして此のたのみなき世に處すべきか、曰くはしたなき厭世主義に陷らんよりは、須らく先づ修養によりて信念を固めよ、變に遇うてもいたづらに騷がず、災を受けてもみだりに驚かざるだけの信念を作り置きて、たゞ世のため自己のため、はた子孫のために營々として力むべきのみ、かくてこそ國運發展の聖代の民たれ。

又思ふ、社會は實に不公平なるものなり、正義を唱ふる人の世に容れられざるも多く、奸者の世に時めくも少からず、一つの取柄なき凡庸者流が手腕ある英雄の上に立ちて、得々として傲れるを見ることしば〳〵なり、嗚呼よきものも時に不遇に終り、優れたるものも必ずしも勝者たり難し、これ不公平の極みならずや、然りと雖も之を以て直に世を恨み社會を呪ひ、はては自らをも棄てんとするは不可なり、世は如何にもあれ

人は如何にもあれ、われは践むべき道を践み竭すべき事を竭し、而も進取の氣象を失はず、常によりよき明日を得んことを力め將來をして益々光榮あらしめんことを期すべきなり。

(評)我に践むべき道ありとすこれ高き信仰なり。

○希望

滋賀縣　辰井ふみ子

希望！人生は希望也。

秋はさびしき夕の野に立ちて、天の一角に爛たる明星をのぞめ、そこに一種の翠線にふるゝ所の敎訓はあらん、問ふをやめよ、これ希望の啓示也。

希望！そは大いなる慰藉者也、大なる指導者也。

希望！そは青年也、活動を意味す、愉快を意味す、死者の如き老年に非ず。

希望、そは積極的也、滿足の如き消極的のものに非ず。

希望！そは光明也、希望の存する所、破壞の惡魔もそを怖れて敢て近寄らず。

あゝ希望!!人は實にこの希望あるによりて活き、希望なきに至りて死す。

(評)滿足を消極なりといふ痛快。

○時の車

秋田　黒丸ＴＫ子

行きて止まざるものは時の車なるかな。我を載せ人を載せ天地萬物を載せて常に走れり。彼は抑も何れより來り終に何れへ到るべきか。人は唯自己が載せられつつある間の事を知り得るのみ。彼が發着の場所に至ては假にも想像し得られざるなり。彼は此の如く無窮無限の軌道を有せるに拘らず亦實に極微極幽なる形を以て行くなり。看よこゝにやあると思へば既に過ぎ去りて跡を留めず。そこにやあると見れば未だ來らずして影をも示さず。さりとて彼は少しも片陰に躊躇せざるなり。彼が形なき輪は常に人の心の中に軌りて大に其聲を放てり。而して勤勉家の前にては大に勉めよと叫び。懶惰者の傍にては徐に遊べよとさゝやく。彼れ抑も二心あるか。否々彼は實に公平にてあるなり。何となれば貴人は馬車に乘りたる儘そをのせ賤民は荷車を牽きたる儘そをのせて一も偏頗なる差別をなさざればなり。彼が輪の廻たる程は通常我指の屈めらるゝ數によりて證せらる。而して彼は小兒の爲には常に旋轉の鈍きをかこたれ。老翁の爲には常に經過の敏きを歎かる。彼も亦便利の相反せる雙方を滿足させん官能なきか。否々彼は實に靈力を有せり。何となれば善者は一たび衰ふるも終に來て之を救ひ惡人は一たび榮るも終に往て之を斥け必らず應報の道を誤らざればなり。あゝ……時の車。抑も汝を馭せるものは誰ぞ。我をして少しく物言ふことを得しめよ。我將に汝が爲に聊か告

ぐる所あらんとす。然れども如何せん彼れ終に我が爲に一言を告ぐる間だも運行を留むるの猶豫を與へざることを。

（評）味ふべし。

○我多讀主義

東京　中島幾子

◎支出の常に收入に超過せんか、其の人の財嚢や、到底永續すべきものにあらず。少なく讀んで多く書かんか、其の人の文や、淺薄皮相、徒らに讀者をして嘔吐を催させんのみ。

◎今の年少者が文を囑するもの滔々皆これなり、その何の爲めにしかく文を囑するもの丶多きか、曰くたゞ名のために、曰くたゞ黃金の爲めに。

◎名譽や黃金や、抑も何するものぞ、人は名譽のために存するにあらず、人は黃金のために存するにあらず、若し名利のために文を作りて他人の嫌厭を買はんよりは寧ろ全く文を作らざるに如かず。

◎名利以外に文を作りて、自からの慰藉となさんと欲せば、須らく多く讀まざるべからず、少なく作るも多く作るも、そは作者の勝手なり、たゞくれぐれも多く讀む事を忘るべからず。

◎われは十人の作家の出でんよりは、百人の讀者の出づるを望む。

◎多く讀めばとて、決して書籍そのものを智的に解釋するにあらず、書籍より獲たる敎訓趣味その物を以てわが人格を高尙ならしむるにあり。而してこそ其の人の言々句々常に金玉の文字をなして、恰も清泉の滾々として湧き出るが如かるべし。

（評）讀まざるは實に當代の缺點。

○既往の失敗を思ふ勿れ

麴町　杉本若葉女史

人一度奮勵して成功の光に浴せんと思はゞ、必らず既往の失敗を思ふ勿れ、只猛進して力の限りを盡すべし、既往の失敗を思ふ時は只煩悶を重ね失望不平痛激の中に蠢動せざるべからず、然して折角決心をなして活動せんと思ふ事も活氣を失ひ智慮を喪ひて五里霧中に彷徨して何の得る所もなかるべし、殊に今日の如き女權の揚がりつ丶ある時には一倍の勇氣と猛心こそ必要なれ既往は既往なり失敗は失敗なり、既往の失敗は如何に悲哀痛恨したればとて恢復を期することは不能なるを如何にせん然るに人は往々過去の失敗を思ふて當時か丶る事をせざりしならば現今はか丶る逆境に立たざるものを同窓の友に遲れを取らざるものをなぞと、とりとめも出來ぬ思ひに耽り益々心を昏亂の渦中に投じて了ひ遂には自暴自棄に陷りて終生成功の冠を得る能はざるべし。

吾人は如何に失敗し如何に逆境にありと雖も、唯自己

の境遇に甘んじて過去を顧省せず、全力を奮つて社會に盡瘁すべし然らば吾人は過去の失敗の幾層倍なる成功を奏して自ら滿足を見るに至るべし
故に過去の誤謬は唯水と流し、活氣ある思慮ある活動をなし、有髭男子をして、呆然たらしむる決心なかるべからず。
苟且にも人を咎むる莫れ世を憤ること勿れ自棄を起すなかれ妄りに厭世の念を起すなかれ。

○故郷を愛する情

茨城縣　小石川しず子

吾人々類が具有せるその中にて、愛情より貴きものは非ず、而るに愛情の範圍極めて、廣ければ、その人に依て各々その愛を異にし、又その愛の度に於ても厚薄深淺有べし、花鳥風月を愛し、音樂美術を愛するは、一般に極めて高尙優美に、吾人をして愉快ならしむるものとせり、然ども此等の愛情は吾人々類中に於て稍々思想の勝れしものにあらざれば起り難し、未だ愛情中の最も愛らしき情にはあらず、然らば賢愚貴賤の別なく一般に具有する所にして而も最も愛らしき情は如何なる情なるやと云ふに、即ち吾人が故郷を愛するの情之なり、如何となれば、此情は誰れ人と雖も具有し、而して如何程此情を高めたればとて、他の愛情の如く害を生じ罪を作るの過なければなり、吾人が遠海絶島に赴き共に肝膽を吐くべき親子なき時、或は非常の困難に陷りし時、或は必死の病に罹りし時に當りては、故郷を追憶せざるとなし、斯かる時に際し故郷の人の來りて問ふあらんか其喜悅愉快は如何ぞ哉、實に言語文辭の能く盡す所にあらんや、
而て斯る不幸の時のみ然るにあらず、吾人が功成り名を得たる時と雖も、故郷に歸りて其功と名を輝さゞれば、如何なる富貴を極めて一身を愉快にし得るも、吾人が眞の滿足は得る能はざるなり。



クロッケー（賞外）　大阪北堀江　倉野たま子

新刊紹介

△女子の衛生（下田歌子著）。むつかしい生理學や醫學の書物とも違ひ、又衛生を看板に如何はしい記事を載せた流行の際物とも違ひ實地眼前の衛生の心得となるべき事柄を言文一致體の分り易い文章で書いたもので一寸机に向ふ時は何んな姿勢がいゝとか食事の時間は何時がいゝとか姙娠中は何んな心得が入るとか手近な處で女の心得になるが事多く書いてある和本綴り（定價四十錢富山房發兌）

△ヴアイオリン手ほどき（石原重雄著）。西洋樂器のうちでもヴアイオリンは最も廣く行はれて居るが使用法を親切に書いた書物は少ない本書は簡便に練習法を示したもので凡て圖と譜が入れてあるから初心者には重寶であらう（定價五十錢富山房發兌）

河井酔茗先生選

新體詩

[illegible]第三賞

○わかき羞らひ

下谷區上根岸　太田秋津子

ふさひぬと宣る母が笑み　幼なくも頰の染められて
影を落せる姿見の　鏡ぞと見るおもぶせや。

馴れねばとみに肩巾の　廣くなりたる心地すれ
羞らひつゝもともすれば　わが手は肩にのみ行くよ。

あゝ父母がいつくしみ　さち身に享けて憂知らず
事なく生ひぬ十八を　恥かしわれが肩揚げ取れぬ

太田さんは文に詩に行く處として佳ならぬはないやうですが、新體詩も此作を示されて初めて眞の技倆が分りました、別に人をおどかすやうな思想でもありませんが、處女の感情を捉えるには最も此邊がふさはしく、句の配置も引しまり「事なく生ひぬ十八を」など何でもないいて、實は一寸眞似が出來ないいてす（酔茗）

天

○遊蝶花

近江國栗太郡物部村字大門　宇野民子

あねよ妹よ下髪に　結ぶリボンのひら〳〵と
一夜夢よりぬけ出でゝ　花となりたる花すみれ
春の光りにあくがるゝ　あとなき魂よ自ら
蝴蝶に似たる花なれば　名もさりながら遊蝶花
いぶき徐らに溫に　吹きても見よや女の童
花はなよらに打羽ぶき　そよ吹く風に舞出でむ

作者は詩を讀むことの深い方と思はれる、自ら獨創の材料ではないが、能く詩趣をのみこまれて居るには感服する（酔茗）

地

○花御堂

長野縣諏訪郡下諏訪　山田くに子

芳香迫る橄欖の、　彩葉がくれに星匂ひ、
敎法光明永劫の、　靈氣薫んずる花御堂、
生命の道を照したる　聖靈こめて燦爛と
面てり奇しき聖燭の　扉とふして照りすけば
渴仰あつき信徒らは　神の現示とをのゝきて、
我身低くきを思ひつゝ、　花の甘露濃睪に、

七罪洗ふ洗禮や、奇しき精靈を胸にゑて
新らしき人生れては、永劫喜びの地はなりぬ。

凡手ではない、類似の歌は幾許か見たやうにも思はれますが、此の如く整美した格調には接しなかつたやうです(酔茗)

（人）

○沼に來て

小樽色内町六十一番地　岩谷綠子

青葉若葉に包まれて
日さへもれざる古沼の
畔に立てば黄昏の
寂寥われに迫るかな。

ふと水面をば眺むれば
やみにも白き蓮花は
一つさびしくほころびて
神秘の匂ひ崇きかな。

昨日慈ひし其時に
戀に泣きたる沼姫の
手を差延しそをとれば
小魔の如くさゝやきて

茶屋の媼の語りたる
落しゝ簪にあらずやと
衣紋をつくる錆び波は
少さき胸を衝きにけり。

白蓮華は凡ての人が佛くさい花のやうに聯想するが沼姫の簪としたは作者の手柄です(酔茗)

（秀逸）

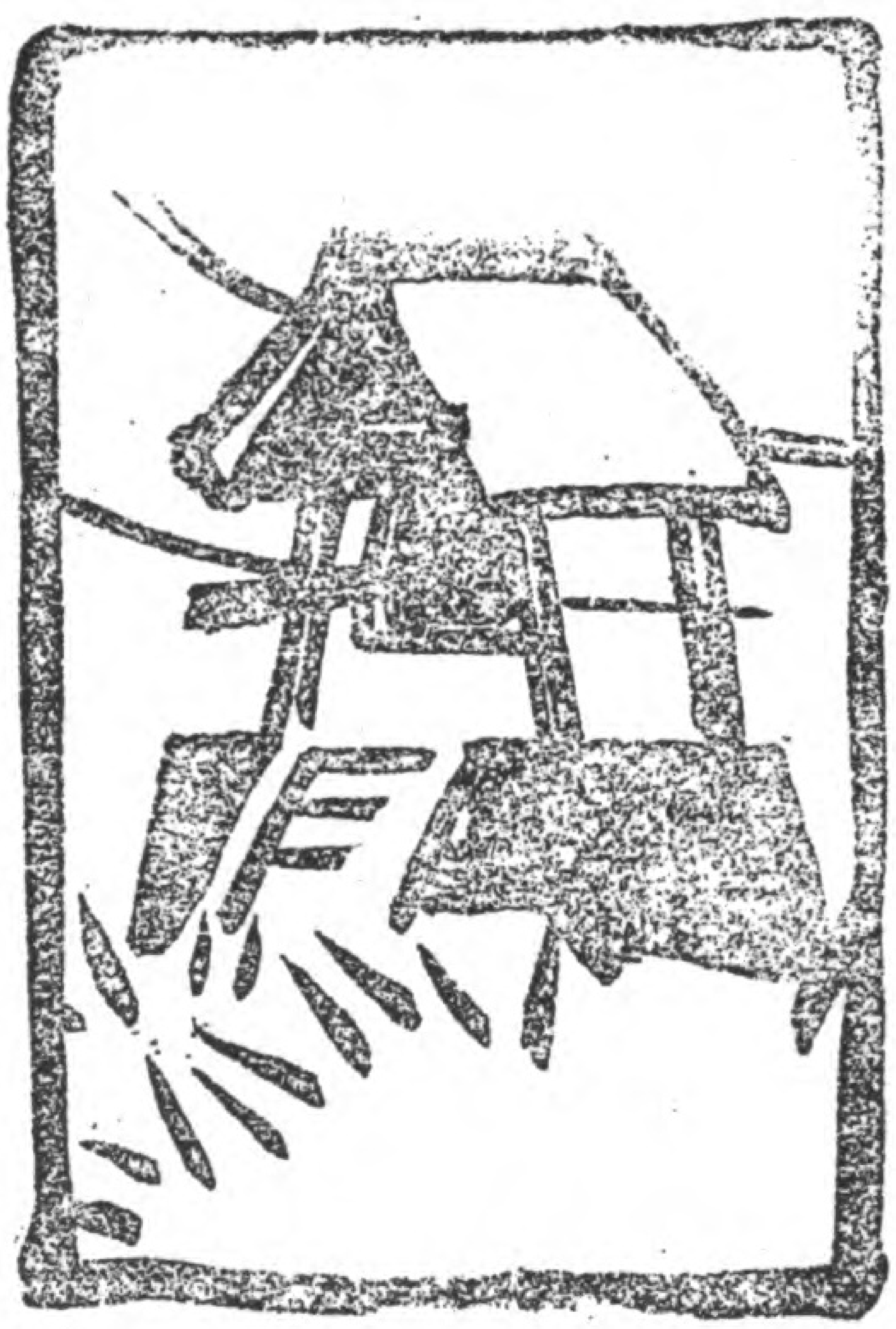
○小窓に立ちて

下谷　柳子

萩まだ若き初秋の
小窓に倚れば寂しくて
市に揺らく大鐘の
奇しくも弱き胸うつよ

村に育ちし野娘の
田に草取らば安かるを
若き希望に狂ほひて
あゝよき母を野に捨てぬ。

それよ蛇棲む草床に
鄙唄低ふ身を投げて
籠を枕のしばし寐に
虫聽きながら夢に入り
赤き前垂よごさじと
帶に卷いては片膝に
鎌とぐ山の澤流れ
さかしきかにゝ興ぜしも



鐘樓（賞外）　北品川　近藤しま子

思へば過ぎし昔よと　見え隠れする故郷の
筑波望めば怪しうも　麓の人のたゞ忍ばるゝ

「あゝよき母を野に捨てぬ」は全篇の生命、善き句を得られました（醉茗）

○詩集『花守』を得て

名なし小草

十三胸を病みてより　はかなき運命かこちては
寧ろ大江山の洞に入り、　冷石を抱いてくちばやと
母を泣かせしあゝわれは　罪深かりし子なりしよ。

冷たく疑りし人の世に　いかでまことのうたあらん
僞りの詩にあきしわれ　今こそ得たれ詩の神の
息吹通へる詩集を　其の名もゆかし「花守」と

あゝ詩集や花守や　世尊の經と相持ちて
愁ある日は歌誦じ　苦痛ある日は經を讀み
神の定めし其の日をば　たゞ安らかに待たんかな。

夜雨は苦惱の多い人、又は此の珠の如き純白の人に、最も痛ましき瑕を與へました、慰みとするのは母と詩ある許り、私どもは友人としても常に彼を慰むる事の足りないのを憾みとして居ます、名なし草君の好意は本人に代つて茲に感謝を表します（醉茗）

○天なる戀

下野　新井琴子

うす紫の帷を垂れて、　天なる宮の敷石を、
とゞろ／＼に出ましの、　金車ゆるげき朝戸出や、
珊瑚の冠しづ／＼と、　日の神遠く眼蔭して、
白銀色の薄絹に、　耻らふ乙女さながらや、
藍に澄みたる山の端に、　ゆるき裳裾をひきはへて、
靜かに放つ殘光を、　あな美はしの月よとて、
戀の焔を高噴きつ、　追ひて行くらむ氣はひ哉。
月はもとより雄々しさの、　神を憎くしと思はねど、
夜と晝とに別たれて、　立ち戻らむは叶はねば、
日を追はむとて隱るゝを、　なじかは逃ぐる月姫と、
急ぎ足なる秋一日、　遂に逢ふ可き時は來て、
天なる戀は新らしく、　はた美はしく繰り返さるる

少しお伽ばなしめいて、詩材とするは淺い、美文とした方が成功したか知れませぬ、月や日を捉えずに外のもので此境地を歌つた方が新しき戀になつたでせう（醉茗）

○蝶の行邊

赤坂　齋藤紫桂子

御簾かゝげて姫君が　霄の歌ほごなげかけし
百合の花の香さゆらぐや　小蝶まよひて亡からの
敷ねの花と休らへば　薄紫のあや衣の
裳裾をかるくふれまして　「ためしの國に御神の
さとしのみ言かしこみて　務めし汝のむかひ來」と
百合其まゝにフトちりて　銀川ゆるう流れいる
神秘さゝやく森の奧　とこ世の春の花園の
とびら開きて神の子が　金の翼に衣かへて

妙なる聲に歌ひつゝ　蝶復活のウエルカム

蝶の行方な神秘に歌はうとして或る點までは想像が及んだやうてす　お今少し透明な着想をしてほしかつたてす（酔茗）

○我の祈禱

京都市　白　的　女　史

我の祈禱は偽善者が　護模の木の間の會堂に
たゞ唇にくり言を　徒らにする聲ならず。

我のいのりは塵の世に　譽と富を得んが爲
偽りの贄捧げつゝ　幸を求むる聲ならず。

青き牧場に放ちたる　牛を集めて夕燒の
薄るゝ雲にかゝる時　自づと起る感謝あり。

黄金輝やく環の中に　神のみすがた描きつゝ
心靜かに弱き身の　犯せし罪を悔ゆる時。

天つ使のまとひます　白き衣の袖のもとに
幾重の雲を分け出でゝ　清き靈にかへるなり。

高潔なうた、信仰ある人のうたは自ら威厳があります（酔茗）

○夏の神

德島縣　大　塚　も　と　子

天の雫の地に落ちて　玉ぞ掌(てのひら)に握りたれ
綠の息のうつくしく　榮あるみ子は生れ來し。

胸より裾は海に入る　あした氣高きみ姿や
黄金のすぢの陸(くが)に射て　沖より夏の光りさす。

光に解くる銀(しろがね)の　響ぞ高き瓔珞や
いと嚴しき太刀佩きて　夏のみ神は男かな。

手にさゝ川の水せいて　眉に小さき風ふくむ
夕はやさしき童の子　百合なよやかに肩による

左樣、先づ夏の神に近い姿が表はれて居ます（酔茗）

○黑百合

千葉縣　金　木　ふ　み　子

老杉古松に掩れて　白雲迷ふ幽谷に
たくみの神が鑿の跡　くしき巖はそば立ちぬ

朝ましらの床となり　夕おろちの家となり
まとひし衣は冷えたれど　不斷の霧にいと靑し

其靑ぎぬに根をつゝみ　岩間の闇に日をさけて
やさしく咲ちる黑百合は　夜光の珠と見ゆる哉

なれが歷史を譬ふれば　光うすきを厭はれて
古鄕の天を逐はれたる　あはれ御星のそれなるよ

昔別れしはらからは　世の罪の子に賞でられつ
白紅を競へども　なれは淋しや紫紺なり

黑百合は詩によかつたてす、黑百合の歷史は餘り映えませんてした（酔茗）

○秋の色秋の聲

下谷　藤の花

旭光輝く秋の朝　村のほとりを徜徉へば
刈り干す稲の上白う　置きわたしたる朝の霜
日を呼び溶くる晃きや
右よひだりよ数かげに　笹鳴きわたるつぐみ鳥
あさるに薔薇の實も絕えぬ。　痩せて流るゝ川水を
隔てゝ寒き荻、芒　風もあらぬを音に泣きて
うら枯れ姿わびしさや　あゝ秋の色、秋の聲
小田の刈株跡もなう　耕き返されし畝續き
はたかの山の一つ松　松の左手に僻氣に
立てるよ馬の影二つ　行く秋送る姿寂しう

自然もせめて此位ゐは初めから氣をつけて居て貰ひたい(評者)

○朽葉

芝　登美多　つゆ子

街にして
夕さすらひの街にして　擦違ひざま見し人の
似たる面わにありし世の　母なづかしく思ひ出でゝ
ゆかりもあらぬ人なれど、　あまりに胸のつらければ
低き聲音に母よとて　うつゝに呼びぬ孤子の、
わが齢
おのれを知れる人々よ、　われをあはれと思ひなば
またとよはひを問ふなかれ。
人にとはれてむかしへの　たえし望をいまさらに、
思ひ出づるもあだなれば。

難實な詩風に深みがあります(評者)

○百合花

羽後　渡部みや子

いかなる咎を犯しゝか、　小さくやさしき若姫が、
星大神のみ怒りに、　觸れて詫れど甲斐もなく、
仲間千人の姫どちが、　なかより一人出されて、
虹の輪橋のかけし夕、　玉鞭强き百たゝき、
打たれて星の宮居より、　下界に遠くくだされぬ。
ひとり逐れしわが姫は、　懺悔の首をうな垂れて、
聖きいのりを捧げしが、　また歸るべきすべもなく
泣く泣く花にかへし身を、　百合の花とぞ人は云ふ。

數々繰返された詩材、けれども多少の創意な又此作に見る(評者)

○夜中

陸奥　あきつ

短き夜半に夢覺めて　獨り思ひにくれ居れば
露の命を刻むなる　時計の他に音もなし。
世の幸うすき幼兒が　あまりに清くねむるかな
亡き父君の面ざしに　在まさぬ母の口もとに。
我は文をばとり出して　妹と文を見くらべぬ

君が情は嬉しけれど　妹は忘れがたみなり。
君が情は嬉しけれど　妹は忘れがたみなり
ゆるし給へといくたびか　震ふ手先に文はさかれぬ。
今か捨てたり我が戀は　血の湧く胸を押し靜め
妹を抱きて頬ずれは　襖子にうつる影淡し。

妹と文を見くらべては少し小説じみました、詩は今一段と結晶する必要があるのです（選者）

◎猿　酒　　伊勢　佐藤しづま

今宵平和の酒汲むと
家族(やから)集へて猿王
苔滑かの大楠に、
するするすると登りしが
噫何奴の惡戯(いたづら)ぞ
秘めし美酒(うまざけ)とく失せて
洞(うつろ)にみつる移り香や
きゝと怒の聲立てゝ
拳(こぶし)に洞(うつろ)叩けども　こつ／＼と音すのみ



川岸の家（賞外）　神戸二ノ宮町　徳宮みれ子

◎七くさ姫　　大分　とめ女

秋風に緑の髪を靡せて　觸れなば散らん玉露の
「萩」の足とりなよやかに　白魚なせる双十の
指の走りや「尾花」の手　舞つゝ歌ふ秋の賦の
柔音、入神の「女郎花」　黄金の響美しく
「桔梗」の花に染上げし　濃紫の「藤袴」
高き薫りや七草の　秋の女神の「撫子」よ
千種の露は結ばれて　岡べの「ま葛」裏枯す
冷たき風の吹くとても　永久にさめざれ秋の夢。

◎鈴　虫　　京橋　磯　千　島

いとし亡き妹愛でたりし、鳴く音清けき鈴虫は、
如何せしやらん鳴き止ぬ、秋風寒き今朝止みて、
再びなかずなりにけり、
あはれやさしき鈴虫よ、
今いづこにかなれはしも、
なれが清けき御歌をば、
歌ふはいづこ鈴虫よ、
なれゆきにしは我妹が、
ひとり淋びしく長しへに、
います處よされぱなれ、
汝が清けき御歌をば
うたひて共に永久に、親しき友となれよかし。

◎里の小川　　麹町　河内歌子

都に四年學びつゝ、今日立かへる故郷の
里の小川に來て見れば、昔にかはるわが友の
衣あらふにぞ遇ひにける。

顔に艶なく頰瘦せて、
脊におひたるみどり子の
ものほしげなる面もちや、
我にリボンを與へたる
富みし昔のかげもなく。
少女心に描きたる、
愛情の夢今いかに
あしき婿をば迎へたる、
その誤りのかくまでに
罪なき身をば呪ふかも。

○宵の心

野の草

庭に咲いたる水引の、
花も結ばず夏やせて、
襟につめたき水枕、
つめたき床の夕かな。
紅もさゝねば鬼灯の、
靑きながらに風みえて、
秋まつらしき野の雲に、
啼きつゝかへる鳥のかげ。
ほのかに庭の夏草の、
夕の夢をつゝめども、
身はねむられて靜けさも、
虫なく宵となりにけり。

○夕　日

伊豫　曉子

社の山に日は映えて、
雲に聳ゆる老松の。
常世の綠色奪ひ、
空とぶ鳥のかげおほひ、
さながら夏の綠野に、
咲く姬百合の花一朶、
草に火もゆと驚きし、
光射るなる映えの色。
光の紅、樹の綠、
くしき自然の御神の、
妙なる御手に混どられ、
照る金色の山の樣。
仰ぐ我目もまぶしらに、
尊き光たかもえぬ、
我にもあらでかけ登る、
階高し二百級。

○濱べの夕暮

福岡縣　濱中たか子

七彩の照映をほこりの、
海の面葡萄の色に
うつろへば夢にも入るか、
松並の影はうすれて
磯燕おびえも見えず、
奇しき昔に海原翔ける
柏原の秋の夕べを、
磯傳ひ歸る漁の子

○潭

滋賀縣　辰井ふみ子

主ぞひそむと噂して、
怖れに漁夫が仆れては、
網を斷ちたる昔より、
潭の深さは知れずして、
神秘の影を宿したり。
水銹にさびし水の面や、
奇し花藻のみ時を得て、
此世呪ひの香を放つ。

君　に

情けにもゆる紅文字に、
深かき思ひをこもらせて、
忘れな草を中に籠め、
捲きてたまひし玉章や。
心安かれあゝ君よ、
弱き子遠くわかるとも、
君を偲べば血潮わく、
さば我れ日毎野に立ちて、
君ますみ空眺めつゝ、
流るゝ雲に魂乘りて、
君が御傍に通はなん。

○秋の胡蝶

早稻田　春日靈子

淋しくもやれし翅に、
すがれ行く蝶の行方や、
こし方を顧みすれば、
人生の姿に似たる、
夢なりき花の蕚に、
あくがれて甘きに醉ひし、
美しきなれのかたちよ、
思ひしや自然の愛は、
限りなき時のいつまで、
なれをしも抱かんものと、

春といへ夢の暫く、
覺らずや秋の來るを、
今露は翅に重く、
夕風は身にぞ寒き、
さはれそを愁ふる勿れ、
天地の自然のさだめ、
淋しくも破れし翅に、
すがれ行く秋の胡蝶よ。

○ことの緒

越前　野坂まさを

胸に秘めたるつくし琴、
をのゝく指に撥なでゝ、
嬉しき調べきゝしより、
あやなく心みだれしか。
流れてしづむゆふ雲の、
紫うすく黄はほそく、
御胸の房にうつるとき、
樂しき思ひみちにけり。
ほの〴〵しらむ曉の、
ほし影うすく消え入りて、
温たかきゆめ醒るとき、
床しき歌はひゞきけり。
運命の汐にゆきまよふ、
幸なき舟をあざみつゝ、
戀をいのちと耽りしは、
そも一と時の夕なぎか。
囁きに誇るまがつみは、
あはれ昨日の少女にて、
詐りの矢をひきつがひ、
己が琴の緒に斷たれけり。

○月と紫陽花と

上野なみ子

「風をり〳〵の語ひらに
生の血潮ほだされて
賤しき身をも顧みず
一夜君とし睦れにき
その時よりぞ知りそめし
戀の誠の接吻に
染め出されし濃紫」（紫陽花）

「庭の栝櫨の樹がくれに
面ぶせがちに咲く花や
紫陽花、汝れが艶姿に、
ゆくての希望失ひて
天穹より出てゝ語らひし
その時よりの思ひでと
葉末におきし白玉や」（月神）

「あゝ其白玉の精うけて
實りし種は小さくとも
犯せし罪の今更に
外花には耻づる我の身の
花瓣に秘めたる煩悶に
一人の榮とほこらひし
紫、今はうすれゆくなる」（紫陽花）

○朝がほ

常陸　秋山鈴子

書院の後ろ古井戸の、
水流よる破れ垣に、
誰が植ゑにけん朝顔の、
紫なるが咲きしより、
朝、見る事を好みしか、
或朝早くこゝに來て、
見れば事ありすゞやかに
咲くべき花の影も見ず、
形、可笑しきわくらばの
朝風に只そよぐのみ。
誰が仕業やとさしのぞく、
垣のかなたに聲あつて、
（オッカサンに貰って種まいた、
朝がほだん〳〵のびてきて）
花を片手に握りつゝ
きのふ習ひし歌の譜を
覺束なげに歌ふ弟。

○暮鐘

巣鴨　上野たへ子

夕榮赤く地をこがす、
ねぐらをいそぐ八田烏、
さあッとふきくる夕嵐
雲もておゝへぬ夕榮を、

影は次第に薄らぎて　清き光はうせにけり、
天の涯より地の隅に　遠く響きぬ暮の鐘、
萬象こゝに休むべく　救の聲に似たるかな
世の轉變をしらぬ如　靜に眠りぬ野も山も。

〇夜　千葉縣　水 設 子

大なるかな夜のけしき、　天いや高く地はひろく、
空に月てりほし匂ひ、　地に露むすび風おこる。
かなたの黒き森かげは、　微妙の樂のあるところ、
こなたの白き川みづは、　自然の聲のあるところ。
前にそびゆるおほ山は、　無限の歌のあるところ、
仰げはくしき大空は、　不斷の花のあるところ、

〇西の山　麹町　山の里女

西の山青風吹きて、　つゝみ來ぬ草の香や
行きし野は早や、　老いぬるを
あはれこゝ去年の日、　風やみてかげくらき丘
となり國湖こえてくる、　鐘はそよ人を待つやう
よろこびよ、今は悲しみよ、胸さびしいたむさまして
さとうつ伏しゝ松の木かげや、とりなきてしゞまにかへる。

〇里の湖　石見　若草みどり

世の罪、洗ひ清めよと、　嚴かなる神の命に、
銀のおほつちわれて、　ほどばしる聖水こゝに、
湖となりて三千年、　水清く人をまつ、
里の歌女名はお花、　神の御心知りてけん、
月あかき夜半、此湖の、　水底に消えぬもにかざられつ
あゝ彼は罪もけがれも、　尊き御手にはらはれぬ、

〇七夕　陸前　孤 子

譬へばばらのそれの如　綠と紅のはえもよく
尊きみ空の姫君の、　綾のみ衣は元の色
天の河原のかけ橋に、　秋風淸き夕まぐれ
奇しくも光る朱星と　ゆかりの色の雲にめし
舞の樂に入らなんと、　銀の燈あでやかに
錦のみ座にのぞみまし、　日頃めでにし奇星と、
手に手を把て謠ふなる、　金扇さッと開くとき
紅のふさひら〳〵と、　天弦の音ゆるやかに
無限の興に入りしとき、　あはれ「ねだみ」の呪咀かや
虚榮に滿つる塵の世に　知らでや姫も奇し星も
流星となりて下界に散じ、　七夕の榮とかざられぬ。

〇月草　橫濱市　秋 野 子

朝の露の耀きを、　夏の御神の愛まして、
玉とつゞりて詩結て、　月の宮居におくりけり、
月姫が今宵の晴れの衣、　御園に出てしづやかに、
御詩誦しつゝ舞ませば、　御胸すべりてさと散りて
露の玉連天の野を、　星と流れて下界に落て、
曉ふかく咲る月草。

〇曉　大和　中 豐 子

黒白もわかぬぬば玉の、　闇の夢さへさめはてぬ、
いろどる峯のよこ雲に、　みるめまばゆき黄金色、
こや萬線のきんぶすま、　へだての疾や何ならん、
開くよすがに吹き渡る、　風の光りは野に充てり、

○夕　立

肥前　江上　順子

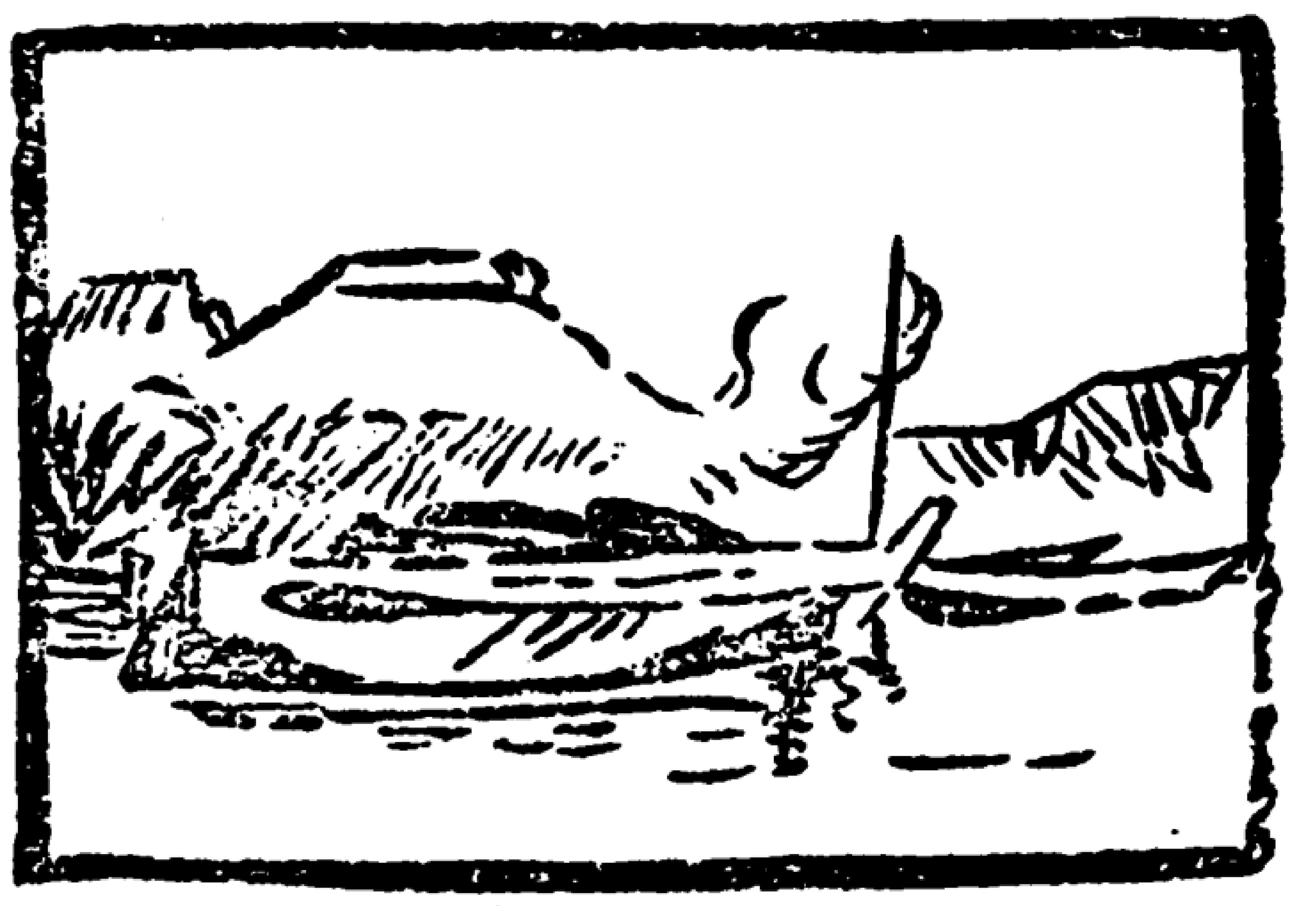
天におごりの夏姫が
綠房なす前髪に
ゆるうかざしゝ花形の
美し香の湧くねり物の
彩のみ櫛の日にとけて
地にこぼれくるそれか夕立。

若葉の森を洗ひ去り
涼風に醉ふ青柳の
橋の袂に傘もたぬ
少女の髪をぬらしつゝ
名殘は白き野うばらの
柔葩に止めてすぎぬ。

○花賣女

福岡縣　天津　乙女

大原、霞にたち出てゝ、　牛くる道を朝幾里、
流れは清き加茂川の、　橋を渡らば花の聲、
戸も明けがたの京の町。
黒髪に載せたる花の箕、　花は重くもそが頭、



五ヶ瀬の朝　（賞外）

宮崎縣延岡　波岡まつよ

愁ひ悲みなかるらん、　花は召さずや美き花と、
女生計のしをらしや。
黄に紅の花の環に、　露の光の玉を懸け、
さてしも廣き花冠、
木綿つくしの姿たに、
君し女王と名に呼ばむ。
束ねて幾金花賣るも、
心優なるゆかしさよ、
都女ら門の戸に、
わくだれ髪を掻いあげて、
女王の裾にひれ伏せよ。

○妹

常陸　戸田つる子

妹可愛や振りさげ髪を、
白のリボンてキリヽと結び、
背に着更た寐巻のまゝて、
團扇片手に呂蚊帳の中に、
小猫い抱てゴロリと横に、　猫を寐かすか靜けき聲て、
猫のなく皮子守歌。

○萩

芝　華　扇　子

「萩さん許して頂戴な」　朝日にきらめく露の野に
幼き乙女只一人　眞白き指に白萩を

手折りながらも物語る
「萩さん許して頂戴な
今日はわたしの大好な
おかあ様の御命日
お墓にこれを供へして
早く歸つて戴くの」
里へ急ぐか土橋には
馬の鈴音高くして。

○螢　香川縣　金星女史

かの乙女子が爪紅(つまくれない)の
優なる指にあやつるや
ましろに細き京の針もて
赤き秋を縫ふがごと
闇の女王よ姿は見えず
「憂愁」のごと力なく
明、滅、淡き青き光りに
墨染衣を—誰がためぞ
もゆる思の心づくしや
螢よ汝も前の世は
乙女子にして出家戀ひ
思にきえしその魂か
戀なく我も世を遁れんに
來よ、若僧の讀經の夕。

○ある詩　和歌山市　神保須磨子

仰げば嬉し紫の
雲はひらきてほの白く
玉の宮居も賤が家も
くまなく照す月影よ
岸にほゝ笑む白ゆりの
花の香りをうかべつゝ
平和がさとに流れ行く
清き小川のさゝやきよ。

○夕べ菱花濱邊に逍遙ひて　[illegible]子

夕日うするゝ菱花濱の
汀の砂に彷徨うて
袖笠かつげ見返れば
離れ小島は暮れてゆく
繰り返し見る古文や
片わき細き文字綾の
面影戀し文の主
忘れし胸のまたをどる
眞砂に描く君が名を
恥羞低う夫とよべば
戀慕の夢を覺せとて
吹くや冷たき沖つ風

○秋の夕　淺草　大沼きさ江

落つる夕日に野も山も、
其の平安や寂寥は、
物しづかなる死の如く、
日のかくろひの寂寞を
破りて走る鐘のおとに、
思ひ出多しこもり沼の邊。

○姉さん早く　岩代　佐藤香子

姉さん早く來て下さい、
隣の坊ちやん内の坊
鐵砲かついで戰ごと
櫻は日本の魂じや
軍人樣の紀章ぢやと
やうやう咲いた秋櫻
私の云ふ事聞かないで
皆(みんな)折てしまひます
姉さん早く來て下さい

○農家の秋　千葉縣　すゑ女

空澄み渡る曙に
黃ばむ稻穗を見渡せば
溢るゝばかり白露の
穗末にかゝる豐けさよ
いと心地よき此眺め
農家の秋の樂しさよ
あかき日の照る夕暮に
廣き野原を見渡せば
駒ひく童やさしげに
鄙のしらべを唄ふなり
いと面白き此眺め
農家の秋の樂しさよ

文學士 沼波瓊音先生選



天 ○里うた

麻布區笄町二番地常光方 露野 玉子

今し笹ヶ瀬川の堤にかゝるや、突然葦間から活々した玉を轉す樣な聲で、

〈親の爲なら吾身は儘よたとへ火の中水の中〉

と唄ふのが、月下の波上に震ふが如く聞えた、言ふまでもない林檎の君ちやんで、今こそかく落魄てはあれその昔はこの村の庄屋であつた。で今は病床にある母親を細腕ながらに兄と諸共に養うて居るのだ。小腕ながらに棹一本で、甘く舟をあやどり行く手際は今年十四の少女が業として、實に天晴なものだ。やがて舟は此方の岸へついた。空舟は愛らしい船頭によりて、五尺に餘る川邊柳の根本につながれた。この時萬成峠の方で勇ましい馬の嘶が高う聞えた。これを聞いて屹となつた君ちやんの稍大人びた姿は、一種表に情けが溢れて見えたのである。

〈水と流れて行花見よや沈む瀨あればまた浮ぶ〉

續きて聞ゆる銀鈴を振ふが如き唄聲の波動は、木の間に反響して餘韻長く跡を曳いて消えて行く、かく懐しい兄の敏さんの唄聲をきいて君ちやんは靜心なきやうであつた。待間程なくシヤン／＼と清らかな鈴の音をたてながら、荷駄馬が獨りノサ／＼と歩み來る後に、印半纏に三尺帶盲縞の股引に腹掛といふ勢で、勇み肌の小氣の利いた男である。片手に藥瓶他手に何か竹の皮に包んだ物を持ちてかへつて來た。敏さんは其處に待つてる妹の顏色を見ながら、藥瓶を渡すか渡さぬかに「お母さんの容躰はどうだ今日は少しはいいのか」「アヽ、今日は大分よくつてよ」とこれを聞いた兄は安心顏に、門の柿の木に馬はつないだなり、家にはいつた、馬も憐を催してか、後影を見送つて一聲嘶いたのである、折しも新星は光り淡く屋根の上に懸つて居た、あはれ天は平和の樂土に長く樂しく、この二人を住はせるであらう。

（評）易々と書流して明瞭なる印象と十分の同情を起さしむ敬服。

地 ○虹

京都六軒町今出川下ル 大澤孝子

比叡山の一角、一抹にして掻消されぬ、雲は見る／＼一天を蔽ひて、大粒の雨は急霰の如く降り來れり、山

崎より、對岸八幡へ渡る五町の浪逆に、水霧蒼茫として、雨のしぶきにほの暗き中を、苦もなき小船に乘合はせし五六人、濡るゝに任せて平氣なる船子は櫓の音もいと緩し。

雨は忽ちに過去りて、水面俄に明るく、息吹かけて曇らせし鏡を、拭ひ去りしが如し、夕の雲美しく愛宕の峰の空に群がり、天王山の山角に今過ぎし夕立の雲が一群迷へり、虹、虹、と舟子の呼ぶに振仰げば、一條の彩虹、江上の空を横斷して、一端は如意が嶽の右方に、一端は東寺の雜木の森の上あたりに消ゆ。さながら虹の影涵す波の七彩の綾織る上を行く船は、さながら虹の橋を渡るに似たり、恍として暫らくは、天と水、二條の虹を渡りしが、虹の消ゆると共に八幡への渡船、柳の露まだちりやらぬ下蔭に着きぬ。此時の美觀未だ髣髴として眼前を去らず。

（評）形容くだくだしからずして快く、文短かけれどもよくその美觀を描盡し得たり。

（人）

○脇の磯の夜景

土佐　恒石峰子

露しげき秋の夕、岸本なる叔母の許を訪れて、日頃親しき文子の君と相携へて、程近き脇の磯に散歩す。龍宮の祉の前より海濱に出づれば、渺茫數千里際涯なき太平洋の浪は靜に、濱吹く風は愈々涼しく、輕く袂に戯るゝ爽さ。遙に見る、西の方山影濃きところに、燈火の點ずるあるは、浦戸港口の燈臺ならんか。畫ける如き長汀曲浦、夜の幕に包まるれど、名に殘る宇田の松原は近く小丘の如し。東海中に這ひ出づるが如き手結岬は、闇ながら知る人をしてその絶景を想はしめ、寄せ返す山の如き白浪は、靜けき夜陰を破つて山彦に反す物凄さ。折しも雲間より漏れ出でし月は、皎々として晝の如く、漫々たる大洋に黄金を散らし、闇に隱れし四面の眺望忽ち一段の雅致を加へぬ。顧れば、背後に聳ゆる姫倉月見山懸巖絶壁幾十丈嚴然として、漫に土御門上皇の昔を偲ばしむ。あはれ此の絶景、一度此の境に足を入るゝもの、誰か容易に去ることを得ん。あはれ南海有數の此の勝地、未だ嘗て詩人に歌はれず、未だ嘗て文士畫伯の筆によつて世に紹介せられず。彼の白砂青松波靜に、島影に白帆の隱見する、須磨明石の佳景素より可し、されど長汀曲浦白砂青松激浪巖に碎けて、飛沫紛々たる此の勝景亦可ならずや。春の曙に秋の夕に四時の眺望、活氣なき彼よりは、躍

るが如く勇壮なる是れ、寧ろ勝りし點なきにあらざるか、若し夫れ人性感化力の如何に至つては、蓋想像の及ばざる所あるべし。然るに彼已に世に歌はれて、是れの倘ほ隱れたる所以は、交通の然らしむるところか。土佐の海岸幾十里、斯かる絶景の湮滅せるものそれ幾何ぞ。正に是れ蛟龍の雲を得ずして池中にひそむものか。時しも突然歌ひ出づる文子の君の唱歌に、感想の夢忽ち破られて我にかへれば、身はいつしか浪際近くさまよひぬ。仰げは月は漸く西に傾きて、夜もいたく更けぬれば、來し方さして歸りにき、架ける如き月見山を目標に、磯吹く風に送られて、共に唱歌を歌ひつゝ。

（評）筆力雄健所謂「躍るが如く勇壮なる」評に適應す。

秀逸

○嵐の夜

横濱　瑞枝

朝からの雨に風さへ加はつて、更に烈しく木の葉や小枝を吹きつけるので、亞鉛張りの屋根は、今にも破れるかと計りの音をさせて居る。

シーンと寂靜まつた家の中に、獨り姿は例の如く、机の前にキチンと座した。積み重ねられた書物の内から、手に取つたのは小形の古い聖書――恩師のかたみの！　不思議！　此の頃はどうして斯んなに此の本がなつかしいのであらう？　何か目に見えぬ幻影があつて、此罪深き者に悟れと示すのでもあらうか、讀んで見たくて讀んで慰められたい樣な氣がして、幾度も／＼繰返すのである、しかも見るのは何時も同じ所、主の最後の晩餐と、終りの祈りとて…

「嗚呼我父よ、出來得べくば、此盃を我より取去り給へ」默讀して居るうちに、胸が痛くなつて、涙がほろほろと…聖書を堅く兩手に抱いて、祈る樣に目を閉ぢると、漸く身は世の外のものとなる。

オ、ありありと見ゆるよ、師！　やがて犧牲として捧ぐべき身の、堪へ難き惱みを忍びて、靜に祈れる主のみ姿！　燃えて輝ける眼は、苦しみに、悲しみに悶えて、熱したる頰、或は赤く、或は白く、見よ、血の如き汗は、點々降りて地に落つるではないか、刻一刻死

おしやく　（賞外）

八王子　乙羽しん子



の影は、彼の後に迫りつゝあるのである、あゝ然れども彼は呼んだ「さりとて我心の儘を成さんとするには非ず、唯聖旨に任せ給へ」と、オゝ唯聖旨に任せ給へと……、あゝ其聖き心、其清き願ひ、人の子と自ら名乘れる彼は、決して人ではない、聖く輝く計り、更に更に、高きものである。ゲッセマネの園の夜はふけて暗憺々、寂として聲もなく、響も聞えぬ、天も地も死したる如くに……もしも穢れた罪の子が、此聖なる場所に彷徊うて居たならば、必ず血を吐いて斃れたてあらう……? ボン〳〵と十二を打つ時計の音、ふと夢から覺めた樣に眼を開くと、外は、ゴーッと地鳴りして響く風の呻り、メリ〳〵と枝の裂ける音、果から果迄、劒を抜いた魔軍が暴れ廻ッて居るかのやう、天も地も、一つになり想なあらし――、オゝあの人の叫びの樣な響きよ、世の終りが近づいたのではあるまいか……。

（評）聖者の趣と外の嵐と相輔けて感を深からしむ。

○初茄子

京都　京花子

北野の天神樣の緣日へ行つたとき苗木屋の前を通つて不圖こんな苗を栽培して見たら面白ろからうと思ひまして茄子の苗を十本程買つて來ました。父上や母樣は「氣が狂うたか」等と驚いて居られました。勿論町家のことでありますから庭に畦を造るなとゝ云ふことは出來ないので恰好の空箱があつたのに土を容れて植ゑました。母樣や下女の松やはとてもだめでせうと笑ひましたけれども私は學課の隙々には米を磨いだ白水をかけたり培つたりして居ますと三日目には六本程萎れてしまつたのです。斯んな鹽梅だつたら皆枯れてしまふのか知らと思つて殘つた四本を大切にしてやりますとこれだけは生き〳〵と生長して行くのでした。やがて花がついたときの嬉しさけれども母樣や松やはあだ花だと云つて笑ふのでした。嘘言だと思つてますと花は散つてしまひましたので落膽して居りますと。數日の後ちに又花が出來て今度はそれが萎むと小さい實を結んだときには私の喜びは譬へやうがありませんでした學校へ行つてる間もそれ計りが氣になつて歸るとすぐ包みを机の上に載せて袴のまゝ裏庭へ見に行くのですやがて紫の露滴る樣なのが七ッ程捥ぎれる樣になりましたので二つは書の先生のお宅へ葉をつけたまゝ差上げて殘り五つを母樣の前に出しますと松やもたゞ笑ふのみでこれが今年食べる初茄子でした。

（評）文自ら三段に分れ終の喜悦十分に現はれたり。
（又曰）極めてやすらかに、極めておもしろく書かれたり。

○夏の一夜

東京　冷花女

師匠の處を出たのはもう暮方店家の軒に瓦斯燈が點かうといふ頃私は急ぐとも無くいつか町はづれの虫聞橋へ來たが餘り川風の涼さに知らず／＼欄干によつた、ゆつたりと流れては石に當つて、落ちて流れて、ザーザーと冷い水音を立てゝゐる境川は中程で一蜿り、青青とした夏草を浸して、二本並だ柳の裾を左へ、末は自分の家の裏を行く其れてある、さつきお下りになつた、お陽樣の餘光はまだ西空を彩りて、紅から濃いオレンジ漸く薄くなつて空色に薄墨をかけた樣な色と、だん／＼に、ぼかされた間々をむら／＼とした雲が、金色に縁りをとつて漂うてゐる、川沿二間弱の道を殘したあとは茄子畑で、葉の影から紫色のつや／＼したのが見える、風はそよ／＼と葉を搖がして草の頭を擦つて袖に入る、氣がつくと畑の隅の農夫家に鈍い燈火がついて宵の明星がチカ／＼十五に近いお月樣が出てゐた、虫の聲の外人聲もせぬ、此靜な自然の懷に抱かれた、私は家へ歸るも忘れたかの樣、耳を澄まして、而して埒も無い事を考へて居たが、ふと我に反りて急いで歩き出した、すると何にやら白い物が落てゐる二足三足行過ぎさま、よく見ると手紙らしいので我にもなく拾い取た、女文字のいかにも、すら／＼と國雄樣蝶子よりとばかり、私は何と無く胸が騷ぐ、蝶子さん……優しい名では無いか、必と美しい淑女に相違あるまい、して此の國雄と云ふ方は兄樣かしら、許婚かも知れぬ、今宵あたり歌會でも開かうとしたか、琴と、笛の合奏でもしようとして、可愛い垂髮の妹に託したのを、妹は長い袂の振りから滑り落したのではあるまいか、と手にした儘想ひに耽てしまつた、其れにしてもさぞ心配して居ように、私は斯な物を拾うて、如何せう、元の樣に捨て行ば行くのだが、心無い人に拾はれて、開封でもされて、二人が迷惑する樣な事が萬一あると不憫想だし、と所置に困つた、がいつそ流して終ふ事に決した、よしんば、川下で拾はれても、墨は鈍染散る、封じ込られた事は善かれ惡かれ永久に秘密の中に葬れるのだ、斯く考た私は思切て投ると飜々と舞た玉章は、ふわり、水にのつた、と見る間に、ゆたりゆつたり流れて行く、見詰めて居た自分も、すぐ後を追うて歸た、なれど、罪を犯した樣な功徳をした樣な心地がするのである。

（評）一寸したる所置にその人格の高きを見る。
（叉曰）終の一句の意味の深きよ。

○無聲の詩

福島　若草女史

妾が書齋の壁間掲ぐる一枚の額面、沙河大戰前夜の光景を描けるものなり。暴風來らむとするに當り大氣まづ靜なるに等しく、士窟に踢蹐して河一重の敵と對すること茲に百有餘日、血腥き風の香絶えて、髀肉日に肥え筋骨夜々に呻るが如く心疾りて、待ちに待ち焦れし一大快戰の序幕は將に開かれむとす、おゝ明日こそは、震天動地の大決戰場裡に馳驅し、やがては玉と碎けて草葉の露に消えゆくべき名譽の日なり。語るも笑ふも今宵唯一夜！。戎衣の袖を片敷きて銃を枕の、武士が、夜半の夢果していかに？眠れぬ一夜を高粱畑の隙間より仰ぎて、星光寂びたる深碧色の大空遠く彼方、想を母國にはせて、之を最後の瞑想に慰むなるべし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

額面默想すれば畵に聲あり!!夜を襲む鐵騎の蹄の音遠く遠く大地に轟く如く……。かくて妾は亡き兄君を偲ぶなりき。

（評）畵を見る以上の感を與ふ。
（又曰）結句殊に力あり。

○晚村

仙臺　中目よしえ

祈禱の時は來た！と告げて、教會堂の晚鐘は、野越え、山こえ、鳴り響いた。

今しがたまで、夕陽に閃めく鎌ふりたてゝ、稻苅りに餘念なかつた農夫等は、鐘を合圖に、苅る手休めて、枯草に緣とられた畔路を、萱葺屋根の點々と續いて、夕炊の煙が、長閑に立ちのぼる村の方へと歸つて行く。烏は、赤く夕映えてる柿の樹に群れて、騷がしい雀は、おき下に遊んでる。釣竿肩にした、老人連れが三四人、重くもなさ相な畚を片手に提げて、何やら喋舌りては、濁聲に笑ひながら、やはり村路に、かくれて仕舞ふ。

焔々たる火輪の樣な夕陽は、向ふの丘に春かんとして、世界は深紅の火と燃えた。小河も、山も、森も、圃も、教會堂の屋根も、烏も。

緋威しの甲冑に、身を固めた武士の、戰場に馳せ集る有樣想像させて、輝く雲片々は、西の空に溢れて、村の上まで、蔽うて居る。そのいろの、形の、美しいこと。

東の空を見返ると、向ふの地平線近くが黑ずんで、だんだん黃ばんで、淺黃になつて、あとは碧空。雲もあるが、西空の、樣に勇ましく、いきいきとした美しいのではなく、喩へば、雷神に碎かれた魔の軍勢が旗色哀れに奈落の底に落ち行く如き、灰色の雲。

横に棚引いてゐる。

（評）まばゆきばかりの文章。終に灰色の雲の寂しさを添へて妙。

○音

千葉縣　暮の山

横笛、てりもせずくもりも果てぬ春の夜ごろ、梅咲く宿のあたりよりひゞきたるは殊更なりや、秋の夜月に催されて吹いたるも亦をかし、草笛、すみれつむ子やすさぶらんとらうたし、尺八、池のあやめさと薫りくる夕まぐれ、遠くたゞへくるは待ちゐし杜鵑の一こゑよりもうれし、さはれあまり近くきゝたらんには、喧しきのみにてなか〳〵興うすきものぞかし、簫何とならから〳〵し、三味線、月琴、共にいやしげなり、學ばずともありなん、オルガン、わか葉青葉ところせげに生ひ茂れる中よりひゞきたる心にくうこそ、按摩の笛いと哀れなり、それも家には老いたる母やおはさん飢ゑたる子やあらんなど思へば今一きは、琴の音の高殿よりもれたる、さらぬもめでたし、思へばこぞの夏の夜にてやありけん風きよく月面白きにうかれて、われともなく里川の邊りになん至りけるに、いとみやびやかなる琴の音ぞまづはこゝもとに通ひきにける、あはれ、いづこの君のすさびにかと、すゞろしたはしうて尋ぬる程に、月益すみわたり琴の音は愈さえて、高く低くたえなんとしては續き、沈まんとしては又あがり、一ふしごとに變り行くしらべに魂あくがれてたゞずめば、はたとふき消す如く打ちたえぬる者から、なほすがすがしき音の耳にある心地してしばし立ち去りがたくこそ思ひしか、喇叭、滿洲の雪ふみしだきつゝ、我つはものどもが吹きたるはいかなりけん、思ひやるだに勇まし、鐘の音、諸行無常をつぐるかと哀れなり、雷、名をきくだに怖しき心地するを、雨宿りする家もあらぬ廣野にて、とどろきたるよ、魂の緒もたえなんばかりになん、祝砲やんごとなし、花火月なき夜などのは一入うるはし、さ鶯、まだとけやらぬ雪の中より、さとり顔にもなきいでたるめづらし。鈴虫すゞろにすてがたし、蛙、山吹の花ちる池にうたひたるまたなくなんかし、その他岩根にむせぶ波の音、松が枝はらふ風の音など物すごきねのいづれをかしからぬかは。

（評）よく枕草子を會得せし人ならむ。



芝居（賞外）　京都紋屋町　濱部郭公

○海岸の夕

横濱　柏木房子

あいらしい糸ちやんと、海岸を散歩すべく、家を出た

突當た藥師様の處を、左へ右へ、河岸傳ひに、製氷會社の、さわがしい機械の響を聞き、佛蘭西領事館を見、谷戸橋を渡つて、右へ折れるとすぐ海岸、さえ〴〵した景色、遙かの水平線まで淼々たる碧水、遠く總房の山々は見えみ見えずみ、近く神奈川鶴見の山々は翠色ぬぐうたやう、更に近く防波堤の内外、鷗の幾群浮きつ沈みつ、誰やらの、浮ぶ鷗の浪枕も想起さる、さてはへばりついたやうな、遠近の眞帆片帆、とびかふ「ランチ」、餘りの面白き景色にいつか佛蘭西波止塲もすぎ心付て見ると此處はもう五番館クラブホテルの前、ホテルの庭には宿泊外人であらう、所々に椅子により暮れ行く夕景色を眺めて居る、棧橋はすぐ目の前右側に繋留してある見上ぐるやうな大きい船は、ジャマンメールそれと並で春日丸、左側の白いのは佛蘭西メール、棧橋を離て白い形の好い船はインビリス、防波堤の傍の帆前形のは有名な、滋力觀力船その右方に四五艘、棧橋の後方には、大小無數の船舶、帆柱簇々と立て、投錨して居る、帆柱は林の如くと云ふ形容詞は、決して誇大でない、夕陽は今し沈まんとして税關の硝子窓を射、餘照は遠く港外へ金波銀波を漾はせて居たが、それもしばし、後は次第々々に夜の色におほはれて行く、糸ちやんが、棧橋々々々と言うたが、時ないゆゑ次期を約して歸路についた、ふり返つて見ると棧橋へ、瓦斯がついた、續いて三點四點、果は無數の電燈が船へついた、恰も星のやう、緣り滴る神奈川の山々は、只一刷毛の墨繪のやう。

（評）廣重の畫を見る心地す。

○朝の森

堺市　竹叟文子

社の後ろに巍々として聳ゆる大銀杏は、よべの風に大方は散り果てゝ僅か下技に殘る許りである、折りからの朝雲に、痩せたる梢の寒げに突立てるも哀れの姿てある。

破れて朽ちて穴さへ開いたる土橋の徒らに草生ひたるを危げに渡れば、暫く櫟林のつゞきて朝露に濡れたる枯葉を踏みしだいて、芒の小路をつと過ぐれば森となるのである、奥深き森てある。

凄き梟は早や朝の光の眩うて眠しひとなりしか聲も聞えず、たゞ百舌鳥の聲のみ喧しましう、折には豆鳥のつきほしいと鳴くのが聞えると、間遠に散り來る椋や榎の枯葉がカラ〳〵とすれ合うて落つる外は、何の音も響もなく朝の森は靜かてある。

村から通ふ人々の自然に踏み馴れて出來たる狹き路を横切つて、やはらかき苔の上を靜かに音もなうこちらの樹の根を右に除けあちらの樹の根を左に除けて、古木の中をだん〳〵と進み行くに、一株の尾花亂れたる

がありてその上に雨露に寂びたる朱塗の小さな祠が見ゑる、祭れるは狐か狸か……あたりに人の影もなく恐ろしき程に靜寂の氣は迫つて來る。その傍には幾十年の昔よりこの古びた祠を寫して水寂びたる小池がある。片隅には小さなる蓮の葉の二本許り枯れて折れたるも妙に淋しく、散り浮く木の葉の枯葉の根方に皆片寄りたるが風もなきに動くと思へば美くしい鶺鴒がつと現れて、長き草の蔭へ消えた。青く淀める底ひは年毎の朽葉沈みて堆いてあらう、その沈める朽葉の冷たい中に森の歴史を秘めて森のみ神が潜み給へるのではないか、小石を一つ拾ひて試に投げて見ればドンブと音してあゝその石はいつ底に落つるだらうと思はれた、後は又靜寂に返つて大きな水の輪がだん／＼と淡く夢の樣にいつ迄も描かれて、消ゆる迄もと水の面を瞶めて居れば、又鶺鴒が美くしい尾を振り乍ら靜かなる水にその影を寫して居る、これや森のみ神のみ使ではなからうか……。隙間を洩るゝ朝日影は淡う照らした。

（評）褻る勿れ。

○お使　　肥後　三浦たけ子

お隣りのお寺の門側にある、高い公孫樹の葉が、今朝は最早大半、黄色な小扇を拋ちつけたやうに、閑寂な御門前を猶更淋しい色に埋めてゐます、古風な門の瓦にも若干か落ち懸つてゐますのが、折々風に搖られては少し宛下の方へ後ざるのを、椽端に冷かな曉の風に頰を撫らせ乍ら飽かず眺てゐますと、兄さんがお呼びなさる、早々から氣の毒だが手紙を太田郷のいち子さんに持つて行つて呉れとの事、平常から優しい兄さん、妾はお使が寧嬉しい位、一寸帶を仕直して出掛けました。まだ萬一つとしたら寢てゐるお宅もあるのでしやう、山際に國道が出來ましてからは、此の道を通る者は滅多にないので、朝など靜穩で、かう何となく爽々した……時折冷たくも感じる潔な空氣は、身邊を柔かに遶つて、破れ草履の音する度に、露もつ草々の葉摺れ、小流の潺湲たる呼、茫然つとした樣な水蒸氣の多い空の色、と思へば何者か擽つたい程の幽な聲をして、「秋更けぬ」と、ハッとなつて前後を見廻しましたが、眼を遮るものは依然曉の淨氣に呼吸してゐる自然の清謐な姿許りです。嗚呼秋の聲。雜多な自儘の冥想に耽つて、俯向きがちに道を辿つてゐますと、ゆらと搖いだ小な土橋、カラ／＼に熟つた豆の香が吩と鼻を衝くのでありました、枯柳の二本立つた冠木門、杉垣の手前の胡麻畑には、鳳仙花美しう咲いて、其の間を二三羽の鷄の群が頻りに餌を搜索つ

ている、田の面展けたあたりには早も農夫の影二點三點、不知不識の間に最早來て了つたのでした。

撤水に潤然りとなつた門の途を突とは入りますと、突然水を落すやうな音、花瓶を左の手に採りなほして當方向き、微笑りとなつて掖居る義姉の立姿の氣高さ、思はず恍惚りとなりました。

（評）いかにも秋の趣を得たり。

（又曰）「秋更けぬ云々」の條は無くもがな。

○狩野川の夏曉

沼津　井上靜子

四時家を出てくの字形になつてゐて上流も見え下流も見える、水神さんの御堂に腰を下ろした。

下流の汽船停繫所あたりに白煙がたつと、ブーブーと汽笛が聞えた。伊豆方面へ向けて出發するのだ。多くの學友諸孃が故山をさして歸るのは皆あの船に乘るのだ、あゝ彼等の耳には此汽笛の響がどんなに聞えるだらうか。

上の方から筏が下りて來た、遠く天城の山から來たのだ。薄霞の中に茫と頰冠をした船頭が二人、今黑瀨の流れを下つてゐる。時計を見ると四時半。

まだほの闇い。疲れきつた電氣燈は弱い光を放つて川面に光つてゐる、吉田の方から鷄が微かに晨を告げるとすぐ後の小屋の中で鷄が勇ましく之に答へた。と、見ると香貫山がぼうと金色になつて來て八幡の森から鳥が二羽金色の光浴びて飛んできた。サット強い光がでると、川邊の草叢の影、川面にうつッて、五光が上流から流れる、見る〱水蒸氣がたつ。されく〱の雲が八九分綿帽子をぬいた富峯にかゝつてゐる。四方の山は皆靑い。今日は暑いだらう、八幡宮の森に蟬がなきだした。

（評）よき寫生文。

○富士登山記（一節）

信濃　倭　文子

六根淸淨お山は快晴と、元氣よく稱へながら、登つて行くと、先達の合力が不意に、ャァあの雲ではタ立が來ますはなあと云つて、其指さす方は、劍ケ峯の絕頂あたりかと思ふと、とんだ方角違いの麓の方であつた。オャ〱さつき迄殘りなく見えた川口湖の邊から、信州堺の連山迄が、山も、川も、人も、家もすべて、神秘の帷の樣な白い雲に包まれて、自分計りはさながら天上の人となつたかの樣な感じがする。裾野三里は見て居る間におほはれ、尙眞直に登つて、間もなく自分の足元に迄、彼の帷は投げかけられ樣として居る、其樣は、實に何んとも云はれない壯觀である、シバシ無意識に眺めつめて居ると、「オャ一粒落ちて來たわ」、と云ふ、誰かの頓狂聲、ハット氣がつくと、合力はモー七八間も先に居て、いそいで〱としきりにせきた

て丶居るので、仕方なし此壯觀を後にして、一尺登れば三尺下ると云ふ燒石の中を、金剛杖を力に、ザクリ、ザラ〳〵と、すべりながら登りはじめた、成る程、今自分の汗ふからとした手に一粒落ちた、二粒、三粒、五粒、十粒果ては百粒、萬粒蓙を通して着物がぬれさうに、降つて來た。雲は、いよ〳〵追つかけて來るし、雨は、益々はげしくなるのに、力足踏めばふむ程すべるし、呼吸さへ段々せはしくなつて、誰も〳〵汗ビッショリ、なか〳〵にたへがたいのに、さすがは合力の、重い荷物を背負ひながら、輕々と先に立つて、早く早くと、促して居る、モーすぐ前に七合目の石室は見えて居るのに、九十九折なる山道と、疲れた足とてはいつ達せられるかわからない、雨交りの汗が顔と云はず、背と云はずダラ〳〵と、流れる氣持ちのわるさつたらないのである、一生懸命に登つて、やう〳〵今一と息と云ふ所迄來た、先達はモー石室の石段を登りつめた、トタン、ヤアしまつた、此處はまだあきませんはと云ふ、聲を聞いた時は、言葉もなくガッカリしてしまつて、一足も前へ出ないで、斜に降りつける雨の中へ立往生の姿である、先生方も御氣拔がした樣であつたが、一寸御相談の後、其れては仕方がない、合力の持つて居る褞袍を着てうつ伏していらつしやい、少しの間ですからと、苦しい中にも、やさしいお言葉にはげまされて、各々手早やく蓙の下へ重い褞袍をきて、有り合せの岩の前へ頭を燒石にすりつけて、ぬかづいた、笠からは、ボテ〳〵と雫が落ちるし、生ぬるい汗は腋を流れるし、此儘夜迄降つたらば、どうし樣など丶心配仕ながら、ジッとこらへて居た、もの丶二分も立つたかと思ふ頃、「モー皆さん大丈夫ですよ」と、云ふ先生のお聲に先づ〳〵嬉しやと、誰よりも先に蓙と笠をはねのけてホット息をついて、立ち上つた、「あーあー苦しかつた」など丶云つて、起き上る皆さんのお顔は妙に青白く、ぬれた髮が兩頰に亂れかゝつて、



魚つり（賞外）　京都東洞院通　東田操子

背中に大きな屋號のある、色のさめた縕袍を五寸も一尺もひきづッて、ホーッと大きな息をしていらつしやる風のおかしな事つたらどうしても、ポンチ繪の上乘なものだ、草鞋の紐を結びなほしながら、下を見ると、あの壯大な雲が下界の塵を一掃して、今將さに昇天仕樣とするところである、日はもうソロ〳〵入りかけて居るが、麓の青葉がくれに、白壁がチラホラ見えるのは、何んとなくすが〳〵しく、小御岳の峯に五彩の雲の懸つて居るのは云ふに云はれない神々しさである。折柄吹き上げて來た一陣の涼風に力づいて、又六根清淨と出掛けた。

（評）頭の一過するを寫されたる所殊におもしろし。

○七夕の二日

はつかして

今日しも七夕の前日なれば、机洗つてお出てとお父樣のお云付、アイと答へてお隣の竹やぶの處から一寸覗いて種ちやん行きませうか、と聲懸けて置いて隅にある草履にはき換へ、ばた〳〵と裏の破戸つと押開け、柔かい砂地を踏んで海へと、走りながら右手で片側の草をむしり取るとぴしーん、と音して砂が跳ね返つて眼へ這入る、眼をこすりながら片影へ草履を二つ揃へ兩袖を背で結上げ裾をかゝげ、燒砂を踏んで机を水へ入れるとブクリ〳〵浮いて流れる面白さ大騒ぎして、新らしいたあしで洗つたのも暫時、あゝと腰を延して小手を翳すと砂山のうしろから、眼の限り、瑠璃の空に、玉と湧きたる一團の白雲、眩しさにつと眼を轉ずると海水を掬つては砂へかけてる、渺々たる水の色一刻一刻變り行く、机の足も洗上て燒砂に寢ころんで吐息、扨奇麗に砂で足をもんで起き上つて兩手で拂つて、草履をひつかけ、家へかへると、色紙短冊瓢箪盃等切り茄子すりをする、昔の柄のついた丸い鏡を取り出てふたを拂つて鏡の裏へ半紙を當て、左の籠の内の紫の一番ふくよかな茄子を取り、ズウ〳〵とやると紺紫の色美しく松竹梅の形あざやかに出る、後明日の天の川の歌を習ふて置く。

七月七日眼醒めて朝戸あけて露取りに行く、昨日奇麗に拂つた畔道を見て山にかけ上つて左に折れて竹やぶを傳つて、漸く里芋畑に出た芋の葉に手を觸ると玉散る如き、露そと器に取入れ、急いで下りかへる、くるくると水くんでサット身を淸め亂髮取上ると嗳き朝餉濟す、淸めたる机取出て取來し露に墨すり流し、祖父上の持來らる一束のこより通したる色紙短冊或は茄子すりたる、等取りて充分墨含まして、サラ〳〵と。

いつよりか天の川瀬に渡しけん年に一夜の夢の浮橋。

たが中もふくよりかはる秋風を契と頼む星合の空と、筆を置いて用意の竹に結付け、軒端に立つ、茄子瓜梨、等珍らしきを取揃へ今宵七夕祭の用意落なく、濟んでホッと息、それよりは仕事も休み、今宵までの心安い事。

(評) おもしろき風俗おもしろき書きぶり。
(又曰) 漢字を正しく記すことに注意し給へ。

○たけがり　陸奥　芳の江

多賀山に夏初茸いでぬときゝてまだきゆきけり。田甫傳ひ小川に出づれば家の垣に槿花盛なり、早や朝日に利鎌を輝かしつゝ草籠負ひてゆく少女二人みたり、大日如來の鳥居くゞりて草おほひかゝる徑をゆくほどもなく山路にさしかゝりぬ、露いとしげし。踏み越え打ち越えてゆけば櫟、松などの若きが生ひたるあたり、こゝらよりぞ茸は見られはじむを童いふに、いでとばかり、其處彼處あさりたづぬれども時經てそれらしき影だに見えず、いかなればといへば、きのふ麓の童ども狩りに來しといへば早や其があらし果てたるあとならむ、かの林に入りませ獲物ぞあらむといふ、おん身にすら得易からぬをなれぬ我に得らるべきやうなし、木に當り蟲に刺され露に浴せんのみぞかし、意氣地なきに似たれどこゝに憩ひて待たんほど、とりて香をきかせてよ、といひも終らぬに林の中に小唄きこゆなり、石に打ちかけて今來し方を望むに山々の朝景色、麓の樣得もいひ難きに、

　天つ女の御あしにふるゝやはぎぬを
　　朝のやま〳〵かうぶりとして。

たどりきて麓の村を見返れば
　森ところ〴〵家ところ〴〵。

やがて童は五つ六つ獲て來ぬ、いざ下らんといへば、此處迄來てむなしくかへらむは口惜し、杉山に桃買ひてよと妹いふに、めでたき朝の山去らんは惜しとまた裏の山にゆきぬ。きり開きたる一すぢみち、やがて其處にゆきて桃はなしやといへば、夏のはみなになりぬ、秋のは祭禮の頃ならではといふ、いと心細うて、

　茸なくてたのみし方に桃なくて
　　むなしき籠にはや下るかな

こたびは道かへて妙仙寺山より、やがて色つきたる田甫傳ひに、みちすがら露繁きクロバー二つ、それは四葉のなりとてつみつ。はや木立のしげみの中よりほの見ゆる百合の屋根は其處なり、待ちてや高き雞の一聲。
　あはれ我が籠は空しきものを。

(評) ありの儘にてしかも下品ならず。

○金魚の墓

横濱　澤田かなめ

「姉さーん、姉さーん」

さも忙しなそうに呼ぶ妹の聲がするので、例のまた惡戯でもして困つて居るのでせうと、お父さまの着物を縫ひかけた手を止めて椽側へ出て見ると、妹は目敏く目付けて、手を振り腰を曲げて、

「姉さーん、早く來て頂戴いよう」とさもヂレッタ相に言ふので、庭下駄を突懸けて妹の立つて居る泉水の邊へ行つて。

「美代ちやん、何うおしなの」と顔をのぞけば、

「姉さん、私眞實に可愛相でならないわ」痛い氣に私を仰ぎ見て、「あのお父さまに買つて頂いた金魚ね、そら閲ッてい三尾のね、あれが死んでしまつたのよ、それ、あ、あそこにね。」と哀れげに指す方を見ると、此の間緣日で買つて頂いた金魚が一尾水の上に浮き上つて居ます。それを知らぬ顔の他の金魚は愉快さうに泳ぎ廻つて居るのです。

「眞實にね、でも死んだ物は仕方が無いから捨てゝしまつて、またこん度の緣日に澤山買つて頂きなさい、ね、美代ちやん」

私は斯う言つて慰めながら、丁度側に有つた竹を二本に折つて、摘み捨てようとすると妹はあわてゝ、

「姉さん、後生だから捨てないで埋てやつて下さいな捨てれば猫や犬に喰べられますもの、可愛相ですわ」

おゝ、尤もでした、私は妹の清い美しい心根にツラ耻かしく感じましたので、

「美代ちやん、よく言つてお晃れだね、姉さんはもう少しで無慈悲な事をする處でした。さあ何處でも好い處へ埋めて上げますよ、と言ひながら物置へ行つて鍬を持て來て、妹の言ふが儘に埋めてやりました。

「姉さん、有難たう」

妹はさも嬉しさうに言葉を殘して足音バタ〳〵と立てて、お母さまのお部屋へ行つたが、程無く美しい夏菊の花二三輪を右手に、何やら書いた木札を左手に持つて驅けて來ました。見れば筆先き怪しげな平假名で「きんぎよのはか」と書いてありました。

やがて墓も建て、花も供へると、さも心地よげにニッコリして、母屋の方へスタ〳〵と驅けて行きました。

あゝ、何と言ふ可憐な振舞でせう！

定めし地下に眠つて居る金魚は、千古の名僧の讀經よりも、幾百人の虛僞の涙よりも、義理一片に建てられた石碑よりも、妹が一片の手向を、何んなに嬉んだてせう？

私は暫時、聖い美しい感想に打たれて、見るとも無しにその粗末な、然し貴い墓を恍惚として見つめて居ると、何處からか蝴蝶ヒラノ〵と舞ひ來て、夏菊の花の

上に、次には墓の上に、その綺麗な羽根を休めました。
恰もそれが名僧の引導でも渡すかの様に…。
（評）やさし。

○朝の散歩　本郷　なでしこ

おのれ先つ頃より心地すぐれざるに運動せよと人々のすゝむるにまかせ我家よりは程遠からぬ不忍の池にゆき蓮の花を見つゝ池のめぐりを一週りせんと思ひ立ち一日朝とくより家を出づ歩み行く町の家々戸をあけたるは少なくゆきゝする人もいと稀なり朝風心地よく身にしみて蟬の夢をや破りけんたえだえに鳴きいづる聲の高く梢より落ち來るなど涼しさいはん方なしやうやう池のはたにいづれば上野の森はもやの中に包まれて凱旋門の頭かすかに見ゆるあたり淡紅うあけぼの色に染めなしたるははや日の出てんとするにやあらん蓮は盛り過ぎぬと聞しかど今しも開かんと蕾のあまた見ゆるぞうれしきまづ辨天堂にいこひぬ見渡す池の面には朝露を帶びて優しうたてる蓮の花かげを浮きつ沈みつ娛しげに遊ぶは小鴨にやあらん日は次第に高く登りゆきゝする人の繁くなりゆくにいざ歸らんと堂をいで池の汀を歩みゆけば年若き男のハイカラ姿したるが巧みに自轉車に乘りさまざまなる形して是れ見よがしに乘り廻したるもをかしかたへを見れば小さき乳母車に乘りたる二つばかりなる稚子の心地よげにねむれるさまのいかにも愛らしきにほろの中をさしのぞけば何夢むらんばらの如き口元にをりをりゑみをたゝへ紅葉の如き手を僅かに動かすなど又なく愛らしこゝを通りぬけ今一週りして家に歸らんといへばつれの人の朝げ前なればとて聞かざるにさらばとて又の日を約して家に歸りぬ朝げをたうべ例の事ども仕終へて書齋に入れば窓の外小ぐらきまでに繁れる木立の中よりかしましき蟬の聲の聞ゆ今日の日盛りや如何に暑からむ。

（評）よく國文の體を得たり。



虫うり（選外）　信濃　横山　京子

○筑後川の朝夕　福岡　田中　威智子

一　朝

其昔、菊地の某が激流に血刀を洗ひしと青史を飾る一

頁、其筑後川は實に九國一の大河で、朝々の多趣味…見馴れた目にも愉快を感ぜずには居られません。渡守の作爺が吃驚する程大な欠伸をして、裸躰の儘御天氣を見るのが毎朝の例なのです、光雄さん邊の車井の音がする頃は峰の横雲散じ盡して、莊嚴極まる日の出を拜する事が出來ます、刹那早瀨に碎くるのは黄金の斷片です、と川霧は遙かに流れて向ふ川岸の牧場から悠長な牛の唸りが聞こえる、若津通ひの一番筏…内の親爺は…よ…と向ふ鉢卷の若衆は威勢がよいオーイと舟を呼ぶ人があれば無口の爺が澁々水馴棹を突ッ張るのです。

二　夕

喧騷して居た筏くみの舟子どもが打連れて歸路を急ぐあとには、光雄さんが今日も釣を垂れて居ます、ちぎれ雲の幾片が夕陽に匂ふのも暫時小豆色、灰色と褪せて褪せて、終には低う川下の森に落ちかゝるので繪ては見られぬ寂びしさもあるのです。ザンブと網を入れる音、舟がゆらゆらと搖れて、波紋が末の水烟から蒼然たる暮色は迫るので、水鳥の一群が筏をかすめてスー…と牧場の灯が幽かに靄の底から見えますわ。

◎日記の一節（九月三日）

讃岐　寺園　のし子

霽れたる秋の日の光を浴びつゝ、我れは獨り山莊に遊ばんと青葉の森になきかはす蟬の音や小禽の聲など聞きつゝ、野花の今を盛りと咲き亂れたる山路をわけ行けば詩趣多く且つ畵の如き自然の美は、山路の惡しきをさへ忘れ果てしめつ。やがて其の里には達しき。秋蟲の音繁き谷のあたりにて夕陽雲を彩り颯々とふきくる薫風に汗を拂ひつゝ、濯ひするなどさへ已に詩趣の溢れたる心地しぬ。

前に山後へに野を控へたる此の村舍の夕の、如何に幽靜なる事よ。

林のあなたより稀に聞ゆる鷄犬の聲、臼搗く音ならでは、此境の沈默を破るものなく、前の丘には綱の如き野路を馬を曳きて歸りゆく村童の影、見えつ隱れつ。をりしも山際近くなりし夕陽は、横ざまに光を野面に一射したれば、尾花は爲めに悉く白羽の征矢を植ゑたるが如く、咲きつゞきたる萩、女郎花などさへ光を受けて、更にあざやかに見えわたりぬ。

夕日は已に西山に隱れて、蟬の聲さへ物淒し、と思ふ程にそはやがてなきやみ、塒をさして、飛び行く烏の三三五五もいつしか遠く霞に消え失せて、チリン／＼と鳴そめし鈴蟲の音は滿山に溢れまばらに野面を流る童の唄も殘り惜しくも梢を渡る松風とは變りぬ。空を仰げば月は早や丘の小松の上にかゝれり。いろいろの虫は露叢にすだきて、おのがじゝ胸の思を訴るかと聞ゆ。あはれ斯る興味あるを後にしてやむを得ず、月を踏んで千草に宿る玉露を裾に散らしつゝ、もと來し路を辿りぬ。

佐々木信綱先生選

和歌

天

芝區新錢座町八　鶴岡　かつ子

猫の子が蜻蛉ねらへる夏の日の
　庭静なりざくろはなちる

（評）奇警なるをもてとる。

地

栃木縣下都賀郡穂積村下國府塚　岸　よし子

蜩のなく聲さびし妹の
　ひつぎをおくる苔の細道

（評）ひぐらしの聲胸の底ひにしみとほるらんと。

入

澁谷　宇多村　都留子

若楓の秋をまちつゝしげりあふ
　谷間涼しき夏の夜の月

（評）めづらしきふしはあらざれど上句の着想新らしきをもてとる。

秀逸

常陸　秋山秀子

芭蕉葉に小雨そぼふる夕暮を
　秘めし歌反古ひろげ見る哉

岩代　岸野常子

旅館ともし火ふけし秋の夜を
　たゞ風の音たゞ虫のこゑ

佐渡　谷川桂月

朝綠藤の花たる千丈の
　瀧の水上鳴くほとゝぎす

上總　御園生桂子

折れのこる蘆間の小舟霜にくちて
　秋かぜ寒くせきれい鳴くも

清國　林正子

さはりなば宿れる月や砕けんと
　ゆきぞわづらふ白萩のみち

上毛　眞砂かつ子

亡き人のかたみの笛を抱きつゝ
　月の萩野をひとりさまよふ

埼玉　里の女

戸によれば虫は高鳴く草月夜

かへらぬ母を忍び泣くかな　大分　やま川

○

枯蘆のそよぎ淋しき湖を
夕暮寒く白き鳥とぶ　上野　酒井園子

○

秋の夕なれし白鳩はなちやりぬ
われのみならぬこの思ひとて　熊本　逝く春

○

火にせむと幾夜いだきし御文かも
嫁く日近づく秋雨のまど　美濃　内藤みち子

○

別れ行く君見えずなりて我一人
物思ふ野邊に秋風のふく　静岡　秋の水

○

風なぎてすゝきに出づる月かげや
うごめく熊のたゞ黒うして　美濃　加藤よね子

○

晝を啼く鷄のこゑほがらかに
小村二三里栗たね花さく　下總　富美江女史

○

里の子がいたづらかきの武者人形
夕月寒き地藏堂かな

類想の歌を見たる心地す。

○　千葉　夢の家
岸の花ほの白き瀬月夜池の邊めぐる笛の主たれ
○　尾張　渡邊慶子
懐かしき君と別れて野に立てばちぎれ〳〵の鐘鳴り止みぬ
○　印旛　ふみ月女史
歌ならず我畫及ばず故郷の遠山かすむ夕暮の月
○　澁谷　白衣女
伯母君のやさしき笑顔みる毎になき母君のいまさばと思ふ
○　下總　武田のぶ子
なさけなき須抱きし雨の夜を一聲高く郭公のなく
○　和歌山　室谷保子
かへるさに辻うら買ひて人しれず讀みかへしては一人ほゝ笑む
○　安房　しん子
かやり火のけぶりの中に見ゆる哉呟が軒はの夕顔の花
○　麻布　五藤美子
秋雨に人まちわぶる夕ぐれははてなくつらし入相の鐘
○　みどり
世にあきぬ世にもあかれぬ今日よりは炭やく小屋に父とくらさん
○　愛雪子
月の夜に北を望みてほゝゑみてそぞろ戀しき想ひに耽る
○　深川　勝山千代子
はなちやる鳩の行方を眺めては思ひみだるゝ夕暮の空
○　上野　柳つぎ子
雨晴れて夕日目眩ゆき松並木獅子舞大鼓彼方にひゞく
○　備中　佐藤よし子
それと名の知られぬ草も秋たてばおなじ花野の錦なりけり
○　兵庫　柳田白百合子
森みだる川堤をゆく巡禮のおもやせ〳〵て秋の風吹く
○　羽後　前田久子

美しく萩よ桔梗よ咲きにけり繪にせん君を待ち顔にして
○　長瀬美知子

馬子行きて旅僧行きて日はくれて十里枯野に只秋の風
○　和泉　辻林白ばら

うら寒く夜半の樂器の血は冷えて垣根々々の蟲の音細る
○　豊後　渓の月

罪人の首おとせし古の森のあたりに狐しばなく
○　上野　好月

行末のさち多かれと祈りつゝ君と別れし村はづれかな
○　上毛　星野花子

たはむれに鳴子の綱をそとひきて雀おひやる村童かな
○　千葉　小川みどり子

古里の夢より醒て窓押せば霜白く雁鳴き渡る
○　秋田　伊藤澤子

小さき櫃白き布もてつゝまれて雨の夕を御寺につきぬ
○　伊豆　伊賀かれ子

君と二人黄雲にのりて空行くと夢見てさめぬ有明の窓
○　上毛　河内とめ子

塵の世を遠く離れし山里に菊作る人の齢ながき哉
○　伊勢　蘆月女史

酒をうる家はと問へば少女子の云はで指さす桃さける門
○　神戸　高橋艶子

唯ふたり人なき島に秋の夜を語ると見れば曉の夢
○　上野　小保方秋水

松風の落つる渚に小波の影ゆら／＼と月を産み出す
○　姫路　船戸幽規子

去り氣なくわかれし人の偲ばれてもろくも泣きぬ秋の夜の月
○　千葉　吉原薫子

打靡く烟の末に一村の薄亂れて秋風ぞ吹く
○　常陸　大和田清子

窓押せば誰れがすさびか冬の夜に淋しう聞ゆ清笛の音
○　尾張　渡邊霞石子



殘月（選外）　茨城縣　中村さほ子

ふたゝびは逢はんよすがもあらなくて朱塗の欄に鐘聞く夜かな
○　備中　大山よし子

大方の秋のあはれを一むらの萩にあつめて鳴く虫のこゑ
○　伊豫　星川千賀恵

暮はてゝ淡路はるかにおぼろ夜の月のみふれに歌おもしろき
○　兵庫　杉山俊子

つゆを帶びて一もとさける姫百合の花あはれなりたれかに似たる
○　横濱　板倉英子

小娘は今酒かふといて行きぬ夕顔棚の月待つ爺に
○　盛岡　しらつゆ

ふかみどり濃き灰色にうすずみに鎮守の森は今か暮れゆく
○　高槻　春雨子

暮て行秋さへ物の悲しさにつれなき旅の竹枕かな
○　名古屋　さとし子

世の中は花に嵐のことわざや逢ふが別れと誰の定めし
○　河内　春野つゆ子

外國にさらば渡りていそしまんつれ／＼君が脈がれをまつ
○　千葉　小川幸子

どこやらの鐘の音なびく野中道尾花みだれて旅僧のかげ

○　安房　白百合
ふみわけて進まん道のかたき世を思ひ知れとや茂る夏草

○　仙臺　秋月澄子
病兄の夢いかならん枕邊に白衣の天使そと寄り給ふ

○　周防　山下照子
臼挽きに寄りし女は歸りゆきて梟の音にふくる山里

○　磐城　隆子
なき兄がめでにし庭の菊の花一枝をりて墓に手向けん

○　福島　靜子
おぼろ夜や汐みつる海のさゝやきをききつゝ辿る山さくら道

○　三重　木瀬きみ子
波に入る夕日あか／＼雨はれの磯の松原千鳥なくなり

○　備中　高山富士子
美しき月の流れに千めばやなぎゆらぎて波高うなる

○　京橋　梅浦星香女
京の灯や奥のうたげの興更けて鼓は遠く加茂の川上

○　伊賀　杉原奈良枝
朝顔の鉢數へて立つ稚兒が袖にこぼるゝ露の白玉

○　近江　稚園女史
子等は皆凱旋り來りて植へし苗幾年ふりにきほふ我田や

○　兵庫　阪本はる子
新らしきみ墓に霞たなびきてうらわかき袖に萩の花こぼる

○　小石川　水塚すみれ
しのばるゝさゝら磯邊の女夫貝よべば男波のさゝやき遠し

○　相模　河野恒子
てふならで今宵をこゝに宿らんか萱のしとれ花の小ふすま

○　下總　桃村女史
雲ひくう薔薇にかゝる雨の朝わびゐの窓に山の氣寒き

○　大阪　金森よしゑ
ハルビンの煙と消えぬ沖之君山より高きほまれ殘して

○　羽後　渡部宮子
身の夢を袖に包みてたをやめのうたひまふこそ哀なりけれ

○　紀伊　たつみ子
君きみと吹きすさびしは此の笛よあゝ彼れの君いま如何にせし

○　本所　林富士子
木のくれみ心もしぬにおぼろ夜を時鳥なく小山田の里

○　安房　志武子
雨はれて蓮のうき葉の露の上に涼しく宿る夏の夜の月

○　上總　秋葉ひで子
たのみつる叔母上君はいたつきて兄上君は外つ國になむ

○　尾張　花子
三日月の影ほのめきて賤が家の軒端ゆかしき夕顔の花

○　大阪　茂登子
青葉陰稚兒の眠れる釣床に風かほるなり胡蝶まふなり

○　伊勢津　爾子
風すさぶ松の梢に棹かけて浴衣干すなる秋の温泉の宿

○　尾張　近藤八重子
城を出し灯火一つ消えにけり木枯荒ぶ夜は寂として

○　土佐　翠美女史
はかなしや佳節に君と相知りぬつぎの佳節に愛を犧牲とは

○　美作　よし子
百草のしほるゝ野邊に晝顔のひとり我世とさけるあはれさ

○　高崎　鈴木ゆき子
月はいま磯馴れ松にかゝりけり汀の舟に誰が笛の音ぞ

○　下野　溪泉女史
なき友のおもかげしのぶ夕まぐれ戀山のこずゑほとゝぎすなく

○　金澤　和田倫子
まめやかに友と語らふ折からに耳かしましくせみのなくなり

○　下總　岩瀬わかな
旅すがらえ知らぬ里に君訪へばはかなし病みて家あれましぬ

○　下總　山田政子
山おりて出る麥生の畑の角雲雀飛びたつ春の朝かな

○　遠江　中村初子
秋來れば半ば朽ちたる鉾杉の梢に高く鵙の鳴くなり
○　京都　古川春子
逢みると思ひし夢はさめはてゝうつゝにのこるうつりがもなし
○　下總　のぶ子
にごる世をいかに過すか世の人の引くにまかする牛や世の中
○　絹枝女史
天高く氣ほがらかなる百舌の聲熟柿ほしがる子等もみゆらし
○　大隅　谷口八重子
そよ風に黄浪湧き立つ田の中にほゝえみながら鶴立つなり
○　茨城　靑柳愛子
諸共にもすそぬらして踏み分けん人待虫のすだく花野を
○　上毛　齋藤幾子
故郷は夢路も遠き旅まくらさめてなけとか啼くほとゝぎす
○　福島　磯村女史
親子三人けふの海幸語り合ひて賑ふ居間にもるゝ月影
○　鹿兒島　前田みわ子
死せんかな死なば涙のかれもせんこひしき母の御墓やいづこ
○　山梨　小野やす子
水の面の色にもそまぬ蓮花清き姿を心ともがな
○　東京　冷花女
七巡里彼岸詣ての歸り路をほがら〳〵と菊日和かな
○　大阪　優子
百々千草花の香りの清きかな朝涼しく吹く秋の風
○　田子浦　山田清子
來て見れば庭の千草は色づきて虫の音繁き秋の夕暮
○　品川　小林のぶ子
秋雨に母をみとりの夜は更けてこほろぎ啼きぬ物思ふ窓
○　磐城　村岡滿津子
棹とりて利根の流を行く人の小唄涼しき初夏の月
○　四谷　さゆり
心なき時雨なるかな今宵子と別れてひとりかへるさなるを
○　京都　藤井まき子
漁夫が幸を語ふ船すぎて夏の眞晝の海靜かなり
○　石見　若草みどり
旅宿の夢驚かす聲もなく更け行く山門月おぼろなり
○　山口　姫百合
風の夜は浪の上なる戀人に夢ゆら〳〵と流れ行くなり
○　讃岐　靑葉女史
錦なりぬ夕の色はうすづきぬ黄朽葉おちて遂に聲なき
○　靜岡　提坂みどり
我が里は都をとほくはなれたる露草ふかき片田舍にて
○　宮城　孤雲子
白芙蓉みだるゝ窓に身をよせて思ひに沈む人うら若き
○　大阪　雲枝子
思はじと思へど又も思ふかな故郷にゐます君や如何にと
○　横濱　福澤春子
繪傘とりて勾欄近く立ちし時はつはつ咲きぬ白百合の花
○　備中　大山益子
よそながら見てや過さん手折なば胡蝶の舞や悲しかるべき
○　三河　深美凉子
古沼にたそがれ人はあしわけて折り來し萩を髮にさすかな
○　沖繩　ふさ江
移しうゑし百合や夏菊えみそめて十歩のにはも花の香にみつ
○　神守村　俊子
そゞろにも古郷いづる里の宵屋かげまばら草の香高き
○　千葉　嶺月
姫神がけはひの美水のそれならん香りも高き蓮の葉の露
○　越後　松風女史
故郷の友と語りし夢さめて獨り學の窓による哉
○　磐城　佐藤美子
女郎花風のまに〳〵なびくとは松の操のなきぞ悲しき

○　土佐　恒石峯子

殷々と湖上をわたる鐘の音に朝霧ゆれて殘月消し

○　河内　陰山禮子

月をながめ虫のほそ音を聞くごとに思ひぞはする君がみうへに

○　石川　なばな

聲低うさらばとしばしたゆたひのすそに名殘りの萩のしたつゆ

○　秋野きく子

蟲の音に淋しく我家忍びつゝ仰げば進める十六夜の月

○　能登　準　かずゑ

月影は去年とおなじく照せどもわが胸いかにかくはみだるゝ

○　土佐　野　菊

夕ばえや歸省か君の綸は成りてうすれ行きけり稲原小家

○　上總　隣　たけ子

吹くからに琴のしらべも通ひきて名さへゆかしき松風の里

○　紀伊　森井春園

朝な夕な出ては歸る雲見れば空にも道のあると思はる

○　富山　滿壽女

秋風に名殘を惜しむ菊の花ゑにかきとめて千代に眺めん

○　芝　靜扇子

青丹よし奈良をいてゆく京人の袖飜す秋の風かな

○　高知　ふた葉

呪子が呪のかれを打つ杉や空には叫ぶ木枯の風

○　牛込　春日蘆子

繪すだれにかよふ夕風身にしみてなき人しのぶ秋は來にけり

○　仙臺　中目鳴湖

亙嘯る荒海洋の神となりて船碎かんと思ふ我れかな

○　佐賀　副島松子

うらぶれて友を思へばなにとなくたゞなにとなう悲しかりけり

○　秋山とし子

浮島のよき夢ふれてほころびしあした野川の蓼の花白き

○　麹町　杉本若葵

芭蕉破れて秋風寒き窓の下にまづし詩人の世を思ふ妻

○　和泉　南　菊美

古里の御空かゞやく我が思ひ早く歸りて花とならまし

○　柏崎　藤田りせ子

父去りて病になげく母一人軒に雨降る音も淋しき

○　長野　田村あい子

初秋の夕冷しくたそがれて遠くひゞける芳泉寺の鐘

○　美濃　加藤よれ子

空高う白雲つゝむ神の森春の月出てゝ鳩さまよひぬ

○　上毛　松　子

ふる雨の音も淋しきさよ中にたえ〴〵聞ゆ蟲の聲かな

○　日本橋　生方清子

はだ寒しふけゆくよはのきり〴〵すいにし我子の魂かとぞ思ふ

○　京都　かすみ子

竹椽に据ゑし硝子の金魚鉢ねらふ小猫のまた可愛くて

○　下野　眞　月

梢のかなりし時は夢とすぎ萩のした葉の風匂ふかな

○　大阪　優　子

柴をおひて歸る山路に野分して小笠おひまく紅葉散りちる

○　出雲　中村ちか子

たまはりし夏休をあだにすごさじと本讀む窓に秋風ぞふく

○　印旛　若　葉

鳴きさけぶ蛙や蟬の聲たえて月出て虫鳴く夏の夜哉

○　徳島　敵内龜子

湯あがりのそゞろあるきに青田より吹き來る風ぞいと心地よき

○　周防　河島たか子

鳥一羽柿の實をはむ音のして鎭守の森の秋靜かなり

○　近江　辰井擧子

をかしげに祭の太鼓きこゆなり母在しますこぞならなくに

○　富山　松清女史

果てしなき學びの道にふみ入りて月の桂に宿をしめませ

○亡き母に手向けしみ花散りぬらん里の夕べに秋風ぞ吹く　弘前　崎野松江

○月あかく虫の音しげき秋の夜は君があたりのしのばるゝかな　武藏　齋藤ます子

○うつしゑや暗に聲あり姿あり幸にいませやなつかしのひと　大阪　新井けい子

○幾そ度花咲き散りて春は來ぬ戀の胸やいつ癒ゆるらむ　富山　松木きよ子

○夏もはや野川の末は枯初めて秋の千草は秋を知らせつ　牛込　阿部きぬ子

○清き月いつ我身をもてらすらん父母もなきうらぶれの子を　羽前　盟子

○ほどもなくかへりこなんと思へども今日の門出ぞかなしかりける　君津　金田女史

○皎々と照らせる月の木の陰にをぼろにうつるはたが影法師　大阪　大橋絹子

○高殿に薫香炊きて月賞づる人うら若し海沿の宿　石見　三明千鳥子

○憐れとも面白しとも見る人の心になびく夜半の月影　福岡　賤の女

○秋風に空のむら雲はらはせてこゝろくまなくすめる月かな　和泉　初緑子

○ねり絹のうちかけ着たる冬姫と二なくたゝへぬ一月の富士　廝布　露野玉子

○小さき手に小さき花籠たづさへて御墓詣での小さき子あはれ　越後　瀧澤みつ子

○あな哀れ細くきこゆる笛の音や初空さむく吹雪降るなり　大阪　村上しげ子

○秋の夕に淋しき聲や時鳥身にしむ風と山寺の鐘　備後　吉田唯子

近江　中山ふじ子

○風すさむ草を枕に一人旅月は冴えけり廣々の野に　山口　柳井巌子

○秋風をまともに受けて欄に笑みし狂女の恐ろしげなる　駿河　深尾研子

○なく虫のしらべ妙なるつゆの野や誰がふみわくる白はぎ小みち　山口　萩の里

○露うけて月様々の秋の野に君と語らん時ぞ戀しく　佐賀　秋月靜翁

○風もなき夕ながらも里川のあたりはいたく涼しかりけり　岩崎きよ子

○朝顔に髮結ひ直す心地よき椽の淺きに赤蛙のとぶ　埼玉　戸山うた子

○わが庵のかきねの小萩さきそめてにわかに秋の心地こそすれ　埼玉　近藤登久子

○あさな〳〵咲きかはりつゝ袖垣に盛り久しきあさがほの花　東京　漣月女史

○小鳥入れし朱ぬりの小籠つりさげし南の窓に桃の花散る　尾張　奥田久江子

○うたゝねの夢にみたりな彼のきみの友にとつぎし丸髷姿　富山　小林芳枝子

○幸あれと祈りし事の叶ひてか神の御座に近き山の端　埼玉　中村紫香子

○夕ぐれをちゝはゝいかにとおばしまに眺むるかなたかりがれのゆく　岩代　佐藤文子

○秋風に吹かるゝまゝに落葉ちるげにこのやにも哀れそふらむ　下總　原忍樹子

○利根川やちぎりを分けて此夕雁鳴き渡る印旛沼かな　常陸　秋山欽子

○七峯は薄絹もやに包まれて十里の沃野稲の香高き　岡山　松子

淋しさに堪へずや虫の鳴くならん鈴ふり虫の聲立てなく

和歌

能登　北島久子

○おばしまに身をよせながらつく／＼と行末偲ぶ夏の夕ぐれ

舞鶴　田口清廊

○夕ぐれの磯風やみて叢に鳴くくつわ虫聲哀れなり

伊勢　守屋みどり子

○菜の花のつゞく小道の七めぐり八めぐり鶏のうた流れ來ぬ

兵庫　岸本桂子

○潮ぐみゆ明石の瀬戸に身は旅立どうらさびしきや君ゐまされば

名古屋　西村浪子

○小波にゆらぐ春日は臼ずきて夕陽黄ばみ山の端に入る

根津　遠藤とみ子

○虫寳の籠のうちには故郷を戀しみて鳴虫もあるらん

大島町　鵜澤貞子

○秋もはやたちのゝ原は白露に錦染なす糸萩の花

南湖院　相樂きみ子

○つれ／＼のそゞろありきは友もなく君なつかしき此夕べかな

岐阜　山田はぎ子

○さびしげに萩散る山の夕暮にさゝがにほふや御寺の裏の

神奈川　鈴木みれ子

○かへりこぬ友を偲びて我一人淋しき今日の月を見るかな

名古屋　原田琴子

○ひとり子を都にやりて雪の夜に東のそらながめやる母

名古屋　恩田すみれ

○窓近く若葉の露のしたゝりて夕べ涼しき山かげの庭

神戸　今田櫻町

○此夕べ人待つ橋の三時餘り來ると來る人皆他の人

備後　岡田絹子

○出てそめしわさ田の上を吹きわたる風の涼しき初秋の空

池田なか子

○ちりの世にかりの宿りを結ぶ身をくまなくてらす清き月かげ

美濃　西村政子

○おのづから落て流るゝ谷川の木の葉や秋をのせて行らん

鹿兒島　千草

○みどり深き木の下影もいつしかと落葉にすだく鈴虫の聲

福島　平とり子

○秋風の吹き入る窓にあさがほの糸より細きはたおりの聲

安房　渡邊かく子

○人知れず涙にむせぶ己が身の清き心は神や知るらん

京都　梅子

○尾花さくさとへ一里の畷道破傘近く秋の風ふく

下總　渡邊一枝

○ころ／＼と啼く蟀の聲かれてやれ壁のぞく月影寒き

赤坂　森英子

○朝きりにかくるゝ影を見送れば湖の音にも秋の知れたり

近江　里子

○山寺の庭の山茶花散りはてゝ寂びたる秋を小雨ふり來ぬ

青森　柴舟子

○秋ふかみ吹きみだれたる白菊のにほひに迷ふ野邊のわかれ路

川越　小糸和佐子

○何となく悲しみせまる秋の日を野道たとれば夕の鐘なる

遠江　鈴木美津子

○月今宵少女子二人誘ひて鎮守の森に虫を聞く哉

横濱　齋藤とし子

○つく／＼と清く澄みたる月見れば何とはなしに母ますげなる

伊豫　迷小舟

○夕月の白う迎けゆく夕野道虫の音騷ぐ茶のくろの陰

長崎　百合子

○戀すべき人ならなくにまがつみの神のおん手にすがりある身よ

神奈川　杉崎はる子

○柿や栗實のりて我家鎖しけり秋こそ里の豊なるらむ

千葉　林くめ子

○行秋のあはれも深き此の夕べ窓のばせをに雨の音する

○　薩摩　菊子
曉の海や白帆動かず浪立たず沖の島へと島の飛ぶ見ゆ
○　埼玉　吉數里子
世をうとむうとましみ子を惜むとやたゞふる雨の悲しき夜かな
○　東京　夢守
花白き木犀の枝に小雀の首をかしげて甘き香に醉ふ
○　信濃　早川こまつ
小雨ふる軒端に虫の音も枯れてそゞろに思ふ古郷の君
○　橫濱　天の川
月清き神の御庭にうまゐせるを鹿の角の影長き哉
○　水戸　松島ゆり子
東なる都の友やいかならん今宵の月を見るにつけても
○　河内　春野つゆ子
まふこ蝶おはんとすれどすべもなしなげかはしきはいたつきの身や
○　橫濱　成田よしを子
さま〴〵の花咲き亂るゝ秋の野を旅僧ふたり淋しげに行く
○　麴町　淺井ゆき子
母まさず君もいまさず人まさず此の日淋しき夜半にありける
○　安房　花圃
淋しさを娄るゝ草木に語るらん萩の下葉に虫のこゑ〴〵
○　長崎　文子
朝日さす影に香をれる菊の花匂ひも見ゆる心地こそすれ
○　熊本　島紫蝶
夜は更けて音なふ人もなき庵の軒端しづかに五月雨の降る
○　安房　木村秀子
吹く風は一入さびし吾妻路の花のみやこの秋の夕ぐれ
○　上毛　江原衣子



憂き身（選外）　千葉縣　夢の家

絵團扇と契りし夢も淡うなりて今日秋風に桐の露見る
○　安藤きよめ
去年今宵君と別れし板橋に月をながめて昔をぞ思ふ
○　長瀨榮知子
まがきなる蕗の青葉に雨細うもの靜かなり四阿のそと
○　輪島斯保露枝
雲おもく夕淋しき五月雨に血に喘く杜鵑聲あはれなり
○　美濃　傍島敏子
久々に乳母訪ふべくと春の日を道きゝてゆく桃咲く村の
○　品川　近藤志き子
諸共にかはらじものと月が瀨の梅にちぎりし君はいづこに
○　神奈川　森きん子
負傷せし此の身は厚き御賜の惠みにぬくき冬ごもりかな
○　三河　あや子
春雨や小傘斜に姉妹の見えつかくれつ行く小松原
○　神戸　野原とよの子
岸によす浪音ひくゝ風そよぎ磯馴松縫ふ須磨の沖の帆
○　京都　岩淵國子
月二つ小波清き琵琶の夕べ君は繪にせよ我歌にせん
○　相模　曾我てつ子
魂祭り旅にしあらばせめてもと詩もて祭りぬわがなき妹を
○　菊子
松なみ木通して月かげ水くゞり金波銀波の橋げた洗ふ
○　讃岐　吉田園菊子
谷川の流にのぞむ柚が家の窓に影照る若楓かな
○　弘前　せきの桂花
姫夢む野らに霞の一重開けて訪ひし胡蝶の道遮りぬ

和歌

○　大阪　多根子
都なる君がたよりをくりかへし月にほゝゑむ八千草の庭

○　廣島　渡部　安子
さほ鹿の聲ははるかに聞ゆれど姿を見せずなくもつれなし

○　兵庫　賤　文子
馴染なき旅の寐覺にかりがねの聲なつかしき古郷の妹

○　播磨　初子
四方の色かはり千草は枯れ果てゝまがきに匂ふ白菊の花

○　陸中　大立目　白羊
夜只鳴く草の露のきりぎりす夢もむすばぬ我れを知らずや

○　上毛　蚊猫
すゞ虫にあたゝき夢をやぶられてさむさおぼゆる初秋の夜半

○　横濱　吉川　清子
渡しまつ旅僧いたく頬やせて尾花に白う秋風のふく

○　大阪　平尾　時子
うす化粧すまして向ふ姿見やほゝ笑む姉の顔赤うして

○　東京　中島　鏈子
江の秋や枯れし蘆間に人もなき舟の殘りて雲のみ急ぐ

○　備中　大橋　知恵子
ひぐらしの鳴てあはれを添てけりものうき人の秋の夕ぐれ

○　相模　井上　たけ子
平家を語る須磨の宿の月更て琵琶抱き上る膝の冷けき

○　群馬　金子　落葉
大方の世のあはれさを偲ぶ身のいやまし偲ぶ秋の夜の月

○　若松　加藤　よし子
人しれず思ひは君にかけたれど罪はおかさじゆるしませ神

○　神戸　大谷　秋月子
はした男の口號みつゝいかるかも今は昔の姿にあられど

○　相模　岩田　小春
いづこよりしのび入りしかきりぎりす文讀む窓のもとになくなり

○　茨城　小石川　しづ子
月のさす槇の板戸に音連て友かと問へば水鷄なりけり

○　廣島　佐保女史
十七の少女子たゝむ萩の經叢の亂るゝ虫の音きよし

○　大阪　文子
たつきりに木の葉みだるゝ千丈の瀧の水上紅葉すらしも

○　陸中　小松澤　きく子
再びは見ずとひめにし寫し繪をまた思はるゝ秋さびの夜や

○　津市　葉　栄子
秋風や君奏でます箏の音胸に滋むよと面伏せにけり

○　芝　登美多　つゆ子
寺遠み秋たそかれの鐘寒う野川土橋を馬士しぐれゆく

○　露あせ子
さしのぼる月かげ清みいやましに澄みわたるかな笛竹の聲

○　千葉　野々宮　國子
竹山に一聲高く百舌鳥啼きて青田を渡る朝風寒むき

○　千住町　宮崎　ゆき子
老いませる父をば肩に里の子が稻田をめぐる秋ぎりの中

○　埼玉　大野　斷琴
旅尼僧宿求め來ぬ秋のくれ墨染衣褪せて淋しき

○　甲斐　新田　さか江
しばらくは吾を忘れて聞く箏の音も澄み渡る今日の月かな

○　陸奥　もと子
たゞひとり野路をたどりて花つみて都の友を思ふころかな

○　錦江子
病まする父の御聲の懷かしく早や立出づる望月の宵

○　愛知　長阪　よし子
何となく物ぞかなしき夕暮をいとぞ甲斐ある紅葉山かな

○　芝　白萩
疎はしき友の水莖うちたえていとゞ淋しきわが心かな

○　神田　石田　濱影
孤兒の戰ぐ尾花にほゝとゑむ夕暮盡る吾家の裏

○　岡山　九津見房子
大神の御まなざしやと夕づゝに讃美歌うたひぬ白百合の閾
○　備中　高山富士子
むしの音に琴の音ほそるまるまどにさびしきおきの月ひとり見る
○　豐前　村田和子
奥山に笛の音聞ゆ賤が屋の誰れや今宵の月を見る哉
○　尾張　千萬子
ふる雨に人はかへりし向島こゝろ靜に花を見る哉
○　仙臺　香幽女
叢雲も跡なく消えて難波江の松の梢の月のさやけき
○　大阪　筒井蝶夢
なつかしの君やいづこにおはすらん夕づき消しはま松のうへ
○　岡山　芳艶女史
そよ／＼と吹く風さへも秋めきて小川の紅葉ちりそめにけり
○　伊豆　彩雲女
夕月は黄金色さする露にのりて小笛吹く子の頰てらすかな
○　陸前　猪俣きつ子
曉の霧深くして春日山紅葉のをちに鳴く鹿の聲
○　堺　須江子
雨細く虫のしきりに鳴ける夜や嵯峨野の奥を小提灯行く
○　周防　柗榎子
月みるも虫の音聞くも堪やらで閉していりぬ山里の宿
○　千葉　林よれ子
夕鐘に萩の花散る山の家に髮の毛白き病める母君
○　八王子　森谷龍子
夕日さす向ふ端山に馬子踊る眞紅に響く馬のいなゝき
○　下總　萩原葎月子
うなたれて咲く秋草の花の上にとまる胡蝶の疲せにける哉
○　和歌山　山本とく子
秋萩の枝もたわゝに白つゆのこぼれて匂ふ庭の八千草
○　備中　靜香
篙さす棹の音のみ高うして朝霧ふかし川添のさと
○　武藏　育柳瀬生子
葉柳の二葉三葉ちりて川添のやかた涼しき初秋の風
○　和歌山　佳月女史
關の町はづれ横町うち過ぎぬ夜廻りたゝく拍子木の音
○　信濃　ときこ
ものおもひ寐られぬ夜半の淋しきに雨ももよひて時雨するなり
○　美濃　篠原みき子
住む里は山川遠く隔つとも心にいかて隔てあるべき
○　山口　寺内つき子
氷うる池畔の家に秋立ちて夕さびしき水の欄干
○　酒田　菊池りう子
白萩の野道千里にゆきくれて此宵は花の露に宿らむ
○　八王子　布田藤子
長かりし暑中休暇も早過ぎてわかれを惜む古里の友
○　大阪　金森よしゑ
小雨ふる淋しき秋のさよふけてふみよむ窓に虫の聲きく
○　秋田　霜菊女史
水打てば月破れにけり露散りて又も碎くる舟の端かな
○　伊勢　濱出きみ子
ほのぼのと高野の山の暮れ初めて尼行く空に雁渡るなり
○　長野　富田わかば
この朝けかりの一つら訪づれてにはの松風音かへにけり
○　美作　性全隆芳女史
うら若き閾の香りふき込めて君にさゝげん白蓮の花
○　豐後　田原秀子
はつかりの空に聞えん朝ぼらけ只十五夜の月うすうして
○　相模　二葉子
山の端に十五夜の月まん圓く山の影よりあらはれにけり
○　安房　秀月女史
秋の野にみさほ正しき女郎花いづれの風に靡かざるらん

○　松前　中島俊子

江戸川や流も澄みて清ければ菊もめてゝや影やどすらん
○　静岡　葉濵

秋きけば宮城の眞萩露ながら朝な／＼のあはれにぞ見ゆ
○　石狩　小川初子

秋の夜に更けにし月の影ふみてたどり行くこそ趣深きかな
○　弘前　竹中喜樂久

さしくしの曉かけてほとゝぎす一こゑ高くなきてすぎけり
○　遠江　藤井瀧子

み自から心をこめし女郎花やさしき蝶のたづれ行くらん
○　小樽　澤谷恒子

此夕べ萩の下葉に風ふきて何としもなく秋の悲しき
○　千葉　みどりば

殘月の滴る露に秋をぞぬらして初めて秋をおぼゆる
○　下野　染宮臥仙子

はら／＼と岸の野炎の花散りぬ川飲む牛の小角の上に
○　新潟　横山里以子

人なれば唄ふ童の心にも秋はあるらん里の夕ぐれ
○　下總　笑芳女史

尾花野を白衣の人のそここゝと綸日傘さして行くや美くし
○　我孫子　君子

國のためあくまで盡す紅葉ばの錦を飾る秋は來にけり
○　德島　坂野白露

見る度に月に心は殘られど今日を限りと思ふ我が身は
○　駿河　伴野きよ子

たらちれの越方忍ぶ夕まぐれ故さとちかく雁なき渡る
○　美濃　篠原みき子

眺むれば雲井はるかに時鳥君に傳へよ吾心して
○　八王子　永瀬らく子

あすや行く友と名殘に秋花野月いてかなし露に四袖を
○　山梨　小尾雪枝

いろ／＼に色香をきそふ菊の花何れが千代の數まさるらん
○　茨城　前原ことえ子

何となく思出おほき秋の夜に心もしめるあめの音かな
○　千葉　石田はつ子

君と別れかへる畑道きりこめてさびしときゝぬ雁金のこゑ
○　四備　芳翠子

行く水に影ほそり行くあさがほや夏の盛りを夢に見るらむ
○　静岡　貞水女史

待ち暮す父の便りは今日も來ず時節待てとや松虫のなく
○　遠山柳子

秋の空早やたそがれて夕映の色うつくしき櫻島山
○　芝　飯田白露子

馬の背に幡いかめしき武士やみよ靖國のやしろにたてる
○　靜岡　智惠子

來ん世にもかくれて泣かん陰あらばふたりもとめてそこに宿らん
○　秋田　花環子

音もなく芭蕉はさけて地に落ちて蝸牛角出す雨の夕暮
○　下總　林こん女

見おくりて見かへりつゝも秋の夕べ松原さして君はゆく哉
○　宇都宮　小森谷あき子

秋の葉に露の宿りて虫のなく寄宿のまどに雁がれぞきく
○　下總　和香子女史

紀の國の歌枕見よと旅のそら今宵は夢に月と歌かたる
○　下野　柏瀬きく子

憂事のかづを宜れし影ならめ山毎にうつる更科の月
○　周防　をみなへし子

すや／＼と眠むる小供のほゝゑむは小蝶を追へる夢や見るらん
○　上野　佐藤露子

乘りすてし小舟に秋の月細し蘆間は波のたゞ寂として
○　佐世保　遊子

淋しさよ逝せし君が笛吹けば夕榮の空雨降り出でぬ

○

童箏も家にかへりし眞ひろ頃靜けき野邊にゐきつ飛びかふ　本郷　曾我霞江子

日ぐらしの翠する山の松蔭に岩間をくゞる水ぞ凉しき　岩手　月桂女史

月高く更け行く夜半の閨の戸をもれてきこゆる虫のこゑ〳〵　越後　白菊子

中垣におく露さへも朝顔やはかなきものをたよる其の身は　埼玉　井口よし子

やがてまた逢はるゝものと知りながらもすそも露に重き別れ路　長門　原田春子

女夫杉右に小瀧を左して花の紅葉にうもる茶屋に　秋田　松田せい子

秋の夜を姉がつけたる下の句の身に染む窓に綴こぼるゝ　秋田　黒丸TK子

世の人のわけ入る道はことなれど神の數へはかはらさりけり　淺草　尼門千代子

みなさけにそむきまつりし身のつみを涙につぐる君のおくつき　上野　月光

靄淡く綸絹に似たるおほみ空湖越ゆる朝の鳥かな　堺　竹叟文子

幸なくて逝きし少女の御靈かも泉にかざす白百合の花　阿波　夢の人

朝あけの江のあしかげに白鳥の羽ばたきかろく秋のあめふる　麹町　芳子

見るひとのちゞのおもひをさながらにうつしがほにぞすめる月かな　京都　小春子

畦めぐりあぜめぐりとぞ書かれたる兄がすさびのこの秋の日記　下野　園子

朝靄の淡きひろ野に月見えて草かる少女の國訛り唄　越中　北本卯月子

秋胡蝶風のまに〳〵吹かれきて枯れし野菊に消しうおちぬ　新潟　なみ子

雨をよぶ蛙の聲におとづれてしづかにくるゝ入相の鐘　大阪　伊都子

うらぶれて秋野をたどる旅僧の袈裟吹く風ぞ凉しかるらむ　和泉　上野霞子

夜毎打つ砧に我身古りにけり住みて久しき更科の里　伊勢　つれ子

いかなればつめたき石に名はきざむ逝きにし君も情ありしを　伊豆　箏田十三絃

白萩の露吹き亂す秋風や虫の音細う月の夜更けぬ　波島　工藤以津子

友やよぶはた親よぶかかこみ虫放てば萩に一しきりなく　伊勢　松本しげ子

やう〳〵に古郷遠くなりぬれば招くやうなり庭の松がえ　備前　永原遠霞

露ふかく虫の聲々いとさえて尾花のかなた月出でぬらむ　岡山　吉井貞子

月毎に月見ぬ月はなけれども今夜の月にしく月ぞなき　尾張　加地多愛子

すみ渡る月な戀ひては秋虫の今宵も如何になき明すらん　伊豫　千草

かきならす琴の悲曲にほろ〳〵と雨の小萩のこぼれける哉　日本橋　翠山紫柳子

野にたちて別れの歌を高誦すれば君かとぞ思ふやまびこのこゑ　横濱　澤田かなめ

ふと逢し人をなつかし見返れば形ともしばし思ふ夕ぐれ　茨城　増田けい子

吹き誘ふ風に亂れて落栗の音もさびしき秋の山里　愛知　智峰

なつかしき君はゐまさずなりにけり一人ながむる十五夜の月　神戸　池田紫蝶

○　上毛　新居輝子

秋の夜はいとにぎはし丶我庭の千草にすだく虫の鳴く音に

○　信濃　はつれ

毒蛇に追はれて逃ぐる小羊のあはれ血をひく茨の中かな

○　明石　すみれ子

わけ行かば徒にし露や消なまし眞萩うづむる野邊のほそ道

○　群馬　ふみ子

鈴下駄の音に夕風渡り來て妹の袖に萩の露散る

○　備中　玉華

何くれと庭つくろひて待つ秋の門田豐かに稻穗出にけり

○　大分　吉富とめ子

秋の水靜に流る村はづれ立てる巡禮年うら若き

○　澁谷　宇多村都留子

富士見ゆる樓のおばしま靜かにて入江をなゝめに白鷗消えぬ

○　德島　山本みや子

みのりたる稻の間の細道を都めきたる人よぎりけり

○　陸中　若生すみれ

逢へば嬉し別るゝときはうきものと知りつゝ今朝も袖ぬらしけり

○　小間使

露草のつゆをいのちの螢火は軒の小かごに何ともゆらん

○　明石　孤蘭女史

こぐ船や靜に樂のかよひ來て月なつかしき初秋の宵

○　德島　住友登喜子

ほゝ笑みの夢のゆくへか白蝶の手にふさはしき花にむつるゝ

○　茨城　川中のぶ子

胸光る心喜べ父君と聞く夜涼しき秋の滿月

○　紀伊　宮井よし子

金髪の少女の衣の白き吹きてエデンの春の花を吹く風

○　長野　山田くに子

花の香の百を秘めたる舞衣の衣桁に薫る春のれやかな

○　兵庫　稲見村子

神ゐます離れ小島の朝あけや霧紫に神々しきかな

○　長崎　伊東りう女

かたみぞと夜ごとにしらぶよつのをも君いまさぬを何樂しまん

○　攝津　なでしこ女

いざ汲まむからみにからむ朝顏のつるべ取らるゝ朝げかなしも

○　伊豫　高橋茂子

ふる里のそら懐かしき秋の夜の月かげきよしかりがねの聲

○　熊本　平岡とし子

漁人いかりおろして海の面に捨てたる舟は月になり行く

○　播磨　阿山征子

さゝれ寄る波に足をば洗はせて夢の跡追ふ磯の春かな

○　下谷　齋藤節子

吹く風の身にしむ今日となりにけり年のなかばはいたづらにして

○　播磨　醉芳詩史

木下闇狐狸や化なん道一里やすく通へと地藏尊かな

○　大阪　たなか

何となく思ひ出多き秋の夜にあはれをそふるむしのこゑ〲

○　備中　稻本千惠子

ふさ〲と稻の穗低うなだれて田の面嬉しく秋風の吹く

○　千葉　立野

露深き秋の山路を越し行けば袂ににほふしらきく花

○　群馬　横田君代子

朝やけの紫雲紅雲捨てがたく馬子もみとれて峠の小徑に

○　小樽　梶水仙

白露のおくての山田雁鳴きて夕暮寒く秋風ぞ吹く

○　滋賀　田舍娘

都府樓の跡を吊ふ不如歸誰かは忍ぶ其古へを

○　飛驒　千代子

さらぬだに美し君が初袷衣更へせし今朝の姿は

○　芝　こてふ

水馴棹老いてとる身に暇もなし夕霧月夜雁亂れゆく

○もしほたく袖が浦はの夕なぎに沖邊はるかに千鳥なくなり
千葉　石渡初音子

○きて見れば姉の住みかふこの小屋はしかの聲きくおくやまの里
伊豆　上原ゆき子

○十六夜のさやけき月に語らひし友はいづらにゆきまどふらむ
石川　嵐友女

○入相の鐘もかすかに雁渡る黄稲田千里秋の黄昏
越前　田中里代

○枕邊の光をぐらき行燈に旅のつれ〳〵歌かきてみし
上毛　秋琴女史

○香ぞ高き黄菊の宵やおもひれの枕に見えし面影のきみ
長野　豊田たかの

○はつしもや虫のねさむきうら畑朝餉の宵菜つむにつめたき
香川　白ぎく

○ちかくなり遠くなりつゝゆく水の音おもしろき木曾のやまみち
福岡　天津乙女

○しと〳〵と時雨興ずる秋の夜は歌に更けゝり白萩の宿
上毛　關口はつ子

○筑波嶺の今日は遠くも見ゆる哉立つかかすみの武蔵野の原
扇城　くらなし

○朝霧の深く細江に立ちこめて苫舟一つ蘆にほの見ゆ
陸前　佐々木巴泉子

○稲架や妙樂得たるみ佛の方向しめすすり火の光り
近江　藤居英子

○朧夜のひとり思ひに堪ぬ時ほのかに聞ゆ讃美歌の聲
尾張　清女

日本橋　小蝶

初秋（選外）
牛込　松野すみ子



○小男鹿や三笠の山に迷ひてゝ昨日にありし妻や戀ふらん
京都　大澤孝子

○我面の母に似るよと人の云ふになげし鏡のすてられぬかな
西多摩　女郎花

○千町田の稲も殘らず花咲きて煙り豊けき村々の秋
羽後　菊池露子

○仲秋の月の一夜を川添の乳母がり訪ひて虫の聲聞く
芝　加藤延子

○亂れ髪君と語りし夢さめて木枕かたき秋雨の宿
千葉　吉原綾子女史

○山住や俳諧枕のつれ〳〵に小窓の塞を鳴子繩ひく
滋賀　中井さと子

○鐘樓の影小狐のさまよひて入り殘りける山の端の月
岡山　安田梅月

○文窓に三日月淡くてりそひて初めてきゝぬ蟋蟀の聲
東京　松島秀女

○長雨や信濃路なれば夜もすがら出水の鐘をきゝにけるかな
越後　きし子

○主もなくみ堂の屋根を月洩れて寺あれにけり上山の秋
芝　木村花枝

○このおもひ君にあかさんよしもがな萩ちるゆふべ雁なきわたる
丹後　紫涙女史

○ほの〳〵と霞晴れ行く興謝の海兄君のせし船やいづくに
飛驒　萬殘月女

○あはれ誰が夢や守るらむあれ墓の卒塔婆のかげに紅萩の花
大阪　伊藤あさ子

雛の前姉に抱かれし幼兒の笑める顏顏に桃の花散る
○ 鶴城 苑くら子
石碑に夕の鐘のひゞきして手向けし香の烟みだるゝ
○ 稻井 千代子
うごきますな薔薇花そへて窓にせんにやさしき君の湯上りすがた
○ 神戸 石井愛子
むら雨の窓打つ音の靜まりて蟲の音淸く夜は更けにけり
○ 鹿兒島 竹中たみ子
母君のひえたき言のたび〳〵になほ亡き母を思ひ出づるかな
○ 神田 丹後とよ子
たらちねの懷なづみかへりゆく君はうれしも我ぞかなしき
○ 長崎 角田秀子
月みればありし昔のしのばるゝ秋の窓なる君が短册
○ 伊豫 星川千賀惠
病みませる父のみそばに吾居れば心も千々に蟲の音きこゆ
○ 本所 田淵いつ子
見渡せば雲は晴れたり日は落ちて心靜に入相の鐘
○ 八王子 井澤菊江子
小夜更けて閨の戸たゝく秋風に嬉しき夢や破られにけり
○ 尾張 井口とよ子
てる月のさやけきよひはことさらに琴笛の音もすみわたりけり
○ 靜岡 武縣しづ子
花の咲く野邊にうかれて今日もまた歸へさに月の影をふみけり
○ 近江 戸田波子
三井寺の鐘も淋しく更る夜に月のみ渡る鳰の海原
○ 尾張 野田藥子
時雨する古塔淋しく黃昏れて鐘の餘り音湖を西へ消ゆ
○ 神戸 すみれ草
逝く夏の名殘を惜む虫の音か涼しき夕べ蟬の一聲
○ 丹波 なみ子
須磨の町海に向へる一すぢは青簾つる藁ぶきの家
○ 鹿兒島 前田みつぎ
二十年の昔こひしき寫眞に身の來し方を偲ぶ今日かな
○ 大阪 酒井ふみ子
ぬる蝶の夢ふきさそふ朝風にとこなつかしきはなの色かな
○ 京都 秋子女史
仙人は如何にあはれと眺むらん有明山にすめる月かげ
○ 神戸 山下都子
暮かたのうら淋しければはなれ家に遠き砧の音身にしみて
○ 白金里 冷花女史
病ませる妹を見とりの此夕べ籠の鈴虫野に放ちやる
○ 豊後 稻葉女
主やたれ妙なる笛の調べかな月はいよ〳〵さへ渡りけり
○ 鳥取 山根綾江
秋末や花散り初めし萩小路風はいぬゐに肌うら寒し
○ 滋賀 琴音女史
なつかしき君の玉づさ手に取りて故里おもふ心ましけり
○ 宇都宮 よれ子
友垣のやすらふ庭にさゝげ花あひなく散りて秋は來に鬼
○ 丹波 山百合
終日は問ふ人もなき蓮池の花咲く今日は賑ひにけり
○ 埼玉 高山ふく子
濁の世を獨りのがれて草中に淸くも咲ける白百合の花
○ 和泉 すゞ子
鐘樓につく手休めて見かへれば嶺のあなたに雁なき渡る
○ 下野 山口良子
高殿の燈火淡き月の夜をおばしま白う琴の音もるゝ
○ 群馬 飯塚美超子
かへりまさぬ人となりぬと知りながら出征たる君のいまもまたるゝ
○ 美濃 杉山せい子
音に聞く都は暑き夏なれば君がみいかに君がみ思ほゆ

天 ○秋の夕

福井市寶永上町五四 榎並保子

此の夕、萩いとゞ亂れ散ることよ。

落ちし朽葉の蔭に鳴く蟲のこゑ、故郷の空さして行く雁がね、あはれ、秋こそ物ごとに弱き女が胸を泣かしむれ。

鹿呼ぶと日毎吹きなれし笛の音、あゝ今宵は吾れながら、淋しう響きつ。

幾年か、鹿追ふと持ちなれし、古りにし鞭を野になげて、見入る夕べの雲に、あゝさても思ひ出多きかな。

泣かじとすれど身は依然、何日までもか弱き女なるものを、君あらば、君だに生きてませばと今更に詮なき愚痴のみ、くりかへしつ。

夕べ照るみ空の星を仰ぎては、あれこそ母がみ瞳よ、これぞ父が慈眼によう似しと、果敢なき空想にかられつゝ、こゝに幾年、榮えなき身をながらへて、やさし雄鹿雌鹿の群れに遊ぶ女の身、明日は又、如何なる冷たき風の此の胸にすさぶらんなど想ひては、あはれ、涙はとゞめがたくて……。

幾十里、故郷はなれて只一人、語らん友もなき夜は、氣强よき男の子さへ、いとゞ淋しと聞きつるものを、ましてや女の身の、千々に物悲しき秋の宵、亡き父母戀ひし、亡き君なつかしの念にかられつゝ、遠き故里の空に見入りては、鹿呼ぶと悲しき音に笛ふかん此の心、あゝ、さても得たへじな。

世を忘れし身なれども、いとゞつらくて。

いで鹿よばんかな、日は暮れにしものを。

一聲、悲しき音に笛ふけば、歸らんと互に呼び交はす鹿の聲、あゝ今宵もまた、彼れらを友に、せめて夢にだに憂へを忘れんかな。

（評）その笛の音この鹿の聲さながら聞くやうにて思はず袖を霑らさしむ。

地 ○ねられぬ夜

鳥取市鍛冶町五十七番地 上山千重子

初夜つぐる遠寺の鐘の音、丹塗りの枕に通ひて、はや數刻、さすがに彼方此方の燈も暗うなりて、思ひ出多き一夜も將に更けて行くのであつた。噫私はどうして

も眠られぬ。外面には嘈々と身にしみ渡る虫の聲——今宵をあはれの極みと、聲ふりたてゝ鳴くらんか——戸ざゝねば月に影さす眞萩のみだれ、置く露の如何に冷めたい事だらうと、おぼえず寢衣の襟が正される。此方に寢かへれば、夜目にもしるき白木の鏡笥、長持の數々、此の日頃我ためにと新に購はれしそれである。あはれ住み馴れし我家の起臥も、今宵を限りぞとおもへば、云ひしらぬ悲しさが小さな胸に一杯、ア、嫁ぐのはいやと首を振りたい!! 厭やといへば妹の花子、むつがる折ふしに「そんなだと他所へやりますよ」と、母様が仰せられるので、私の嫁ぐのも全く此の故と、いぢらしや母に取りなす姉おもひ、「母樣堪忍してあげて……〃姉樣モーおいたをしないこと？ゆるしてあげて頂戴よー」と、小羊の樣な眼に涙を浮べて……。ア、斯樣な可憐な花子を殘して如何して嫁がれよう、いつまでも〳〵共に居たいとおもふのである。目は彌冴えまさりて、虫の音しげく寂寞の夜を破る。おもへば八年は束の間の夢であつた、父樣母樣ならびて早く成人せよと、わが黑髮撫て給ひしは昨日のやうに覺ゆれど、いまは丈けにあまる、さて明日はどのやうな髷に結はれるやら、赤い手柄に眞心こめてひたすら事へねばならぬ、溫順貞淑は女の德ぞと、噛んで含ませるやうな母樣の敎訓、親の慈悲は何處まで深いのかと、今更有難涙に咽ぶのであつた。噫しづの苧環の、過去に未來にめぐる思ひの小車、それより理想のホーム造れかしと兄樣に肩叩かれて、部屋に籠城して耻しさに堪へなんだ事、夫なる人の兄樣の學友なる事、斯くと知りもせば宅に遊びに參られし時、注意すべかりし坏、取りとめもない感想に寢もやらず、しばし茫然、折柄月や雲に入りし、あたり俄にうす暗くなつて、虫の聲のみ啷々と天地に響くのである。

（評）嫁ぎの前夜の情なる程斯るものなるべし。

（又曰）いよ〳〵俥に乘りて家を出づる時落涙せざるは稀なりと聞く

人

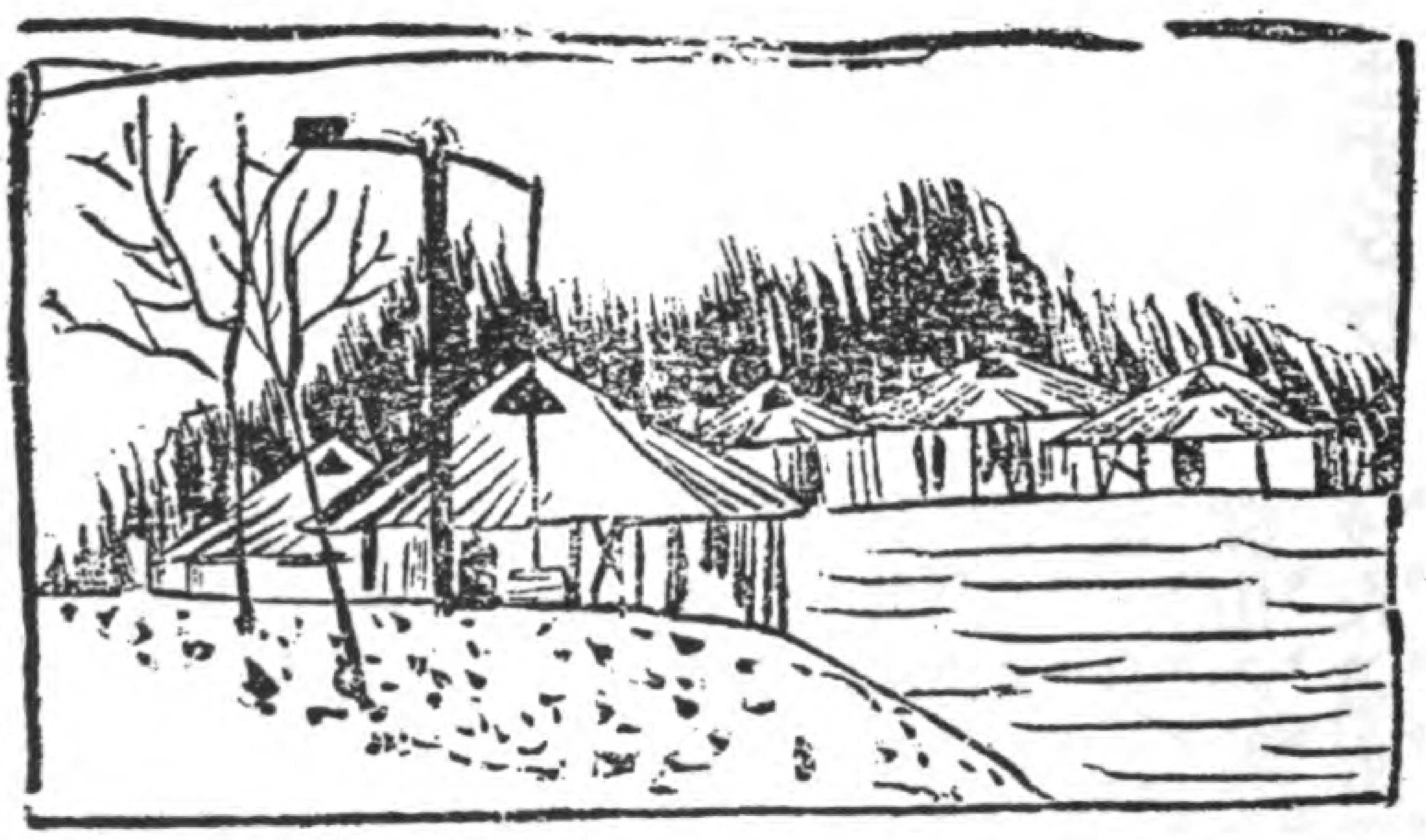
○雨

盛岡市三戸町一六六田村方　しらゆき

雨こそいとあはれ深けれ。夢覺めてそと窓明くれば霏々たる細雨庭に降り注ぐ景色、今日も亦、好める書と暮さんよ、と嬉し。一日の業大かたは成し終へて學び屋の子ら、家におち居にたる頃、續く日照りの歎を去らする一しきり、や

がて晴れて月淡く出でたる、いとよし。
まして春立つ彌生の頃、一雨毎に色ます梢、あはれ花の雲はこれよりとこそ。
さみだれうち續く頃、しめりたるほかげのもとに針の手急ぐらむ、さながらの繪よ。
卯の花垣、たちいで、見れば、節面白う、濡れし女の田植せり、ゆたけき惠を笠に受けて秋をや待つらむ。
うちつゞく日和に梢の蟬の聲も燒くらむやうに覺ゆるほど、雲ひとむら、やがて大きやかなる雨粒降り出でゝ池の蓮葉にかゝれる、蘇りたらん心地ぞせらるゝ、おどろきて底深う入りたりし金魚の嬉しげに游ぎまはれる、蛙這ひ出でて首かたむけたる、したゝる露と共に愛でずてやは。
秋風身にしむ頃、しめやかに降り出づるは今更に感深し、故さとを思ひ出づるもあらむ、亡き人を偲ぶもあるべし、鳴き弱りたる蟲の音も、あはれ此雨にて、と名殘惜し。
さはれ木々は漸く色づきて葉をも愛づべく果も得べくやがてはこれぞ唯一の樂しみとやなるべき、稻荷山あたり松林に振袖やひるがへらむ。
松かげに咲き殘りたる白菊に雨降り注ぐ、いたまし。
小やみなき雨に母はうち案じてきぬや着せ添ふらむ。
あゆみよるやうなる時雨にそゞろ別れし人を思ひも出づる頃かな。

（評）穩なる筆にて一ふしある趣を捕へたるうれし。



黃昏　（選外）千葉縣　秋葉英子

秀逸

○詩人と小川

近江　宇野民子

春も半ば、日かげいとあたゝかき眞晝さかり。
年若き詩人ひとり、何思ふとしもなく麥畑と桑畑とのあひだを辿りて、とある、いさゝ小川のほとりに腰をやすめぬ、あたりいと花やかに、榮えある春の日は瘠せ衰へし詩人の青白き顏を照らし、なゝめにそれて水の上に、さゝやかなる銀の光を流しぬ。
何處よりともなく、風少し吹き來りて、彼の耳にさゝやき、うれはしげにうなだれ、ものたゆげなる春の小草をゆるがして、水の石に咽ぶあたり、心ばかりなる

音をかなでつゝそれに和するやうにおぼえぬ。

詩人の足の許には、小草あまた花咲きて、その中に蒲公英一つ何かうなづくらむさまなりけり。

詩人はその頬のあたりに亡者のやうなる手をあてゝ、つく〲とそのさまを眺め居たりしが、一種のはげしき痙攣顔色の一部に現はれつゝ聽ていと悲しげなる聲もたえ〲に、小川！と呼びぬ。

げになれは幸多き自然の兒なるかな、紅の花空しく夕べに散り、青葉の色、秋風の音にうつらふも、汝のみは常住の力をさづかりて、何時も樂しげなる調べをかなでつゝ、世の僞り多く辱の長へならざるを知らざるさますなり、げに汝は幸多き自然の兒なる哉。

詩人はかく言ひて、われにもあらで、深く嘆息の聲を洩らしつゝつく〲と樂しき聲をあげて流れゆく水を眺めやりぬ、小川は詩人の心を知らざるが如く、石は水に戯れ、水は石に戯れ、春の小花、たんぽゝの姿をうつして、そを弄びつゝ、流れ行くなり。

詩人は最早や堪ふる能はざるが如く。

小川！なれは何故に世と共にわれを捨てむとはするわれは世の人より、より多く汝を愛し、汝を敬し、さまざまに讃美の言葉もて汝を歌ひしにあらずや、さるを今わが世にすてられたりとて、冷かなる背をむけんとするは、情なきわざにこそあなれ、あゝわれは何處にゆくとも、容れられざるか、あさましき世の荒波！とそゞろに述懐を告げて、靜かに其目を閉ぢにき、このとき、小川は漸く乙女の優しげなる心を現して詩人をなぐさめぬ。

詩人の君よ、われは何人にも同じ樂みと愛とを分つものぞかし、されば御身にのみ冷かなる理りなきを知り玉へ、われはこの樂しき聲もて御身をなぐさめんとするものなるを。

かく答へたらむ狀して水は悠々と流れ行きぬ。

（評）西詩を讀むが如し。

○夕の小川　伊藤迷小舟

我里をゆるやかに流るゝ小川、十三夜の月の光に照されて、恰もレンズに寫つた時のやう、われはそゞろ足に此畔を逍遙ひ舊を戀ふること切なり。

滑らかに流るゝ水、あゝ汝は何處より流れ出でしか？汝の身には一點の塵をもみとめざるなり、汝は定めし深山の若き乙女が戀に泣きしその涙のしたゝりの集まりたるものなるべし、さなり汝には血もあり、熱き同情もあるなり、われは汝の血涙あるを戀ひ慕ひてわが秘めたる涙の歴史を讀み聞かせんとす。

空の月よ、里の土橋よ、汝等いかに冷かなりともしかも涙もあり、同情もあるならむ、わが熱血もて綴られたる涙の一節さらば聞け。

水よ、月よ、土橋よ！

さても世は冷淡なる哉。

われ十五の春の最中、いとしの母君には夜半の嵐におそはれ給ひ、果敢なやまだ美しき花の盛りを亂れに亂れて、散り果て給ひぬ。

悲しや！わが慕ひ奉る母君は早や此世にいまさずなりぬ。われは夜もすがら泣き悲しみぬ。「さればとて母君の歸りますにあらねば」とゆかりある叔母君の言葉に心ならずも涙をさめき。

されど〳〵落ちかゝる不運はあくまでもわれを泣かしめ、冷やかなる運命はとこしなへにわれを悲しみの淵に沈めんとす。

母君の逝き給ひて日もまだ深からざるに、可愛ゆき妹露子は又もやつれなき世の運命に捕へられぬ。

あゝ露子汝は母を戀ひてか、母より戀はれてか、何故に逝きし、何故に我をすてゝ逝きし、母君よ！何故に我をも招き給はざりし、われは泣きぬ、聲のあらん限り泣きぬ。われは、ふたりの後を追ひて逝かんとまで思ひぬ。されど、されど、後には老いませし父君あり、われ逝きたらんには、いかに力落し給ふぞ、如何に日を過し給ふらん、さりとて……されど……

われは今逝かむとして逝くあたはず、徒にわが歴史を涙にそめて、寂しき、冷やかなる世に日毎の運命をつくらむと思ひ定めぬ。

さるにても心苦しきは月日重ぬる度毎にやうやくほそり行く父が運命のあはれさよ！

時に月色朧に水の流れも土橋もおぼろになりぬ。空のいづこよりかわが頰に落ちくる冷やかなる一雫！

あゝそは、月の同情より漏れたる涙の一滴！

（評）哀なり。

○運命

門司　岡　芳子

妾の母校の災難にかゝりて、やむなく中途で退學したのも、親しき友どちの亡くなられたのも、淸ちやんの病床の身となられたのも。

朝とくお宮參りの歸るさに妾の愛犬のキンがじやれ付いて海老茶袴を色替へしたのも。

妾が丹精して仕上げた水彩畫へ、何もしらぬ節ちやんに、ボタリと計り墨滴を落されたのも。

あゝ之れ皆運命！

不幸の運命！仕合せ惡き運命なのである。

されど妾は、母校を中途で退學したのも、海老茶の色替せしも、水彩畫の墨滴も、敢へて憾みはしない、無念とも思はない、否思つた處で覆水再び盆に歸らずて、最早どうも致し方がないのである。

只一事！

今に來む、幸ある運命を待つのみ!!

（評）いかにも運命を知りしやうなる筆つきなり。

○名島が磯

福岡縣　田中威智子

別れて三百六拾六日、思はぬ日はあらで‥‥さなりそは去年の今宵、名島が磯の松風颯々として、月明き夜なりけり。思へば行く雲の身の西東、また此秋を歸り來て追懷の涙には咽ぶなり、まてしばし又も相見ん米山の、と歌ひし君は今あらで泣いて止めし袂ぞ今も濕り勝なる、悲しさを包むに狹き吾胸よさても弱きは女なるかな、今宵はも追分節の妙なる調きかん由なくて去年のまゝなる波の鼓ぞ哀れ寂しうは響くなる、さらでも寂しき秋の哀れをかき集めたる身一つよ、萬感胸に湧きかへりて、倡てそ瀧津瀬と下んなれ弱者とは女の名ぞとよ。

雁の一群多々良の葦原に落ちかゝりて、夜もいたく更けたり、さらば波よ嗚呼さらば月よ別れんかくて得堪ふべき吾胸ならねば、思へ吾れも亦渡世に追はれつゝ人の世の果敢なき運命をかこつ一人ぞ或は終に汝と永久に別れ終らんも知るべからず『思ひ出を追ふに寂しき影ひきて泣きてぞ歸る月の夜の磯』京なる君へ、波よ卷き行け一片の此歌反古。

（評）情あり景あり。

○いさり火

薩摩　上村菊子

月なき秋の空高く星影疎らに淡く光を放ちて吹く風冷やかなる秋の最中、渺茫たる綿津見の沖合に點々珠の如く連るいさり火は見えつ隱れつ龍の都の燈明とも思はれて漁りすなる人の身の上までも思ひやらるゝ板子一枚下は地獄のいのちにて八重の汐路を漕ぎ渡り思ひ思ひに獵物あさりて年波寄れる母を慰め渚に待てる妻や子の冬の衣と生活の代に滿てんとて今宵もかしこに漁りすらむ。

あはれ世知辛き浮世渡りも漁夫ほどあやふく定め難きものはあらざらむ。

今宵如きなぎたる海面は心に罹る雲もなく限りも知られぬ綿津見の清き海氣に浴しつゝ筋骨逞ましき銅還りの强腕に潑溂たる魚得む樂みにこぐ櫓拍子に浪をどり聲うち合す舟唄に風おもしろく響くならんも海いたくあれて七日も十日も濕氣を食ふ時は日々の生活の代は外より得んすべもなく立ち上る煙も絶え〳〵に妻は衣食の窮乏を訴へ兒は飢に泣くの哀れを見るも少なからじ。

まして外海遠く打ち出てたらん折などは風に心を惱し雲に心を痛めて運惡くば底の藻屑となりて魚腹を肥し磯に妻子の待ち暮すを見る能はずあはれ果なくも幽明

界を異にする人もあらん。
あゝ彼の幾百のいさり火の下には明日の命も知らざる幾百の生靈の浮び居るならん。

（評）同情ある見やう。

○清ちゃん

京都　堤登久子

今宵あまりの暑さに、一寸涼まんと門口迄出たらお隣の清ちゃん、大變に西の空を眺めて居て、懐しさうに然も目にはただならぬ露を宿して、誰かの歸りを待て居る樣な鹽梅、妾の姿を見たら速ぐ走て來て、「姉ちゃん内のお母ちゃん、まだ歸らないの」て言て、妾の顔を見上げた「あゝさう何所へ入らしたの」つて罪な問ひとは、知りつゝも房々とした振分髮を撫でながら聞いた「あの母ちゃんは、昨日蓮花谷へ御花摘みにて言ふて行かれたまゝ、まだ歸らないの」て言うて又西の方を見て居る、そして少さい楓の樣な片手は妾の袂をキッと握つてお迎いに、連れ行てと言はぬ計りにもじ〳〵として居るいじらしさよ、世には神樣も無きものか、此の子の母樣は、此の可憐の清ちゃんを、一人殘して、一昨日、死

お豆腐ひき（選外）　周防捨子



と云ふ神に連れられて、十萬億土に逝たのである、まだ死と云ふ事を知らぬ無分別盛りの清ちゃんは、今年漸く片方の手の指、皆の年になつたのである、今日もあまり朝から母ちゃん母ちゃんて言ふものですから、お祖母さまが、一時の逃れ言葉に溫順しく待て居れば、今夜歸つて來られると慰められて、漸く今迄泣かず、無理も言はないて、門が開けば速ぐ見に出て車が通れば母ちゃんと違ふか知らぬと見に行き漸く今迄で待てたのである、今や日は暮れて四方は暗くなつて來たのに、其れらしい姿は見へねば、お祖母樣から蓮花谷は、西の方と聞いて居るから、一づに、西の空計り眺めて今か今かと待つて居る、清ちゃんの憐さよ、蓮花谷と云へば火葬場なのである、あゝ母樣は今頃はもう灰となつて居られるのであらうに、思へば思ふ程可愛想なのは此の清ちんである、あゝ何時迄て待て居ても亡き人の歸りますべき筈もなければ强ひて清ちんに「蚊が食ふといけないからお家て待つてましよ」と手を

取て家に入れ、然も御佛壇の前で狐の嫁入りや、カチカチ山の御話など仕て居ると、まあ淸ちやんは妾の膝を枕にはや、すや／＼と眠つて居る此の可愛い、顏色の白い毛の濃い口のあたりなどは恰ど母樣其のまゝ、ああ此な可愛い子を殘して母樣はさぞ／＼逝きともなかつたであらう、あゝ一所に連れて逝きたかつたであらうと、思うてふと、お佛壇を見たら、新しい位牌の線香の煙は、白う長う／＼渦いて、淸ちやんの顏の上まででさまようてる。

（評）亡母の位牌の前に昔噺を聞く樣いと／＼あはれなり。

○奇縁

茨城縣　增山發音子

今日は休暇日、思ひ出しては矢も楯も耐らぬなつかしさ戀しさに、長の月日病床に苦しむ八十四歲の外祖母を訪ね慰めんものをと、家をふりかへつたのは午前八時秀美なる筑波の峰のあたり旭日の强く輝く光の波が滿々と漲ぎり返る頃であつた。

町て土產物を調へ、半ば夢心地の小一里あまり、今半道——と高倚明神の老翁守る山門の茶店に腰打ち掛けた。「オヤ、暫くて御座りますの……嘸ぞ御疲れて御座りやしたろ」

「はア可なり疲れましたよ、急ぎましたから……」と妾はハンカチフにて肩の塵を拂ひながら「でも老翁さんはよく／＼お丈夫で結構ですねえ、最うお幾才？」「えッ私しや最う九になりやす、六十。だが暮して見りやア本統に雜作ねえもんで、ねえ貴女、這麽老人に成る積もなかつたが、何時の間にか白髮頭になりやしたよ。若い倅は先きに死去つて終つて年寄の私が斯うして生きてますのさハヽヽヽ」と高らかに笑ふのであつたが其聲は寧ろ泣くよりも辛く聞こえた。まばらに生えし淋しげのつくも髮に秋見えて妾はそゞろに淚を催したのです、が「儘にならぬが浮世とやら——だが老翁さん六十年とは永かつたでしやう、隨分面白かつた事や辛かつた事が澤山ありましたらうねえ！」

「何の六十年少し長い夢、夢だナー」

ハッとして妾は老翁を見上げた、流石に老人も懷舊の情に打たれるのだらう、見る／＼黯然となるのであつた。

　いさゝかの物賣る老翁のつくも髮昔がたりに秋の風見ゆ。

　舅父さんの家に着たのは十一時前、既に黃ばんだ桐の葉は見る目も痛ましく破れ初めて、折柄吹き荒さぶ野分の風に滅亡の悲鳴をあげて居た。

（評）秋そのもの〻姿。

巖谷小波先生選



特別第一賞

市に醉うて菊賣る翁歸りけり　大和國奈良　小百合子

〔評〕誦者猶菊の酒に醉ふ心地す。

特別第二賞

卯の花に乳母なつかしき垣根かな　伊豆國川奈上丸山　上原露葉子

〔評〕情と景と共に神を得たり。

特別第三賞

さら〳〵と碁を崩しけり青すだれ　下總國船穂村松崎　酒井ふみえ

〔評〕一誦凉風の面を拂ふ心地す。

天

鬼灯や子を持たぬ妻の若づくり　本鄕區春木町　平野光子

〔評〕其聲を聞くが如し。

地

夕さびの塔影長し秋の水　牛込區馬場下町四十五　細谷すみれ

〔評〕其畵を見るが如し。

人

鷄頭や賣られ行く娘の高島田　仙臺市北二番町四七、海東方　村瀨かをる

〔評〕其人を見るが如し。

秀逸

芭蕉破れて檀林の庭閑なり　越後　石田喜女
校をあげて一日遊ぶ紅葉かな　新潟　藤原竹子
桔梗の紫あせし日數かな　神田　谷口貞子
稻刈るや畔に飯食ふ大家内　香川　金星女史
柿赤く五戶の小村をかざりけり　群馬　磯貝末子
眉細う芒出てけり三日の月　秋田　大越みさを
並べたる蘭に小春の日ざしかな　富山　小林芳枝子
伯樂の一人で戾る枯野かな　秋田　黑丸TK子
橋越へて蕎麥の花咲く小村かな　千葉　林よね子
欄に見る易水白し風の秋　愛知　曾峰
白菊に銀瓶の水そゝぎけり　奈良　白藤女
友達の寄合ふ橋や夏の月　靜岡　吉原靜江女

こゝぐろり大征戰や行々子　土佐　梁石女史
秋の田の刈穗の稲に水鷄哉　優子
桐一葉落ちて其日は暮れに鳬　宇都宮　芳野評子
秋高く馬肥えて男子生れけり　磐津　武者恐子
嗚した友來て共に納涼けり　信濃　花渓女史
擂肩の華奢風流や京の春　横濱　あづさ
夏の月涼しき橋の往來哉　愛知　としゑ
朝寒の隣はおきて味噌をする　伊勢　見並愛子
炎天や濱の砂路を鳶の影　桑名　白露
秋の水耳さわがしう流れけり　武藏　數島小藤
紅葉して京より手紙まいりけり　上總　小川國子
朝早く嵯峨を旅立つ若葉かな　大阪　いう子
野も山も菊の日和となりにけり　仙臺　秋月澄子
初秋を順禮に出る妹哉　周防　山上照子
姫百合や半ば朽ちたる壁根の上　靜岡　しらつゆ
春の日は西三日月の東山　山口　姫百合
平假名の名札ゆかしや萩の宿　麹町　淺井千島子
友逝きて芭蕉に雨を聞く夜かな　遠江　鈴木美津子
縫はれて月に見とれし女哉　美濃　内藤みち子
野返蕨う夕日に萩の風渡る　美濃　臼井しげ子
朝茶まで飲て月見の別れ哉　神田　石田歌子
カシミヤのはき心地よし今朝の秋　河内　陰山禮子
秋の風たまに一つの白帆哉　東京　矢島夢守
關守の鬢白々と秋の風　伊勢　村山津躙子
雁なくやあかりのきえしとまり舟　近江　太田靜江
秋の富士一朶の雲もなかりけり　信濃　乳深初音
稲刈りや鎌に夕日の照り返す　安房　朝倉清子
ぬぎ置きし狩衣なりき虫の聲　伊勢　佐藤しずま
辻占や聲しぐれ行く町の秋　大阪　和歌子
涼しさや風にゆられて長き橋　播磨　酒見村子
軒端より蓑虫下る木の葉散　奈良　二瀬くら子

蕗買の時雨て戻る女かな　上總　小川幸子
ホチノ〳〵と蓮の浮葉や夏の雨　神戸　石井愛子
明月や沈香亭の灯のくらさ　千葉　吉原綾子
蓮の水風なき夜半の紙燭かな　淺草　大沼きさ江
船中の夜長や下手なラッパ節　東京　穎川とき子
夕顔や二十にならぬ未亡人　對馬　重富白露
坂半ば蟬の聲聞く暑さ哉　靜岡　伊藤孤雁
寺の聲聲々として蘭香る　臼杵　大野今子
六十の白髪を吹きぬ秋の風　磐城　鈴木紫子
君を待つ垣根の中や女郎花　横濱　山崎よれ子
庭に出て書を讀むほどの月夜かな　下總　武田たき子
岨陰の茨に白き野菊かな　埼玉　大野てい子
うなゐ子が石拾ふ處水清し　陸奥　芳の江
馬の尾の左右に分つ芒哉　横濱ゝ　天の川
行秋や汀に殘る船二つ　上總　小川みどり子
鴫鳴くや田守が庵の夕灯　越後　金塚としゑ
松虫の鳴くや捨てたる笠の下　宮城　佐々木やよ子
琴の音に行き止りけり秋の月　近江　蝴蝶
豐年や馬皆肥えて天高し　秋田　伊藤澤子
初氷井戸まで水をくみに行く　長野　わかば
木犀の聲をにほひぬ秋の雨　千葉　石渡久子
茅屋を誇り顔なる南瓜哉　周防　鈴子
南部出て江戸に老ひたる角力かな　陸前　猪股きつ子
朝顔や女乘り物忍びやか　栃木　加藤良子
花折りて峰に追はれし山路かな　芝　露あせ子
露十歩野菊の咲くに任せたり　山口　川瀬萩の里
秋立つや蚊張を出れば旅の月　岩代　岸野常子
山僧の衣にゆらぐ尾花かな　埼玉　紫香女史
長き夜を千代女御殿に召されけり　横濱　福澤秀子
おなじ月ながめて月のるすゐかな　相模　伊藤靜子
虫の音を分けて流るゝ小川哉　羽後　鶴田久子

文學士沼波瓊音先生選

消息文

天 ○ほど近き友を招ぐ

岩代須賀川本町 服部水仙子

夕方里なる乳母より落栗あまた送り越し候まゝ、今宵早速栗のまどゐを開き申べく候。復習もすみ給はゞお湯あみかたく\お出下され度、今晩の風呂はお白粉いらずに候。何となれば私も手傳いて汲みたる水に候故。弟共は只今ナイフとぎに餘念なく候。あかく\と障子にうつれる灯影に早や煮え立つ音も聞え候。早く\お出でなさるべく今宵の味は、御好物十三里半の比にはこれなく、忘れ難き味に五里ばかりの山奥なる乳母が打問はんなどのお勇氣出で來申べく候。それもお出ての上、お味ひの上、自慢の眞價を知り給ふべく候。かしこ。

（評）興ある誘ひ文かな。

地 ○都の友へ返し

埼玉縣 中村紫香子

數々と都の御自慢、妾よりは田舍の有樣申上候。朝未き庭に出れば芙蓉花、先づ喜び迎へ、秋海棠、白粉草等皆招くにて候。苔青き石燈籠の下なく蟋蟀愛らしう、鳳仙花には早小蜂の訪れて候。野に歩み運べば、草頭の眞珠の露、心地よう足にこぼれ、稻は吹風に促されて一齊に穗を拔出し候、案山子の、我田荒さば一打と矢番へたる畵の如くに候。林には今を盛の秋草、紫に黃、赤、とり\/に可憐に匂ひ、根本の蟲は面白うなき、彼方には赤う實のれる栗、大口開き居り候。パッと飛立つ雀の跡追うて畑に到れば、枝豆の皮、張裂る許りなる、扨は甘藷薯などの熟したる、農夫の鄙歌の遠くより洩れたる、汁にて煮たる如き手拭の爺、鍬を杖に突立たる、都には見られず候。又、山に行けば小鳥の囀るあり、蕈あり、谷間の池には雁も泳ぎ居り候。鳥の聲に夕日沈めば馬の嘶き聞え野良夫も歸り來候。樂しき夕餉濟せば、廣き庭に椽臺持出し、房々たる軒の葡萄味ひ乍ら親子兄弟姉妹の笑ひ話、誠に氣樂に候。一つ床に揃ひて臥せば破れし所より月光の差入り、屋根に生ひし草の露美しうみえ、枕下になく蟋蟀など迚も都人の想像にもおよばず候。田舍の有樣斯の如く

に候。

（評）自慢せし都の友顏色ありや。

人

○田舍の正月

神戶市荒田三町目十一ノ二 今田櫻町

初雪ちら〳〵と木枯すさぶ宵闇の空一しほ寒く覺え候に今朝は川向の稻荷山鹿子斑らに白う相成り候て赤鳥居の傍に可笑くくねる天狗松の眺いと〳〵新らしく相見え申候。門松の色國旗の靡き何くの果か君が代の春を祝ひ申さゞるべき、巖となりてと歌ふ聲は森の中なる學校より響き候、何時もながら淋しき田舍の正月の此年は一しほ淋しく覺え候、幕引き廻らしたる鎭守の社には朝早くより拍手の聲こだまに響き前なる廣庭には里の乙女の今日を晴と田舍縞着飾り追羽根運び姿も其群に餘念もなく戲れ候、折しも世話好の作爺が悅び勇みて旅順降服の號外ならびに皇孫殿下御誕生云々の新聞手に今宵鎭守の社にて祝捷會開くとの事つげ知らせ候いと嬉し、村の祝捷會終へて五人三人と小謠口ずさむもあり聲高に戰爭談試むるも有て其悅は醉うたる人の心を狂せしむるばかりに候。實に子守が宵中なる乳子迄悅に漏れざる者にこそと存じ候。春風暖かにして山寺の梅は一本咲き出で候。猶此餘の事は御春長にと存じ先は目出度新玉にこそと祝ひ奉り候。目出度可祝。

（評）眞情は田舍に輝くもの。

秀逸

○奉職地より

但馬 はる子

咲きほこりし朝顏のやうやうおとろへ初めしかきねに、鳴く虫の音の繁く相成り候昨日今日、母上樣には如何に過させ給ふらむ、恙なくておはすべしとは、存じながらも朝夕思ひ出されて、さらでも淋しき此頃を御一人住居の嘸かし、と推しまつりては遙に鄕里の空打望みて、涙にかきくるゝ事も御座候、さりながら暫時の事と思ひあきらめて、何卒御體をば御大切にお暮し下され度候、私も奉職當時は何かと馴れぬ業の數々に心痛め候ひしも今は略勝手もわかり、殊に幼兒等の先生先生と慕ひくるゝに、世の憂き事も打忘れて過し居り候、出立の節に母上樣がさとし給ひし御言の葉を、唯一の守りとして、みにくきもみめよきも、優なるも

劣なるも、これ皆等しき親が愛し子よと存じ候て、たゞ其生ひ先きを樂しみに育み居り候、まことや子を持ちて知るてふ言葉の如く、敎へ子の愛しきにつけ候ても、母上樣の御恩思出されて今は一日も早うみ心安めまつる日の、來よかしとそれのみを望みに、暮し居り候。

追々涼風立ち候まゝ冬物の用意も致し居り候、母上樣にも昨日仕立て上し袷縞柄もおもはしく候はねど、今日小包にて發送致し候間、早うより召し給ひて風などひかぬ樣御用心なし下され度く候、猶申上度き事も候へど彼もいたく更け候まゝ、先はこれにて筆とめ申候

（評）情の溫かさのうれしくて。

○輕井澤より

神田　谷文子

『田中までは彼是里半で御ぜえますハイ、そこには湯がありましてどう〳〵と瀧の音、その下の川は九尺許りて……ハイ、案内賃？ハイそれは一枚戴きますて……。』

子守（選外）



南多摩郡　中島縫子

相談一決、案内者を先に町をいて三笠山を右に西黑瀧山に登りました。海に釣するのではなく山中に岩魚、やまめを漁さうと妾達は竿を手にして終日あるきましたが遂に一尾も釣れませんでした。

で妾たちは倦きて案内者より先に宿に歸りました。霧深い夕方、案内者は七尾の岩魚を籠に入れて萬松軒の宿に持て來ました。

八月六日だと云ひますのに七十二度と云ふ涼しさです。

（評）簡にして其境を想はしむ。

○弟に

上野　佐藤露子

晴れゆく五月雨に打ちつれて、御身も此頃はすこやかにならせられ候由、こよなう喜ばしきことに御座候。

さて其許には、首席を奪はれたりとて、此夏は故山の土をふまぬとの仰せ、そなたの御氣象としては、さもありなんと察し上參らせ候へど、そも病の爲めなれば是非もなき事、さるをさまで心落させ給ふとは、いかゞなされ候ひしよな。さるにても、身を思うての旅とあ

らば、せめては母上樣にも御許しの程、こひ參らせんよしも候へど、金のとくるが如き夏の日を、都にとゞまりて文讀まれんなどは、いくら都の端なればとて、御身の程の思はれて、心危ぶまれてはあられず候。ましてや、此姉のごと病多き身となりなば、草葉の影にまします、御父上樣にも申譯なき事と相成り申すべく。又御母上樣には、さなきだに、何くれとなく心痛めさせ給ふ折柄なれば、「あるは病にてもや」、など節々仰せ出され候に、此上とも母上樣の御心をなやませ給ふは、罪深き業にては候はずや。日毎夜毎其許の歸省を待ちわびて、ほろりとなさるゝ御姿を、まのあたり見參らするにつけても、心苦しう覺え候まゝ、かくは申進め候譯に候へば、その御つもりにて、とく〳〵御歸省あらせられん事を願上候。して、彼の淸澄なる谷川の水に身を淨め、又來ん秋は勇ましう學び舍に戰はるゝが、其許の今ふむべき道とは存じ居り候へど、何もかも御存じの上の其許なれば、わざと今は申さで、たゞ〳〵其許が心の程にうちまかせ置き候へば、とく〳〵と御推もじの上、嬉しき御返し文たまはり度、一偏に待ち居り申候。

(評) 强ひむとして强ひずよく姉の態度を保たれたり。

○避暑地より繪葉書にて

芝區　鶴岡かつ子

第一信

此の繪は上總一の宮の海水浴場青松館の全景にて候花子樣や妾の一行は二階の東側にて丸窓の下第二號室に止宿致し候……あの先達若林先生の地理講義の時敎はりし九十九里の海とは即ち此の邊一帶の稱にて候。

第二信

今九十九里の漁民が地引網を曳いて居る處の繪にて候網はもう磯近う運ばれて候ぴよん〳〵跳ねて居る樣に見ゆるは皆こゝ名產の鰮にて候歸京の際は是非お土產にと持ち歸るべく候。

第三信

唯今お日樣は東の波間よりお上り遊ばして候其の光り霧を破りて彼處太東岬の鼻に碎くる飛沫を金色に色どりて其の美觀つたらとても妾等ごときものゝ畫筆やふみにては寫し得ず候此の繪は唯だ〳〵其の一部分を描きしものにて候御推察あれ。

第四信

右に海水浴帽を冠むりしは花子樣に芳ちやんと君枝にて候左磯の眞砂子に赤裸々となつて横たはり居るは花子樣の兄樣と妾の兄上にて候唯今海水浴を終りて此所に休み居る處の繪にて候唯だ歸京の節が忍ばれて……

(評) とり〴〵に面白し。

○友の許へ

京都　梅子

昨夕此處へ參りました。座敷は保津川をへだてゝ靑々とした嵐山を望む、朝每に小原女の菓子賣が來るとやら何んと詩的ぢやありませんか、客は京都の畫士夫婦と中國の紳士が二人木津のさる豪家のお孃樣高島田の夏化粧病氣養生だと申て居られますがさて何處が惡いのか知ら、それと私等二人と都合七人間數は十二間。

妾の居る間は四疊半と六疊の二間、軒には葱と岐阜提灯が涼しさうに釣て下は簇々と小浪が絕えず根石を洗て居ります、內へ入ると半間の釣床に誰の筆か知りませんが山水の軸が掛け前の一輪差には桔梗が二本淋しさうに開いて居ります、室の片隅には昨日なりの荷物が置いて中央には團扇と寫生帖が散らかつて居ります、例の交際ずきの春枝さんは今も畫士の奥さんと渡月橋迄散步にと出られました、私はまだ何誰とも交際致しません、何卒靜さんに繪葉書下さいてお傳へを、あとは後便にて追々と、左樣なら、嵐山より。

（評）快適羨むべし。

○旅中より　德島　住友登喜子

一

山里の月の夜は詩興わくものに候。今宵は三五の月夜よと人里はなれしこの眉山に、月まつしばし露の芒をわけてさ迷ひ來る人もいと多く優しき笛の音も聞え申し候。

妾が投ぜし、いと靜かに一點塵止まらぬ宿は紅葉屋と申し、眉山の頂……泉淸き邊に候が、その名の如く眺めよき浦山數百株の紅葉、錦おりなすさま、君が來む年の裝などゝ思はれて、そゞろほゝゑまれつゝ木の間をさ迷ひ申し候。

戀人にはあらで、待ちわびし月は、罪の子の眺めにはあまりに淸しと思ふまで澄みて昇り候……錦につゝめる玉と申さんか……御許が形容の詞をきかば、いかに詩囊の豐かならむと今更同行ならざりしを恨み申し候。

遙か一際高き峰のいたゞき、雄鹿あらはれて、妻こふこゑの哀れにきこえ候。

面白く旅に遊ぶ身もかゝる時はそゞろ故鄕の空の忍ばれて候……。さらば！

月淸き紅葉の山のさを鹿の
聲身にしむよ旅の身のわれ

二

妾は今小萩さく磯館の小窓によりて、大神湖の夕景にあこがれ居候。白き砂地にわだかまり生ふる靑松いと

面白く……美くしき夕映の色を宿して波はいよ〳〵靜かに……散りもせず一面さきにほふ花とや申すべき、うすく見ゆる沖の小島は貴き姫の住み給ふ金殿とも思はれ……現はれし二つの白帆は花にむつるゝ胡蝶の如く見え……肉躍り……興湧き候まゝはづかしながら此繪を物し候……情ある君せめては妾が心をくみて、をかしとな笑ひたまひぞ……。

此方の岬より小舟現はれ候……面白き櫓拍子につれてすき透るが如き舟歌……

「十七娘が鶴首長う……
　岸にまつだろ……松かげに……」

餘韻長う……舟はいつしか夜の帷につゝまれてゆき申し候。

妾はこの絶景に醉ひて、愛の神のみ手にひかれて、靜かにくるゝ夕空に逍遥へるかとうたがはれ候。（十六日）草々。

身も魂も彩雲のみ空にあこがれぬ
　眺め妙なる磯の夕ぐれ

三

夢面白かりし磯館を、朝まだき立出でゝ、香はしき桔梗女郎花の露にもすそをぬらしながら、清き流れの堤にそひつ虫の夢をおどろかし小松島さして辿り居候。歩むごとにまたゝき清き星の光は一つ〳〵消えて東雲の空は匂ひやかに色どり、天女の羽衣とも見るべき彩雲まよふほとり幽かに見ゆる漁村の家々より靜かに立登る朝煙のながめ中々妙に候。

旭は美くしう昇り候……かたへの小家、低き籬のうちに咲きほこる黄菊、白菊、紅菊の薫り芳ばしうゆるゝに、しばしはひきとめられつ……香ひこぼるゝ銀露を繪皿にうけて一筆染めたき思ひせられ候……。

堤を下りて……稻稔り豊けき畔道を雀の聲鳴子の音にさそはれて、歌おもひつゝ進み候。

紫袴床しく……やさしき御許に似し人に逢ひしまゝ、小松島への里程を尋ね候に、最早五丁の上を出ずと申され候……さらばこのみどりふかき一本松の木下に一憩して、面白き海濱にあそばんかな……（十七日）さらば。

ゆく程にながめ嬉しき旅の朝
　思ふばかりに歩みかねつゝ

（評）宛然水彩畫の如し。

○詩の友へ

津市　松尾華子

庭の白菊に、秋雨細き朝にて候。

小窓の先の松ヶ枝よりやゝ色づき初めし楓の木陰に迄蜘蛛の白銀の糸引きて、哀れ秋の蝴蝶の一羽優羽を垂れて雨に晒されかゝり候よ、ゆくりなくも昨宵弱き羽搏を眺めしも淑子の君の音づれ給ひて遂にふと忘れ候

妾の罪!! 君がいみじき詩に御歌ひあらまほしう候よ。

○

今宵阿濟ヶ塚の魂祭に詣て候。秋空はれて月に翳る雲の影もあらなくに、黍の葉そよかせて冷たき秋の夜風の森どよもして肌寒う候ひしよ、地下の聖靈の安かれとは齊しく祈り候ひしならむ。

秋風は冷たう吹きぬ碑に近う
月にそむきて額伏す人に

○乳母が家より

空澄みて日影あたゝかう候。ぽかぽかと暖き椽には小猫の爪磨ぐも、金糸鳥の鳴く音も興深うおぼえ候隣りの庭に老ひし人の糸車ひく傍に鷄の高らかに唄ひ居り候。野菊を挿せし閑室に詩集繙く或る人を偲び給へや、今丸き雲公孫樹を掠め候。

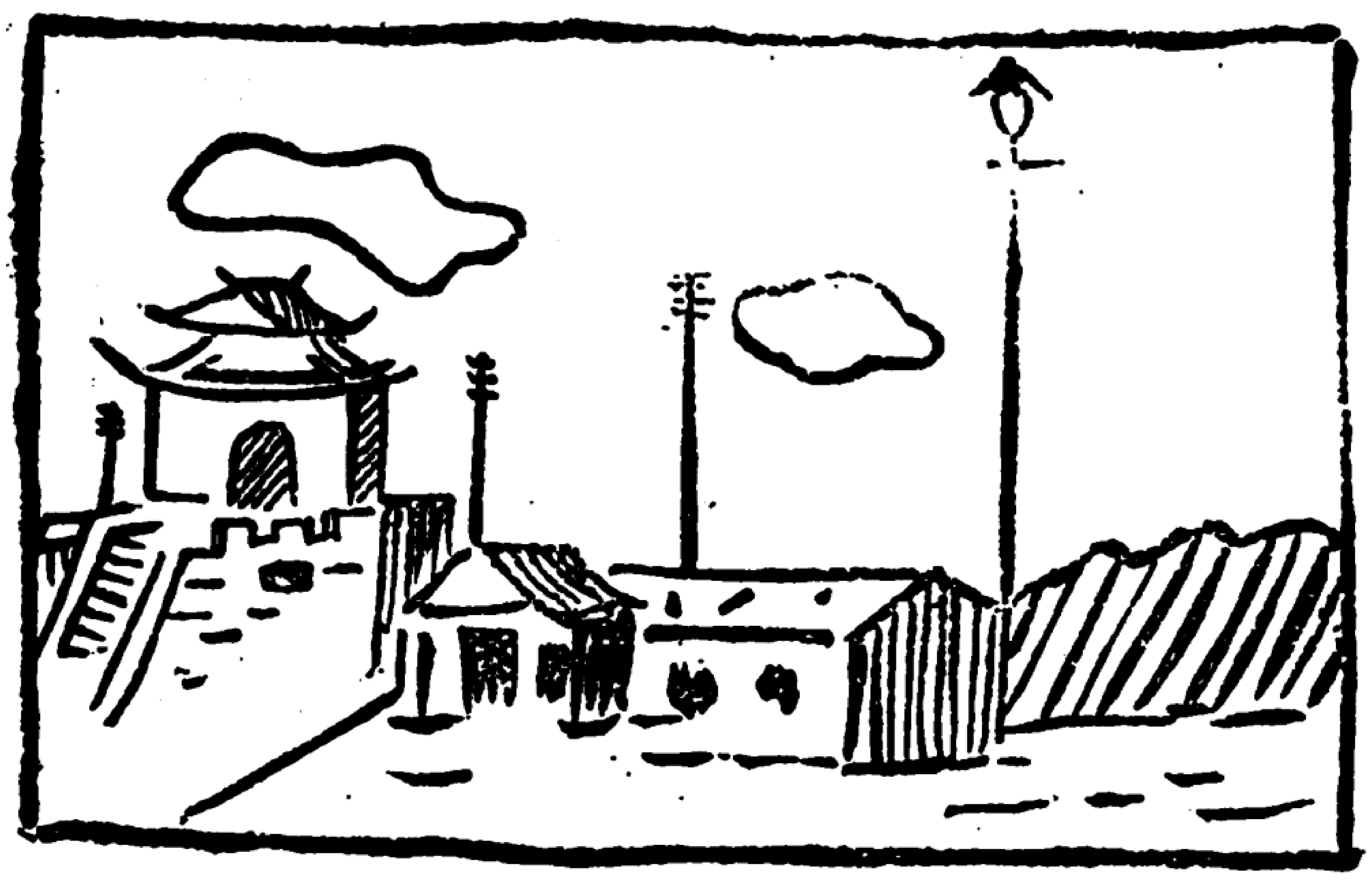
（評）とりどりに詩趣あり。

○隣村なる友へ

常陸 秋山欽子

今宵、小川が原に虫をきゝ候。

盛北々門（選外）　臺北　石原厚子



暗を縫ひし螢は里のうなゐ等が、小さき籠に、夜な夜な、星と光りを争ひしものを、夕べ秋風、青葉の宿を訪れ候ひてより、あはれ、夜毎に榮美しき光、うすれ行きて今は全く影見えずなり候。

晴れたる晩夏の大空、一片の雲もなくて、げにや静けき夜とはかゝるをいふらん。

懸瀬の水の調、いたづらに低く、夕月白う川面を射て、すゞろ我行く原の忍ばるゝにて候。

緑の小路を足下になく虫の音、驚ろかさじと、露分けて、いつか目指す原へと着き候、

見渡す涯り、萩、女郎花、咲き亂れて、目も綾なるを、こゝの草むら、かしこの花の下よりなく虫の、朗々の聲は、流るゝ水も澄まん許り、天にひゞき水に和して、野に耕して勞れし人も、時に倦じて天仰ぐ人も等しく耳傾けて、魂は月の世界のあたりにやさ迷ふならんと思ひ候。

緑に交る紫うすき、桔梗の花、かねて君が好めるもの

ぞと露ながら手折りて、好き歌の料に捧げんものと、そと歩み倚りし途端、露ほろ〳〵とこぼれて、やさしき虫の、そが下よりすだき初め候ひし、あはれ。姿がむくつけき心にも、物のあはれは知られ候ふを、このやさしき花、手折なば君がやさしき御心、いかに驚かすならんと、そは其儘に手折らで置き、せめては繪筆にもとてかくは、拙なきを御目に掛け候。いかで君美しき短冊を染め玉はらば、桔梗が原の古戰塲にわびしう咲き殘る花も、うれしとや、思ひ侍らなんを、さらば。

（評）精巧。

○故郷の友へ

伊豫　福井さゆり

木の葉をちらす秋風をうらみつ涙と共に別れしより、海山遠く隔たりぬる臺灣の島にさすらひて、配所の月をかこちし身の、またも花咲く春のめぐり來て、今は嬉しくもなつかしき、東の雲を望みて歸るべく、只今荷造りの最中にて候、たえて久しきふるさとの山やいかに、河やいかに、御許樣の樣子やいかに、萬感胸に迫りて、空想は空想を描き、故郷の山水彷彿として目前に見はれ、早歸りし心地さへ致し申候、明早曉打狗解纜の千代田丸に便乘いたさん心組に有之候、五年のつもる話はうるはしき御笑顔を拜しての上、先は取いそぎ御知らせ迄、長き日も早くれなんとす、あないそがしかして。

（評）秋ゆたかにたてといはましを。

○親しき友の許に

尾張　梶田愛子

君子樣、朝晩は羽織が欲しうなりましたが、あなた其後はいかゞて御座います、御案じ申て居ながら遂々御無沙汰致しまして今更御申譯有ませぬどうぞ〳〵御許し遊ばして頂戴。

あの十五日こそ午後六時から宅で觀月の宴を催しますさうですが、あなた御障が有ませんでしたら是非御越し下さいませぬか、雲井、嵯峨野の秋、さむしろなどの曲合奏して、御月樣の御馳走に仕たいと思ひます、門の薄も穗が出まして招いて居ますよ、庭の秋萩も今が盛りですからはやかな御月樣に照らされたらどんなに奇麗でせう、さうして御月樣の御團子の外は花にちなんだ御餅も！、是さ私が出來しますから御批評が願とう存じます、どうぞ〳〵五時頃から御越し遊ばして頂戴！、御嬉しい御返事を待ちますね。御母樣によろしう。左樣なら。

（評）いかなる清興ならむ。

新歌話　編輯局選

特別第三賞

新潟市寄合町十番戸岩瀬三九郎方　波子

新道開けて車が走る舊道通れば百合が咲く

【評】一首の俗謡、一巻の地理書に優る。

天

山口縣玖珂郡廣瀬村　後根美子

赤い襷で杼持つ娘歌で織出す花模様

【評】前號ハガキ文特別二賞と異曲同工。

地

下総印旛郡富里村大和　萩原華月子

山の樵夫が木を伐る斧の響から起つ秋の風

【評】俗謡にも此雄渾なる境地あり。

人

遠江　菫女史

本も讀たし庭球もしたし好なお歌も作りたし

【評】能く正直に歌へり。

秀逸

○西を向ても東を見ても他人ばかりでわしやつらい　八王子　森谷龍子

○琴も彈きます料理もします娘自慢じやないけれど　備中　倉田笹舟子

○菊の蕾を乙女に問へば年が若くてまだ咲かぬ　手賀沼　ゆう子

○風がさら／＼吹くたびごとに舞ふて落ちるよ銀杏の葉　丹後　楠田ふみ子

○月の夜汽車を止てもみたや宮城野原の虫の聲　仙臺　雪子女史

○妾が米とぐ小川の水源は萩と百合とのこぼれ水　栃木　菊香

○嶽は白雪麓はもみぢ里は時雨の通り雲　信濃　乳深初音

○阿蘇のふもとで出あふた方は父を尋ぬる白菊か　赤坂　森英子

○親の見立に善惡言はず嬉しう仕立てる晴小袖　上總　小川さち子

○四千萬石みのればみのる田毎田毎の田植唄　徳島　坂野白露

○刈る手とゞめて鉛筆出して鎌でけづゝてうたを書く　福島　磯村女史

○ 大阪市 伊藤あさ子

京の娘の姿はやさし鹿の子帶して日傘さす

○ 靜岡 もみぢ

孫もかたづけ嫁女も貰ひ庭の紅葉も色づいた

○ 越中 失名女史

色が黑ても鼻低うても稻も刈ります米も搗く

○ 安房 白百合

乙女心に螢の光り風が消すかと袖屏風

○ 品川 小林のぶ子

嫁々可愛やおしろいはげてやつと渡つた秋の川

○ 千葉縣 林たけ子

乙女踊りか稻束背負ひ明日の天氣を語り行く

○ 埼玉 風水女史

お花召しませ黄菊に桔梗尾花かるかや女郎花

○ 相模 河野恒子

功七級の息子をもつは村で一人の太郎作おやじ

○ 美濃 內藤美知子

時雨降るのはあの雲ばかり沖の小島に夕日てる

○ 麹町 佐杜子

桔梗かるかや秋野は春におとるまいとて花かざり

○ 伊勢 村山津願子

村で小町の評判娘踊る手拍子足拍子

○ 小間使

豐年をどりに更けゆく夜を月の兎もをどるやら

○ 山口 柳井露花

我と好んで泣くのぢやないがくるし思ひのあればこそ

○ 橫濱市 白妙子

戀の濡衣乾そうと思や又も降り來る袖時雨

○ 京橋 梅浦星香女

月の朧ろに小歌ゆるふ踏ひ更け行く京小袖

○ 山形縣 渡部宮子

みだれ染にし柳の髮に落ちかゝりたる月の櫛

○ 優子

本もよむべし自然も歌へそして勉强もするがよい

○ 遠江 田中すみれ

姉は十六妹は十四二人美くし月の眉

○ 栃木縣 青木志津江

心知りてかあの月でさい今宵朧で夜を明す

○ 茨城縣 大和田清子

まゝになるならあの雪の様な白い肌になッて見たい

○ 陸前 孤子

花の香りをつばさにこめて霞がくれに鳥の聲

○ 千葉縣 林せみ子

やがてこぼるゝ共れとも知らす露に宿かす秋の花

○ 磐城 田村壽子

汽車の窓から富士山見れば雲がかゝるか白雪か

○ 神田 谷文子

蜘蛛は漁師か魚とるやうに網をひろげて蛾をとる

○ 芝區 鶴岡かつ子

菫咲いたる原野を見れば水車小屋やら牧場やら

○ 伊豆 上原露葉子

みどり雨ふる青葉のなかで夢を語らう二人づれ

○ 越後 中野草萩

夜は妹と學資の仕事晝は仲よく學校通ひ

○ 巢鴨 上野たへ子

きりぎりす一夜く\くになく音がほそるおもひある身は共涙

○ 西ノ宮 森井せい子

おなじ地に住む誌友と思やお顏知られどなつかしい

○ 埼玉縣 紫香子

夫は野へゆき私や柴刈へ別れわかれて暮に逢ふ

○ 廣島 恒子

月のよい夜を桔梗が原で主と二人は京物語り

岩代　若草子
○わたしや田舎の鉄鏃そだち糸もとり候はたも織る
京都　岩淵國子
○母は亜米利加父様日本花の巴里で握手して
工藤みどり
○兄のおよめに赤坊ができてわたしや毎日子守うた
美濃　傍島敏子
○小唄すゞしい花賣り娘め羽をぬらして蝶がまふ
亀井戸　鵜澤貞女
○紅葉こがるゝ色とは聞けど末の落葉は土の上
岩代　岸野常子
○月のみ船に涼しい夢を乘せて漕ぎたや天の川
信濃　岡田歌子
○君のめぐみの此恩賜金只は使ふな國のため
越後　金塚としゑ
○五つ下げ髮十三島田廿歳丸髷戀ごろも
秋田縣　松田せい子
○手刈した手で植ゑたる稲は一束三把で五斗入升
横濱市　吉川香都子
○乳母をたづれて田舎道行けば庇髮よと指をさす
深川　勝山千代子
○簾おろした柳の門をおせばやさしい鈴の音
飛騨　萬小夜子
○[illegible]は透物騎手は若衆野邊にや七草みだれ咲き
横濱　柏木房子
○秋の夜空を眺めて居たら高い理想の雲が行く
京都　大澤孝子
○家のほころび見せまいために涙かくして針仕事
大阪　悠月
○叔母のよぶ聲行かずに居れぬわたしや讀みたいこの手紙
陸奥　露の花子

今日の天氣は日本晴だ古衣ほどいて洗ひませう
○磐城　佐藤美子
君の心はまだ定まらぬ風にまかした女郎花
○姫路市　船戸幽規子
露をいのちの蟲賣り女あれも戀路の果てとやら
○上毛　櫻雅井董子
とんぼ舞ひとぶ小春のよき野姉とふたりでテニスする
○武蔵　芳香女史
椰子の蔭から出て來た土人黒い顔して戀語り
○美濃　杉山芳子
君がみ墓の落葉をはけば又もこぼるゝ萩の花
○紀伊　田中文子
祖母の情に育つた此身一目あひたや生の母
○淡路　龍久子
いやよ〳〵と泣き〳〵來たが今は戀しい人の家
○丹波　なみ子
繭になりゆく夏蠶は後ろ前は南瓜の花ざかり
○駿河　白萩子
富士に登れば箱根の山や駿河灣まで庭の中
○越後　堀川枯子
雨のふる夜に書讀み居れば垣へ來て鳴くきり〳〵す
○野の草
髮ははやりのひさしにしてもむすぶゑにしはむかし風
○美濃　加藤よれ子
宇治はよい所指差しながら京へ行く道汽車の中
○麹町　森安千代子
意氣な香水油にや染まぬ清き清水の洗ひ髮
○羽後　大越操子
謡ふ唱歌に天長節の菊は勅語にちりかゝる
○秋田縣　松盛松子
柿をむき〳〵火鉢の上にお伽ばなしのまはり番

廣津柳浪先生選

短篇小說

特別第三賞

○月の夜

讃岐綾歌郡栗熊村　松永みつる

私は甲板上に出た。

さすがに熱かつた夏の日も、暮れては澄み渡る蒼空に眞丸の月冴えて吹き來る微風、月は潮路に金波銀波を碎く。

顧れば讃の地はもう海氣に隔てられ、沖の漁火が二つ三つ見える計り、たゞ廣い月の海。

右舷近く黒ずんで見えるは小豆島であろう。

私は何とも云ひ知れぬ感に打たれて眤と海原を眺めて立つて居ると。

「大阪はまだ遠いのでせうか」と云ふ少さい聲が聞えたので、見ると白地の浴衣を着た月の光を帯てる爲か青く瘦れては見えるけれども、可愛らしい少女が立つて居る。

「あゝ大阪はまだ遠いの、汝女どこ」と聞くと。

「今治」

「お連があつて」

「叔父さんとてすけれど、とーいかにも淋しそうに答へる。

「彼處は賑やかだから嬉しいでせう」と面を覗き込といつか睫に露の玉を宿してる。

聞けば可憐い物語。

少女が五歳の折、慈父母は流行病の爲め前後相續いて黄泉の旅に赴いた。

孤女となつた彼女は母が異母妹に當る叔母の家に引とられて居たが、元よりその日稼ぎの働人で、邪慳に育てられて、他家の兒女が學校へ通ふ七ツの歳から子守にやられての浮苦勞。しかも天然の美貌に生れついた爲め慾に充々た叔父夫婦は窃かに歡んで居たらしい。今度大阪から叔父の弟と云ふのが來て、何だか大層嬉しがらせて連て行くのである。

「それでも大阪はよい處だから面白いのですよ」と慰めるつもりでいふと。

「だけども妾はやはり嫌――」

「家に居て叔父様や叔母様に叱られるよりかいゝてせう」

「けれども」と云つて袂で面を蔽ふて泣くのである。

「私は同情の念堪へ難くて少女を抱いて共に泣いて居ると。

「静江じやないか」と慳鈍な聲がしたので振向くと悪々しそうな男が突立つて居る。少女は涙の面を擡げて會釋をして悄々と男について船室に下りて行つた。

あゝ多大の希望を抱いて嬉しく故郷を發つた私でさへも後が見かへらるゝに、温かい情をかけて呉る人とてはなく、苛酷にさいなまるゝ故郷を尚慕ふ少女の小さい胸の中はどうてあろう。



可愛相なのは彼女の運命。

好個の短篇、首尾一貫して力も籠り、一字一句も油断せずに落筆し、殊に終の五六行に自分の感じを述べて、少女の運命を哀む處、讀者も亦一脈の血潮が新たに湧くを禁じ得ないであらう。（選者評）

天 ○ゆく雲

陸前國登米町 河内活版舎内

佐々木巳泉子

「相川さんがお立てすつて、左様、ぢあ済まないがね、私はお客の方が手離せないんで、何卒宜しく云つて下さいな「ハイ」と言つて廊下を此方へ大鞄重さうに、優姿

なよ〳〵と人目恐るゝ瞼の露、喩はゞ澤の鶺鴒が小草の蔭に小鳴の夫鳥慕ひよる狀。

「松さん、ほんとに宜しく云つて下さいよ」、行き過たお富がふりかへつて又「まうしますよ」と云つて見合つた眼と眼、「お富さん……」と我知らず、「あゝ察しますよ、けれど松ちやん、何もお云ひでない」。

鞄持つ手に拭もやらぬ泪、玄關には最早山籠一挺。

「ぢや旦那お荷物は是丈ですか」、脊の高い色の赤黑い、馬面なのが斯う云つた、大鞄に土產の包、駕の上にしかと結ぶ、帽を脫いで脊を跼めて客は駕に潛り込む「お忘れものは有りませんか」、杓子面の是は相棒、

「ない」と云つて駕にすかすお松の姿、持つて行かれるものならばと、最後の毒矢、ぐつたりと顏を俯せた、

「ぢあ行らうぜ」、曳しよと、息杖とつて駕は一ト搖り、早や宙に、丈高い男の肩より肩へ丁度橋なり。

門には見送りの手代番頭、主人迄が立つて居た、あたふたと庭下駄突つかけてお松も俅へず庭をでた。

半丁、一丁、玆が別れ所、稍高い西山、月の輪舘を左手に一目、右手に水坂路のうねり、くねり、山の襞々湧くは雲、咽ぶは水、「こゝから下りだ」。

曳と云つて肩をかへた、ふらりと、搖れてふり落されるかと氣味の惡さ、「ご機嫌よろしく、何もお鹿末いたしました」。

主人が揉み手の叮嚀なあいさつ。

「何卒又お出下さいまし樣、精々改良致します積ですから」。

番頭が浮つ調子。

ひたと寄つて腰較低く、お松は優手を駕に掛けた雲をもれて日の光り、下から射すに駕の內はぱつと明るく、覗くに案じ顏の相川、人目なくば其の手其の胸、何、抱いてなりと泣かうものをーと。

眩暈となつてはづかに駕に身を支へた「貴郞ごきげん宜しう行らつしやいまし」、黑金山の駕舁は木矣、石矣、雲助とは謚しや先の名「相棒杖を上げろッ」

後なるは喝一聲、息杖を上げたが最早、逆落しに坂を下へ、行く雲、かへる雲、其所の谷間て締められるやうな鳥の聲。

「玆が別れ所、稍高い西山、月の輪舘を左手に一目、右手に水坂路のうねりくねり、山の襞々湧くは雲、咽ぶは水、こゝから下りだ」などの輕快な筆づかひが飛び離れて上手、筆の到る所其妙を極む、駕舁、番頭、客、女中皆活潑して別れの幕切、木の頭なきを憾ましむ。(選者評)

人

○ひと昔

京橋區南八丁堀一ノ二六　原　孝子

新宿行の電車を下て北裏町の我家の方へと歩を進めたお秋は、我家へ近づいたので、いそ〳〵として入らうとしたが一寸ためらつて「お父さん、御無沙汰致しました」と、家に入る、年老た養父は出迎ひて「お、お秋かい」と、幼さい時のやう、吾助はお秋が成人なつても、言は昔に變ない「お養父さん實に御無沙汰致しました、もつと早く來るのでしたけれど」「何に、私もなああんまり來ねえので病氣でもせやせんかと思て、はがきでも出そうかと思たがそれも、向の先生樣や、茂平どんの悴に頼まなくつちやあ……」終まで聞かずお秋は「まあ私は何ていふのでしやうお養父さんに心配許させて」「まあ宜いやなあ、今日はゆつくりして行つても宜のぢやらう」

お秋は、まめ〳〵しく立はたらき水を汲と庭へ出て、井の中を見れば、昔に變たる有樣よ、お秋は六才の時此家に養はれる身となつたのであつた、養父母が優しいので爭の起つた事もなかつたが、不幸にもお秋は八才の時に養母に逝れ其後十年と云ふものは此老たる父の男手一ツにて幼育られ、八才とはいへ田舍に長し少女の、帶もまだ一人では結れず、髮も、おたばこぼんとや云ふに結でもらひし事もあつた、其頃は井戸からも新しき水の吹出て、近所の人も水を汲に來た事もあつたに今は、誰一人見返る者もないとか。

井の中は、青苔の美しきまで生て葱は思樣のびた、此庭も、一と昔前は今の三倍も有しが、今は寺の持物となり、其頃はまだ貧し事も知らなかつた、思へば又庭に柿の木の有りし事も思出し、あの頃は、家は少勢で食切ぬからと、養父が梯子をかけて取た時には、自分は下に籠をもちて受け、それに入れてお向の先生や、茂平の處へ持て行た事もある。

茂平とても此頃は顔合さぬてはなけれど、昔に變る今の身の上、先も來にくゝなつたのであらう。

茂平はまだ、我家の好つた時分世話をしてやつた者、人間と云ふ者は落ぶれると、斯まで人に馬鹿にされるものか、あの頃自分は皆の者に、孃樣と呼れ、我家は何不足なく、地面や田地を貸て暮して居た事もうすうすはおぼえがある、自分を小間使にと他家へ奉公に出

す時、養父から始て聞た、地面や何かはもう人手に渡て居ると云ふ事を。

お秋は是等のことを追懐し思はず暇をかき、驚いて井戸端より家内を見れば養父は心地宜げにコクリ〳〵と眠つてゐる、お秋は家へ馳込父の膝許へ來て、わッと許泣伏した。

驚かされた吾助は、

「おゝ秋坊何よ！其樣に泣だ、父さんが何かしたかねえ」と、尋ねる養父を見ても胸せまり「お父さん妾が惡うございました、何程奉公に出たからとて年取たお父さんを一人おいて置なんて、私は實に不孝者です。」

お秋は涙の眼を拭いて「お父さん、私は他家の洗濯物をしても宜いから家に置て下さい、もう御主人へは返りません苦くつてもお父さんと一所の方が宜い、ねえお父さん、」養父は何思つたか一言も語らず、それともお秋を三年許奉公にやりしかひあつて少許の間に言の叮嚀になり、老の心を安めて呉るのかとても思たものか、只涙に咽のであつた。

後は二人とも默して語ず、軒には、病葉のばさ〳〵と散る二葉三葉、此家の寂しさを訪れるかのやう。

口語文が普通文にならうとしたり、三年も會はなかつた親子が、相見て昨日のやうな挨拶をするのも、皆小說と云ふものを書きなれないせいで、深く咎むる事は無い、一貫して眞を傳へやうとして苦心せる小作家の影は能く表はれて居る。（選者評）

秀逸

○宮仕

靜岡縣　石神きえよ

「あの若樣、姫樣がお待兼で在つしやいますから、切望鳥渡お入來遊ばして下さいまし」

苔蒸した汀の自然石に腰を下ろして、悠々〳〵泉水に綸を垂れて居る若樣を、手を採らんばかりに爲て誘ふのは侍女の京である。

若樣と申ても、實は舊御家臣から御撰拔に成た御養子行々は姫樣の御聟樣、今學習院に在學のだが、今日は日曜で一寸御歸邸に成たのを、姫樣は甚く御機嫌で、離れて淡茶のお欵待遊ばすとて、京を迎へに立てたのである。

「もし若樣」

聞えたのか聞えぬのか、冷然と釣て居らるゝので、京は焦躁て急きたてながら、姫樣の御準備はと、石燈籠を小楯に延上つて見返ると、もう緋袱紗を前に挾んで牡丹色紋縮緬の被布姿端然と構へて在つしやる、愈

氣が揉めて若樣に擦り寄た。
「ぢや是釣つたら行かう」
若樣は漸う口を開いて、新しい卷莨に、ぱつと火を點けた。
子爵家の繼嗣とも成られる方丈に、いゝ、おつとりとして、迫らず、騷がず御見上げ申した御人格と、京は今更に自身のはしたなかつたのに心付いて、下豐頰の愛くるしい頰を紅くした。
「京は何歲だな」
水面に浮いてる泛子を些と見遣つて、若樣は不意に問ひ掛けた。
「ハ、ハイ、十七歲でございます」
京は周章た、手間取て姬樣の御機嫌を損じてはと、夫ばつかりわく〳〵思つてる矢先へ、頓麼悠長な質問をうけたので。
「ぢや高代より一歲下だな、良人はもう極つとるのか」
京は益々狼狽て、眞紅に染た。
「そんな事が若樣」
耻しさうに橫を向くと、丁度泛子がぶく〳〵動くのを見付けた。

ちよいと！（選外）　岩代　本田はつ子



「かゝりました、若樣」
京は誰にても釣れる事と、譯もなく思つたらしく、惶急しく竿を上ると、魚はもとより、餌もない。
「さあ逃がしたぞ、承知せんぞ、釣れ、つれ、是非釣れ」
若樣は面白半分難題をもちかける、京は困つたが詮方なく、餌をつけて投げ込んだ。
「若樣、もし釣れませんでも、どうぞ御免遊して。」
縋る如に見上る顏を、微笑を含んで見下して、
「許容も爲やうが、其かはり、僕の聞く事を云ふか」
「ハイ……、夫は知て居りますことなら……。」
「知て居ることとも……京は何か、思つてる人があるか」
京は亦眞紅になつた。
「存じません若樣、そんなこと……。」
「諾、云はれなけや釣れ。」

京も憤發と爲て水面を眺めた、竿は此時下から曳かれて、少し撓んだ。

「來た來た」若様も思はず口走ると、京は此處ぞとばかり兩手に竿を持て、上げようとした、が上がらぬ、力を込めて、ぐつと引くと、無慘、綸は斷れて、鈎はとられた。

「さあ、切つたぞ、容さんぞ、夫とも今のこと云ふか」

「云へつて……、妾、そんなこと些とも無いんてすもの」

「確とないんだな、京、實は僕はな、高代よりか京が好きだ」

つかつかと進み寄て、柔らかく京を攤からうとした。京はあなやと飛退いた、飛退く途端に紫の袖が飜つて、緋綾の手巾が舞ひ落ちた。

「これ貰はう」

若様は逸早く拾ひ採て、好い香りのするのを、其儘顏へ當てた。

「あら若様」京は唐突進みよつて、奪り返さうと爲た。若様は遣るまいと隱す、男女の手と手は何時か絡み合つて、一枚の手巾を爭つて居た。

まあ京は何をして居るんだね！」

不意に帛を裂くやうな聲が耳元でひゞいたので、京はハッと驚て振返ると、築山の上に、姫様が棒の如に、突乎と立つて、ハッタと白眼て居た。

京は一たまりも無く縮み上がつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

その翌日、京が荷物を携て、悄然と嚴めしい御門を後に爲たのを見た人がある。

紅葉山人の「不言不語」にも似た一節があつた、其外此の趣向は型があつて寧ろ陳腐に屬する、けれども讀んで飽きず、面白く感ぜしむるは此作者の功であらう。（選者評）

○懺悔錄

尾張　うばら女史

私は人様に罪を着せて、自分一人善人になつて濟してゐよう抔とは、始めから夢にも思はなかつたのです、夫なら何故あんな大膽な事をし出來して、良人にも、お妻様にも迷惑をかけて、自分も離縁る様な事をしたのかと、お叱りを受ければ一言の申譯もありませんが、兎に角事の成行を一通り御聽下さいませ。

運の惡い事には、十四を頭に六人の子供を抱えて父に先立たれた母は、あの通りの病身で伯父の世話になつてゐますので並大低てありますまい、夫に伯父だと申て有福な身分でもなし、辛い事は分つてをります。私

にしても彼家へ縁附てから未一年たつか經ぬに才吉から助けて貰つた御金計りが彼是積つて八十餘圓になつてをります。

ても夫が樂な金でもあれば未しも、才吉が爪に火を點す樣にして、八九年もかゝつて蓄貯たのだと思へば私は氣の毒で面目なくつて、もう此上は假令どんな事が降つて湧ても厄介にはなれぬ、なんぼ夫婦の中でもさうさう才吉に計り心配は掛られない、てないと一家不和の基だからと、こう決心致しました。

すると二三日して又母の許から手紙が屆いて『……お前の外に誰と云つて賴む人がないので、又こんな事を耳に入れますが、末藏が一昨日椽側からころげ落て右の手を折りました。惡い時に怪我をしたのが彼の不運て、僅五圓か七圓の療治代がない計りに、一生生れもつかぬ不具にするかと思へば、私の身に取て、こんな苦しい事はない、だが御前にも再三の事だから弟一人を救ふ工夫もありますまえ……』と書てありましたので、其晩私は、母や弟の事が氣になつて、一人胸を痛めて、碌々眠られませんでした。

才吉の賴みで私が勘定とりに出掛たのが丁度其翌日て、夕方迄に四十圓近く集めました。歸る途中てお妻樣に逢まして、金體寺に寄て花を見て一緒に戻つて參りました。實は其お金の中から其日七圓の替せを母へ送つたので、後から自分の衣類でも賣て才吉の耳に入ずに誤魔化して仕舞ふ積りでありました。

金は包みの儘才吉の手に渡して食事がすむと私とお妻樣とは風呂に行きました。此方は去年良人に死れた不幸な人ですが耶蘇の信者てすから、家では度々才吉が留守になつて不用心て寂しい所から、お賴み申して此春から同居して戴いたのてあります。

歸ると才吉は『お富、帳面と合せて見たら金が七圓十五錢程不足してゐるが、どこかへ落して來たのてないか』と云ひますので『いやそんな事はありません』『間違つて受取つたのかな』『そんな事もない筈です……』『てはお前が使つたのか……』『いゝえ……』と答へたがどうも氣にすまぬので『何にしてもなければ私の落度ですから暫く詮議だてをせずに許して下さい、其內明りをたてますて……』これも惡意て、人を疑はせようと考へて欺いた一言てはありませんでしたが、夫を正直にきかれたい爲に澤山の虛言を申しまして、到當人をも身をも誤らせたのてありました。

あゝ私は夫からさきを詳しく云ふに忍びません、お妻

樣を泣かせて家から立退かせたのも、天と戴く良人に頭をさげさせて、お妻樣にお詫させたのも、皆私の口から出た罪です、只一度心暗い事をした罪の立派な報酬でありました。

だが才吉は柔しい良人でした。噂の樣にお金をせびらるゝ辛さて私を離縁したのてありません、只私の罪、……あゝ情ないと私は毎日自分の身を怨んて居ます。

聊か複雜した筋道を、是だけ能く合點の行くやうに書いてのけた手際は、あざやかと云つてよいてせう、只事柄の發展を抒する爲に、內觀的に女主人公の苦悶を寫し足らなかつたのは、此作者には已むを得なかつたてあらうけれど、作として一等落る所以てある。(選者評)

○不合格

福島縣　櫻田花子

今日は日本女子大學校の體格檢査及び履歷書調べとて受驗生は三々五々集まりて、

「藤井さん貴女の體格何に、私丁ですの」

と問ふたのは月岡すみ子てある。

「私もそうてすの、もう駄目だわ」

かなしそうに答えたのてある。

「アラ、もう私の番だね」

點頭きつゝ履歷書調室と書るしてある扉を開き叮嚀に一禮したのはすみ子。

「貴女のお名前は」

こう問ふたのは、この學校に奉職して居る女敎師てある。

「私は月岡すみ子と申します」

「そう、御家內何人お在てですか」

「私の宅てすか？五人居ります」

「御母さんはどうしたてすか、お在てゞないの」

「はア」すみ子は力なく答へた。

彼の女敎師は他の先生方と何かつぶやきながら、

「それては何處にお在てなさるの、それともお顏は少しも御存じなくッて」

堪へかねてか顏をサッと赤くして恥かしそうに又悲しそうに下を向き居たるすみ子は、早や眼を潤はせて、ふと先生の胸を見つめながら、

「私は少しもお顏など存じて居りません又何處にお在てなさるのてすか」嗚呼すみ子は日頃悲しむ事を聞かれて如何なる感情を起したてあろう。

彼の女敎師は「よろしう御座います」

すみ子は、叮嚀に一禮して室を出てたが、友の言葉も耳に入れず、たゞ少さき胸に千々の思を抱きながら、我が家をさして急ぐのてある。

日本女子大學校受驗者中合格者人名とある中に月岡すみ子の名は無かつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「姉さん」突然こう呼んだのはすみ子の妹靜子とて今年十四歳の愛らしき少女である。

「ハイ何か用事でもあるの」

「エヽ、姉さんは何を考へてお在てゞしたの、そして何日に葉山さんに嫁くの」

「近い中に嫁くの」と沈んだ樣子にて、早や眼には憂愁の露を宿して居る。

「アヽ、私獨り殘るのね、姉さんは葉山さんに嫁つたら歸らないの」

「靜チャン」すみ子は妹の手を握りながら語を續けた。

「私決して離緣なんかにならないわ。お前もそうてしよ他にお嫁に行つてどんな辛い目をしても決して〳〵離緣なんかになるものではありませんよ、私の此言葉を忘れてはいけませんよね、子をのこして離緣した其子は私等のやうにかなしい境遇に逢ふのですものね」

二人はいつしか泣き伏して了つた。



（選外）　京都　永尾德子

親の光は七光り、薄倖なる親の子は又薄倖なる境遇に陷るのが多い、力は足りないが、着想の精神に見る處あつて此樣の作な採つた。（選者評）

○天才　　大阪　城南みさほ

今客を見送つたばかり、茶の道具など片づけ居る雪子は、兄と客の間に如何な話しがあつたのかと頻りと胸おどらして居た、雪子々々一寸來ておくれ、ハイと入つて來る、あの今夜は吉本君の送別會を當家でやる樣になつたから茶と菓子を用意して、時間があつたら何か一つ生けてもらひたいね。あら吉本さんが御上京遊ばしますの、何日？、そしてあのお妹さんは。あー其についてお前に相談があるのだ、お前も知つてる通り彼等は孤子、僕ら同鄉人として又昔の同窓としてあの秀才を此まゝ終らすのも惜しいと云ふので此度同鄉の者等が相談して學費の半分を送り、上京させる樣になつたのだ、彼も非常に氣の毒がつたが獨立と云つても財產は無し、妹もある事だからね。して妹さんはどーなさるのですか。夫れが何だお前に相談と云ふのだがお前も知つてるあ

の大澤旅館ね、あそこへ奉公に出すと云ふ事だが、其ては身爲めによくないから僕の内で手傳つてもらう樣にしたならばどーだろー、二人きりでお前も僕の出勤中は淋しいだろーから。と云ふ此兄は工科大學の卒業生で、今府下の高等工業學校に教鞭を取つて居る。永くの下宿住ひに飽き、故郷の父母を呼んだが應ぜない、幸ひ妹が去年高等女學校を卒へたので上阪させた。妹は兄の話しを一方ならず驚きもしたが又悦んだ、吉本は元より天才、自分は其文才を戀ひ慕つて如何しても修業がさせたいと思つて居たのが、今計らずも遂せらるゝので、そりやお妹子預るどころじやありませんとも、そして吉本さんは文科大學？勿論さ。

其夜送別會があつた雪子の別れの曲は如何に吉本春雄の心に響いたであらう、では雪子さんもうお別れ致します明朝は早いですから御目にかゝらぬでしよふ隨分御身體を大切に妹をくれ〴〵も賴みますよ、と云はれた時は何だか妙な思がむら〳〵と湧いて悲しい樣な、嬉しい樣な、まだ何か言ひたい樣に口がふるへて、では君心配なく勉強してくれ給へ身體を大切にしてねあゝ諸君僕何とも云ふ言葉がない察してくれ給へ此の恩は他日成功の上て、どーか君等も。あとは感極まつて云ふ事能はざるかの樣、まだ薄暗いプラットホームに三等室から首だして斯ふ云つたのは吉本春雄である。危い〳〵汽車が出ますよ、とあはたゞしい驛夫の聲、汽笛と共に有望の一青年を乘せた列車は靜かに東へと走り初めた、先刻から何も云はないで只うつぶして居た二人の婦人は初めて顏を上げた、二人共眼がうるほふて、しかし雪子は窓から見ゆる白いハンケチを見た時に其眼は妹のそれよりも異樣に輝いた。

人情の波瀾や、社會の暗黑面を描寫することは諸嬢の手腕に待つべく少し無理な注文であらうけれど、此篇のやうに青年男女の友情のやうな事なら却つて諸嬢も書き易い處があるでせう、自然と斯んな傾きの作も多く見受けるやうです。（選者評）

○奥樣

淺草　渡邊小百合女

「奥樣。實際に如何したら好いので御座いませうねえ。親父さへ確立して居りますのなら無理にでもお願ひ申して坊ちやまのお供をさせて戴くので御座いますのに……」とお靜は右手にすや〳〵と寢入つた健を抱へて片手を襦袢の袖口で掩ふたまゝそつと目を拭ふた。解いたならば丈にも餘らうとも思はれる艶の良い房々した黑髮を品のよい丸髷に結んだのが紅匹田の手がらとうつり合ふて。年頃は二十歳の上を二つ三つ、ふつくりとした色白の奥樣、燈火に背いてうつむき勝に。

「乳母、さう言つておくれのは實際に嬉しいけれども、これが晴々しくつて行かれるのでは無し、私もお母樣には何やら彼やらいろ〳〵お詫びもあるしするから……」と手に持つたハンカチーフで所在無さゝうに珊瑚玉の簪を弄んで居る。

「また其樣な事おつしやつて。決してお詫びの何のと其樣な事は御座いません。お母樣も初めてこそいろ〳〵おつしやつて御別居まで成されたもの丶、さて彼れからといふものは……」と一寸聲を曇らせて。

「旦那樣は戰地であゝいふ事にお成り遊すし、お年を召した上にお心細い事ばかりて、實際に貴女樣でもお力に成つてお上げ遊ばさねば……」と健の顏を見て。

「それに此樣なお可愛いゝのまでお出來なすつたのですもの。昨日のお手紙にもある通り、可愛いゝ坊ちやまのお顏も見たし貴女樣のお優しい御介抱も受けたしてもうすつかりお心が折れて居らつしやるのに違ひは御座いません。」

「私もねえ。今までの不孝の罪はゆりなくつても旦那樣のお形見故、せめて健だけでも一と目お見せ申したいと思つてねえ。」とホロリとするを。

「また奧樣が其樣な……もうお母樣のお心が解けたは彼のお手紙でよくお分りては御座いませんか。それはもう如何な方でも坊ちやまの仇氣なさを御覧遊したら……ましてお初孫の事で御座いますもの。ほんにまあ御二人にそつくりで如何なにお喜び遊すか。」

とお靜は涙の滿ちた目にも嬉しさうなほゝ笑みを浮べてじつと健を見守つた。

外はすつかり晴れて後の丸窓には淡く萩の影がさして居たが一としきりの風に揉まれてさや〳〵と音を立てた。「おゝ。お風を召しては。」とメリンス友染の美しい搔くるみでしかと健を掩ふたお靜は眞珠の光しほらしい華奢な手にそつと渡して己が手をツルリ!はなすと同時に林檎のやうなくり〳〵したのにそつと頰ずりした。そして美しい花江と目を合した時はその曇つた顏にもそこゝろに微笑みが止められなかつたのである。

翌日は好天氣！花江は夫の形見なる健をつれて午前八時三十分新橋發の汽車で、相州小田原なる姑の許へと向ふた。

乳母のお靜は年寄つた父親が中氣で半身不隨のため花江の勸に從ひ下谷の家で父親の介抱のかたはら母子のものが幸福を祈つて居るのであつた。

しッとりとおちついた筆つきで、讀んで然う刺戟される事もない代り、味ひがあつて嫌にならぬ、文品の高い作。（選者評）

新笑話　編輯局選

天　○寫眞

成田　橘川ちぐさ

寫眞師「貴郎そんなに動いては寫せませんよ」客「そんなら流行の活動寫眞にして呉れ」

地　○新聞

巣鴨町二丁目三十五番地　上野たへ子

新聞屋正直な農夫に「あなたなぜ新聞を購らないですか、と云ひますと農夫は「はあ、なくなッた親父が多數のこしていッたゞ、其れてまだなかなか讀みきれましねえから。

人　○おうち

麹町區土手三番町　淺井千鳥子

教師「貴女のお家は何處ですか」新一年生「下谷なのよ」教師「下谷はどこです」新一年生「お豆腐屋の裏よ」

秀逸

○ピアノ

上總　小川國子

「英國の女皇陛下は六十臺のピアノを御所有になつてるけれどもお彈きを遊ばさないさうだ」「流石は女皇陛下だね」「己れの知た女は唯た一のピアノしかない僻に六十臺持てるより猶ほ喧しく彈てる」

○欲し相な顏

大阪　村上しげ子

母「他所へいた時や人が持つて居られる物を欲し相な顏をしてはなりませんよ欲しい物があつたら上げますから」小供不思議さうに　小供「お母さん欲し相な顏つてどんな顏」

○顏だけ

千葉縣　金木文子女史

小娘「お母さんお隣りの姉さんの樣にお白粉つけて頂戴な　母「お白粉はねー鉛毒と云ふものがあるから身體に害だからおよしなさい　小娘「顏だけでいゝのよ。

○知つたか振り

日暮里　古志葉美根子

米國へ漫遊して歸つた奥樣下女に向ひ「ヒラデルヒヤで餘り名所舊跡を見るに長くかゝつたので遂々ニューヨルクへは一度しか行かなかつたよ」下女「まあよく垢がつきませんでしたね」

○自動電話

愛知　曾峰

或男、自動電話へ入り「本局の六百七番へ　交換手「ハイ宜しう御ざいます　男「ヂヤ十錢でお吊りだ」、と入れると十錢は下へ拔けて落ちる　男「モシモシお吊にも十錢が出ました」

○最敬禮

岡山　龜山まさ子

尋常一年生に五から五とれば零となると敎へ、數日の後、八より五と三とをとれば‥‥と問ひしに一生答へて曰く、先生最敬禮になります。

○電氣燈　備中　森田芳香

下男「番頭はんあの電氣燈いふものは火は付けんでも夜になれば自然に點るものですか」番頭「さうさ」下男「へえー便利のよいものですなー、己れも故鄕へ歸る時には土產に三つ四つ買ふていんでやろ」

○自轉車　岡山　永原多計子

甲「私所の村長樣は縣會議員に出るつて運動したのさ」乙「へー運動つて學校生徒の樣な體操で」甲「ナニ競爭だけれども敗けて次點者だつたよ」乙「成程敗けて自轉車を取つたのか勝つたら自働車だろーね」甲「何に勝つたら當撰者だ。

○麥飯　美濃　みゆき女

女學校で四年の妹が暑中休暇で歸つて來て御飯を炊いた　母「オヤ粥だね」妹「アラ不思議……さつき姉樣から一舛に米二杯半入れるのだと敎はつたので米二舛五合に麥八合だから僅に八杯と四分の一入れたんですよ。

○此の次の大將　鹿兒島市　帖佐よし子

子「お母さん此次の強い大將は南鄕と云ふ方ね」母「なぜ」子「でも昔の大將は西鄕大將今の大將は東鄕大將此の次はきつと南鄕ですよ」

○馬鹿はやつぱり馬鹿　播磨　にしき

お前は何歲になつたね、たしか午だつたと思ふが」少し間の拔けた男、なぶられたかとむつとして、「私も何時までも午て居ればよろしいが、やつぱり一年に一ツつゝよりますからね」

○洋行　廣島　恒子

父「敏雄お前しつかり勉強をおしよ、大きく成つたらアメリカへでも行かして上げるから、」子「お父さん僕はアメリカへは行かないの、何故つたら僕は洋行するのだもの。

○ぶどうの木　神戶　まさ子

「姉さん何うしやう」と六ツ位の男の子、泣きそうな顏して走つて來た、姉「どうしたの」弟「僕ね、ぶどうの種を知らずに食べたの、來年になつたら木がはへるだらうか」

○帶　熊本　みれ子

母「オヤ良雄さんは泳ぎに行つて又帶を盜まれて來ましたのね」良雄「いいへ母樣今日は盜まれたのではありません誰か僕に無言て徵發して行つたんですわ」

○十八金　東京　芝野水江女

「おはつや、私今度お母さんに十八金の指環を買て戴いたよ」下女「オヤマアー十八斤もあるぢやお孃樣の指が折れてしまうべえ

○ホテル　近江　ことれ

田舍の生意氣な娘　甲「貴女過日來は京都へ御旅行でしたそうですが、どの樣な宿におとまりでしたの」乙「モクチンホテル（木賃宿）に三泊しましたの……」

○猫の名　府下　中島縫子

甲「猫の名はミケかタマかブチの樣な簡單の名前許りと思つたらどうして此の頃は英語の樣な六ケ敷い猫の名が出て來たよ」乙「何故さ」甲「でも──吾輩は猫である──と自稱する夏目漱石と云ふ猫もあるぢやないか」

編輯局選

はがき文

特別第一賞

○くさびら

越後刈羽郡北條村 金塚傳左エ門方 金塚としゑ

松原小路の傍て、松茸一ッ見つけた、そして能く探して見たら、其根本に、小さなのが都合五つ……。オヽむつまじい茸よ、このまゝ大きくなれ、と。松のこぼれ葉ふりかけて！。

初めから法則に拘泥しては文章の生氣は何うしても乏しくなる、傑作になると別に文章の作法にかなはしめやうとも何とも思はないて、只有の儘に描寫して行つても、それが整然と法にもかなう。殊に短い文章ては作り方も別にやかましく言ふ事は出來ないし、又作り方などにかゝづらふべきてないが、此の「くさびら」の一文、自然に有の儘の叙景、有の儘の感情を述べて、僅か四行の間に文章の神技を示して居る。起首松原小路に松茸を見つけた事を言ひ、そして能く探して見たら五ッあつたと言ふに動作を發はし、オヽむつまじい茸よと一轉して作者の感情をうたひ、大きくなれと希望を言ひ、更に「松のこぼれ葉ふりかけて……」と反言して結ぶ、所謂、漸層法の一句一句に印象を强めて行く筆づかひ、一字も動かす事は出來ない。我が『女子文壇』のはがき文はいつも他に見るを得ざる天眞流露の名文に接する事が多く、今又一粒の金砂を其流れに拾ひ獲た。

特別第二賞

○老人の希望

上毛新田郡強戸村大字北金井 河内とめ子

私の祖父は毎朝浅間山を見て獨言します。「己はこんな白髪になつたが、浅間山は己が子供の時分と少しも變らない。己もそんなに長くなくとも、浅間の煙が消えるのを見て死にたいものだ。」

世に『無限』の存在なし、然かも山は人間以前より人間以後に渉らむ、老人の一語、山の使命を道破す。

特別第三賞

○友切れ

静岡縣藤枝町 紅薔薇

衽の端、襟先のあまり、八丈、お召、糸織、甲斐絹、四角、三角、半巾、四ツ割、何時か手函は一ぱいたまつた、斯してとつて置けば、又いつか役にたつ時がありますよ。

燒穴の閉塞、かぎざきのつぎ。

天 ◯五色の花

周防都濃郡長穂村　内山まつ子

私が十五の時祖母様が、女十五の年八月十五夜に金銀の扇子でけしの實を蒔と、五色に咲くと仰有つたので、立派にお化粧して蒔きました。翌春になつて誠に美しう五色に咲いたので、往來の人迄足をとめて觀ました。

神話中の人。

地 ◯きらひ

大阪　悠月

お湯に入るのと、かみゆふのと、それから顔をそるのがきらいてす、そしてかみいふて顔そつてお湯に入つてしまつた時は一番すき。

滑稽は該所目なり。

人 ◯七夕

甲府市藤町　山田袖子

今宵こそは星の光に針の目通して、あはれ裁縫の技に妙を得んと待ちに待ちつるものを、拙なき己れにかゝる事は甲斐なしとや夕つ方より空かきくもりて星の影だに現さず。

米織姫も出てまさず。

秀逸

◯名の様々

落葉子

俊子は君子的、翠子はハイカラ的、民子は小説的で、浪子は肺病らしく、田鶴子は姫様なれど、お辰はお妾の様で、房子は淑徳ありそう、哲子は學者らしく照子はお轉婆、阿縫は下町の娘で、豐やは小間使。

マリ子は舶來、ルリ子は如來、あぐりは體操の先生。

◯郷里

四谷區　横田久子

歳を取るに随て郷里を出るのが何となく悲しくなります、私も三年前に歸省した時と比べますと、全く感情が異つて山も木も草も總て郷里にありとあらゆるものが懷しくせめてもと摘んだ朝顔一輪本の合に整然と挿んで有ます。

好個出郷の賦。

◯諸國の人

大阪市　伊藤あさ子

東京は活潑だから私大好きよ京都の女は優しくて好いけれど男は何だかなまたれたよーだから好かない、大阪はあわて者、紀州は言葉のしまひにのしのしを附

けますから耳障りになるそれからずーッと離れて鹿兒島は無骨。

いゝい　なまたれは大阪の方言。

◯學校選み　　南多摩　金子信子

祖母さんは裁縫學校へ母樣は美術學校へ、又兄樣は高等女學校へ、そばて父樣は迷はないで能く考へたがよいぞ、そうして私は共立女子職業學校へ入學たいと思つて居りますのよ。

活動的女性。

◯吾妻山　　福島師範　櫻村女史

吾妻山。夫は妾が學校の西五里に絶えず煙を吐いてる氣高い美はしい山であります。妾は朝夕之を眺めるのが一番の愉快若雨でも降て三日も見えないとそれはそれは不愉快。

今既に露の冠を頂く。

◯林檎　　札幌　大須賀おりゑ

父上樣がお植ゑなさつた早熟林檎、一斤が七厘か八厘東京に持つて行つたら一個十錢でもお買ひなさるてしよー、五六日たつても、くさらないものなら、記者樣にあげたくてよ。

何時ても頂戴いたします。

◯男女兒　　京橋　磯千鳥

四五歲の小兒は愛らしく、八九歲の男兒は無邪氣にして女兒はコッペイなり、十三四の男女子は碗白おしやれなれども、十七八歲は戀愛時代にして、廿五六の頃は結婚の時なり。

花の盛り、女の盛り、何れもあわたゞしく過ぎ去る時代。

◯白粉　　紀伊田中　文子

妾は白粉つけるのが大きらひ、ていつもお母樣からお小言頂戴するのよ、けれど何うしてもつける氣にはなれないのですもの何故てせう。

天の成せる麗質。

◯信州の山猿　　信濃　倭文子

劍ケ峯の險を越え樣とする時、東京の某中學の學生連が見て居て、一人が、女でさへあんな元氣だに僕等も登らうか、と云ふと高襟な人が、何あれは信州の山猿だから登れるんだ、僕等はそんな山猿の眞似なんかするものじやあないよと。

失敬千萬。

◯虫の名ぞろい　　川越町　佐久間たまえ女

宅では松虫鈴虫玉虫外にくつわ虫と言ふ名が有ます父は松藏母はすゞ私は多滿江、義兄は理窟ばかし言から父にくつわ虫と言はれます。

變つた虫づくし。

◯初冬の夜　　横濱市　風間彌壽子

猿も小鎚ほしげな初時雨、思ひ出しては降る樣に、時

時途斷ては、また破れ廂に降りかゝる夜を、父様は碁を打ちに御出掛け、母様は六疊の御座敷で針仕事、妾は書齋で讀書、天井では鼠の運動、雨は一しきり降り出した。

其お孃様。

○別荘　横濱　秀子

御主人は朝の九時に御店へ御出掛け、奥様は、御病身なので終始御自分の室に籠つたきり、御天氣の好い日には庭へ御孃様と諸共に散歩をなされる、御孃様は今年十七でそれは〳〵優しい御方、夜は秀に英語を御敎へ下さる、廣い別荘は之に門番の爺と妾の五人です。

其小間使。

○寢姿　熊本市　石坂せつ子

無邪氣なるは小兒の寢姿、愛らしきは妹の寢姿、佳いのは美人の寢姿、淸きは聖人の寢姿、醜きはお三の寢姿、正しきは父上の寢姿、始末に困るは弟の寢姿で、見たきは私の寢姿であります。

蒲團着て寐たる姿や東山。

○頭から頭へ　讃岐　吉田園菊子



舞子の濱（選外）　神戸　伊利子

小庭を一〆にするやうな柿の大木の下で、妹と二人餘念もなく雜誌を見て居ると、未だ熟もせぬ柿の實がぽつたりん、妾の頭から妹の頭へ落ちました。

一擧兩得。

○世はさま〴〵　福島縣　吉田けさ子

隣りの孝ちやんはお嫁に行き前の内の御ばあさんは冥途に行き叔父さんは貧乏してハワイに行く。

戀と無常と而して生活。

○我學校　池田なか子

私の學校では本年の一月より農業科を加へられまして一週一時間づゝ校長様及び農業科の先生は熱心に生徒一同も興を以て只今は養蠶を終り栽培敎科書にかゝりました、卒業の曉には自らと樂しんで居ります。

熱心と興味、是てこそ學校らしい。

○琴のお稽古　津山　玉あられ

私此間から琴の稽古をして居ますの、處が父様は琴より吉備樂をと祖父様は謠の方が上品だとおつしやるの、また兄様は（ピアノ）が文明的だからと、そして祖

母樣と母樣は琴が優しくて宜からやはり琴をと、噫私どふせふかしら。

萬國に通ずるより一藝に達せよ。

○銀座街　本所　江原とり子

土藏造りの舊式は洋風の新式と變じ、電車電燈は言ふも更、新陳代謝は間斷なく行はれて、日に日に洋式美に變じ行く銀座街。その街の中程に空高く聳えて居る大時計は、刻、一刻、人の命を刻むで居るのに。

詩にはある想。

○私の望　北海道　相原壽美子

人は東京だの大學だのと望むが私は唯此靜かな田舍に先生々々と無邪氣な生徒に手をひかれながら、女子文壇を友として、いつまでも／＼浮世の苦しみを知らずに、呑氣に暮したい。

作者の住所は北海道天鹽國留萠村十三番地、昨や冬來らんとして北海の山野は雪と氷に掩はれむ、乞ふ自愛あれ。

○自然の美術家　麹町　淺井千鳥子

蟻は建築を良くし、木喰虫は彫刻に巧みなり、蛆は繪畫に妙を得、鈴虫松虫は音樂に上達せり、是皆自然の美術家。

展覧會、演奏會。

○歸省　九段　芳子

只今‥‥と三年振りで歸省した私しを父上はホク／＼笑顏で迎へて下すつた御母樣はまあ大きく成てとほろほろ涙姉樣は肥た事と御笑ひなさる妹はアラ眞黑に成つてとクス／＼笑ひ兄樣はヤア、ハイカラーと仰山な聲て‥‥

大きくなつて、肥つて、眞黑になつて、ハイカラになつた。

○分店　福岡　林まつゑ

私は兄樣に願つて店の一部と元金五拾錢を借受ました品物はレースの編物子供の簪ハンカチ等、段々賣れまして今は元利で貳圓拾八錢と成ました、成長なつたら私は分店を開いて兄樣と仲よく助合つて其賣方は掛價の無い西洋的に仕樣と思ひます。

女子實業家の模範たれ。

○二百十日　若狹　塚本ふさ子

農家は氣樂の事の樣に皆樣は御思ひでせうが、水無月の暑き盛りを汗もしとゞに勞き、一途に豐年をのみ謳歌して、二百十日頃となれば風に手を當る思ひて、偶然一暴風雨襲來ると七分作は飛んでしまいますよ。

風に手を當るは警句。

○三人のお友達　廣島　つれ子

妾の友達の靜子樣は非常にしつかりした高尚の方で谷の白百合の樣、露子樣は溫順しいお優しい方で野菊の樣、芳子樣は同情の深い方で始終お顏に浮んで居る愛

の微笑は蘭の花が香つて居る樣です。
白百合さん、野菊さん、お蘭さん。

○秋の七樂　飛騨　あやめ子

曉の露を破りて登る朝日を眺むる夕暮叢にすだく鈴虫の音をきく、さえ渡る月に對して讃美歌を唄う眞萩がくれに笛の音をきく、菊の香高き窓に詩集繙く、小春日和にテニスの遊び、握飯を腰に親友と共に茸狩をする。

夏の七快に倣ひて、試みに選者の秋の七快を示さん、秋の景を見る、銀杏の葉の黄みたる、武藏野を歩く、秋晴の日、松茸飯、冷たき空氣、白馬會。

○樣々な望み　橫濱市　波　南子

或夜御友達四五人で自分等の望む人を銘々言ひ合ひました、雪枝樣は學校の先生、竹子樣はハイカラ、義枝樣は裏長屋のお内儀樣、妾が畫家、一番年下の安子樣は何時も裏の原へ來る草苅女になつて見たいと。

何うして裏長屋のおかみさんなどに爲りたいてせう。

○遠征　京都市　白てき子

波の上に盥浮べて乘りたるは、漁夫の子なり、三四尺の竿を手にしてボートの如くにかけば、盥傾きながらゆらめき進む、夕日傾むく青海原に、萬里遠征のいろは習ふは、一人ならず、二人ならず。

文、亦覇氣あり。

○天職　徳島市　小川なみ子

經條に始まりて唱歌に終る漁村の女子教育其れに關らず恰度五年間、何かと想ひし娘の親から書輪もお醫樣て、手前のは善い嫁に……と聞きました時は前途の希望の光、そゞろ妾しの天職が貴い樣。

○七夕祭　愛媛縣　白石錬子

待ちに待つた七夕祭も、はや今日明日となつた。天にましますお二方樣は、さぞおうれしいてしよう。

○小百合に　姬路市　船戶ゆき子

ソロモンの榮華にして猶且その一莖に及ばざりしは汝よ祖先より享けたる汝の魂は物變り星移りし今もよく萬戶侯の富を冷かに笑ひて雄々しく氣高く咲き匂ふ百合よ小百合よ永遠より永遠に汝は常に汝の如くあれ！

○二百十日　本鄕ちか子

明日は二百十日だが暴風がなければよいが、もしあるとせつかく丹精してよく出來た米が、皆だめになつてしまうと兄さんが云ふと、弟が姉さん二百十日に風が吹いて柿や栗が澤山落るつて、そうしたら僕ひろつて姉さんにあげるよ。

○内の下女　京橋　笄子

川崎在の者て年は廿二才言語擧動共に琉々しく顏は牛蒡の白合への如く着物は木綿のごつ〳〵實に可笑しく只一ッ取得は忠實て正直なること金庫の番をさせても大丈夫。

○まゝにならぬ　神戶　石井愛子

有る樣て無いのが金無い樣て有るのが借金強い樣て弱いのが露國弱い樣て強いのが日本降らぬ樣て降るのが夕立暮れる樣て暮れぬのが春の夕暮、取れる樣て取れぬのが女子文壇の懸賞。

○一口日記　阿波　内田茂子

六月十五日、田に水入れるを手傳ひす。
六月十六日、螢が美しく嗣をなす。
六月十七日、田草の取り上げをなす。
六月十八日、女子文壇に投書をなす。

○朝飯前　廣島市　乙　女　子

御父樣は島の野菜の手入役、母樣は鷄に餌を、私と大きい妹とは二坪計りの植物園の草取り、大きい弟と妹とは御池の金魚に餌をやる役少さい弟はブランコに乘る。

○机の上　芝　寧　風　子

鉛筆やペン軸が同居している樣な筆立。側には和田垣様の字引。上に可愛いゝナイフと貝細工の兎。少し離れてインキが三つ行儀よく並むでいる。その後には置時計の勉强家もいる。あら硯突が欠伸して。

○米と麥　上毛　竹　内　松　子

日本人は皆語り合ふて日く、今年の米作は如何と。歐米人は皆相語りて日く、當季の麥作は如何。我れは米にて命を繼ぎ、彼れは麥にて命を支ふ。米と麥、乃ち酒とビール。

○富士登山　愛　雲　子

六根淸淨のかけ聲勇しき白衣に菅笠の一群も鞋歐雄々しき洋服の學生もさては單衣の裾端折りて鐵鉢卷甲斐々々しき十六七の娘子も、いつしか霧に隠れて只鈴の音のみ幽かにチン〳〵と。

○新入學　備後　吉　田　唯　子

妾は、女學校に、始めて、入學いたしまして、直ちに、寄宿舍に、入りました、所が、知らぬ、御方のみ、話しもなし、只、はかなき、空想を、描き、心細くなりました。

○繪葉書　岩　代　佐　藤　文　子

兄樣これは兄さんが小學校に御出ての時分に、何日も遊んだ所の公園を少し寫生したのてす、そして此水彩は實に初て習ふたのてすから下手てすが、どーか兄さん此繪葉書に點數を附けて、下さいれ。

○賀　宴　金澤市　吉　田　他　女　子

花屋源兵衛六十一の賀に當り或客人酒盛中親して百の内六十一の賀を引けば、三十九やもの花屋源兵衛、と。

○吾が舍　秋田縣　武　田　春　子

吾が小舍は南に當り東は山林に望み西南の一帶は田甫打ち續き北は山を負ひ畑は一反步田は三反三畝步あり家内は七人暮しの七福神「つぼ」は二ツあつて南天の大木あり。

○家族の帽子　神戶　大　谷　秋　月　子

機關士のお父樣は金モール、兄樣は商舘の中折、姉樣は、女學校專習白巾廣リボンが帽子らしい、姉は每日海水浴網笠的麥夕ラ帽、姉様の許婚の義兄樣は上白無筋の海軍士官候補生、妾は博愛的の白帽よ。

○懷　舊　備　中　靜　香

嬉しかつたのは女學校入學許可の通知が着た時、悲しかつたのは慈母が亡なつた折、樂しかつたのは春秋二度の修學旅行、感謝に堪へなかつたのは忠告して下すつた温い友の情、而て十七の今迄無病息災てあつたのは私の最大幸福。

○家内の理想　近　江　尾　具　里よしゑ

父樣が西鄕樣て母樣が敎子樣、兄樣が桑木博士て弟が東鄕樣、姉樣が一葉女史て妹が小波の叔父樣。

○蕨とり　磐　城　壽　子

今年蕨とりに三四里山奥へ行きましたら澤山出て居りました、あまり面白いので行く時のつかれも忘れて一生懸命にとりましたら、澤山とれましたよ。

○踏切の夕暮　安　房　川　早　と　し　子

日は西に沈んだ計り、雲は五彩を交へて西のそらに淋しい村の踏切も、家々から出る烟が村の端れを包んだ頃は鍬を擔いだ百姓爺を背負つた草刈りなど中々に往き來がある。

○歸　途　上　野　好　月

美しい、夕月は茂つた、茂つた、桑の葉影から、彼方の、藪の間でも、此方の、石垣の、穴からも、鈴虫、松虫、こうろぎ、節面白く、唱ひ出す時、私は、重い、桑かごを、背負ひ、秋草の、露ふみしだきて、小唄唱ひながら、家路へ、急ぐのてある。

○休暇中の雜感　明　石　孤　蘭　女　史

嬉しかつたのは歸鄕の晩、樂しかつたのは同窓會、懷かしかつたのは緣

談のあつた時、苦しかつたのは日中に旅行した時、心地よかつたのは朝起きて青々とした稲田を見渡した時。

○始めてした事

よ れ 子

私はこの春女學校を卒へまして田舎にかへりました、そうして生れて始めてこの三つの事をしました、一つは蠶飼一つは田植それと機織り、そしてこの三つの事は、同窓會の第一の自慢話に樂しんて居ります。

○二百二十日

神奈川縣 杉崎はる子

聞く二百二十日は、荒日なりと、五六日前より、氣遣ひ、朝は南の雲立を見、夕は入日の空を眺め、田は一面の稲の波、野は入束穗の粟や黍、これぞ、今年も、豐年ならんと。

朝顔實（選外）

○今日の毀譽

横濱 千秋子

今日學校て國語の時にほめられ次の體操の時に叱られ終りの裁縫の時に又ほめられきました。

○日記の一節

埼玉 吉敷里子

七日、起きて庭に出た時は未だ星がありました、今日は芳子さんの來る日、家を掃除して待つてゐると午頃いらつしやつた、女子文壇をよみながら評をし合つて面白うございました、夕方からは又ひとりぼつち。

○吾家の一日

德島 若山みさを

毎朝三時、戸をあける音に驚いて、飛びおきるとはや母樣は背戸の畑に、私は急いて朝飯の用意室内の掃除、御飯は燈の元て、用がすむと晝間はごろ〳〵晩は母樣は九時におやすみて私はそれから一時間女子文壇。

○亡き弟

鹿兒島 遠山柳子

あすは初めて朝顔が咲くつて大よろこびて、種子入を作つてくれたのは早や去年、今年も朝顔は元の通りきれいに咲いてもう種子も結んだが、種子入をこしらへてくれた弟はもうなき人てある。



○九十度以上

上野 佐藤露子

寒暖計が九十度以上を示すと人は口々に「暑い〳〵」を繰り返して休むのが世間普通の例てある、いやはや情ないよ、此位暑い日があつてこそ始めて米はみのるのてはないか、とは吾が父母が日毎の戒てあります。

○雲

伊豆 彩雲女

嬉しきは海水浴の歸りの白雲。惡きは運動會の朝の黒雲。悲しきは故郷を想ふ夕暮の雲。愉快なるは日本の形の雲の益廣がる時。喜ばしきは母上が雨乞に行き給ひし折の農村の雲。

小石川 富岡弘子

○何をか作らむ

周防 桔梗子

隣の万吉爺は豐作々々と喜び風流の父上は瓢簞をお作りなすつて御樂みお味噌は母上のお作物兄上は頻りに詩を作つて得意然と吟じて居られ下男の三吉は毎夜草鞋を作つて居る。

○思つて居ます

愛知 すみれ

學問は深からずとも仁智の深き、色は白からずとも壯健な方の處へ、家庭は玉の如く圓くて滑かて、臺所は整齊さんより敎はつた通りに、そして小供があつたら桃太郎の樣にと思つて居ます。

○厭な晩

西ノ宮 森井せい子

むし暑くて眠られないから又庭へ下りた、空はどんよりと曇つて少しの風もない、茂みの中てうなつてる蚊がをり〳〵ぶーんと飛んで來ては足を刺す、團扇てばた〳〵たゝくとどつかへ行つて仕舞ふ、あゝ厭な晩だこと。

○心地よいもの　岩代　若草女史

此頃目につく心地のよいものは、金鵄勳章貰つた方が、せつせと家業に勉めて居るのと、見渡す限りの田面の稻穗の貭々しく頭を垂れてゐるのと、月夜に光る草葉の露と、栗の木林の梢の栗の實であります。

○ふとした時　横濱　美子

野路の事てした、蝶がわたしの髮のカンザシにと狂うています、まア父母はなくなつて弟が一人あるにこんな髮をゆふて、この花などをさしていられませうぞ、と、簪を地にすてゝ、それから一生懸命に働く事と致しました。

○祭禮の前日　八王子町　乙幡もん子

明日は村の祭禮なり、先づ家中を掃除し父は町へ買物に行き、兄は作代と共に庭を掃除し、母は下女と馳走の仕度し、私は妹の髮を結ひて入湯を終へ、定めし親類の方も來客あるべしと共に語り合ひ早く明日になればよいネと樂み居る。

○朝草刈　茨城縣　川島はな子

姉さんが毎朝疾く起きて草刈に行かれますから今朝こそは私がさき行かうと思つて、鎌をといておりますとお仕度が出來て……と聲をかけられましたので、ふりむいて見ますと姉さんてありました。

○我　家　周防　拾　子

あゝこの破れた我家を如何して再興しよう、お父樣は亡くお母樣は日毎日毎御顏にお皺多くおなり遊ばすばかり、肝腎の兄さんはもう云ひますまい、胸もはり裂けるよう……そして私も妹もまだ小供だもの。

○金鵄勳章　小石川　こ　て　ふ

私のお父樣が、金鵄勳章を頂きになつたらば何か買てやるとおつしやつたのよ、本當に何買て頂かふかしらんピアノ？金時計？それともお琴にしよふか、本當にうれしくつて早く其の時が、來ればいゝのですわ。

○樂しき時　下總　入木みゑ子

春夏秋冬の中何れも樂しけれども姿等農夫の身にとりては秋穫樂しい時はありません、一年中の作物を収穫しながら「マツ虫、スヾムシ、クツハ虫、ミン〳〵、コーロギ、キリギリス、蟬」等の聲を聞きながら稲を刈り取る。

○天龍川　信濃　今村元子

吾が家の前を流れるのは天龍川である去る年最愛なる弟は此川に遊泳中不斷の客となつたのてある嗚呼無情の川よ見るも涙の種てある。

○私の理想　尾張　清　女

星の如く數知れぬ稀書籍が集めて見たく十五夜の月の如く少しの欠點なき家庭が作り度くそして我子の名譽が世界中に太陽の如く輝かせたい。

○小　宵　攝津　古結とき子

四邊寂寞、妾は床の中て、一心に歌の句を考へて居るのです、一陣の冷風窓よりサツと來り、忽ちランプは消えて、迷ひ來りし一匹の螢の火は枕頭に鮮かに、今宵こそ、天女が天下りて妾の耳元に囁くてしよう。

○未來の希望　美作　玉　子

私は丈夫な二人の男子を設けて、一人を陸軍々人、一人を海軍々人にして、各々國家の爲めに働らかせて見たい、是れが未來の希望てす。

○月と勉强　石川　嵐　友　女

燃えたつ樣な夕やけの空が、漸やう薄らひてゆくと、月が森の木かげから金色の光まばゆくさしのぼる、此時恰ど默習時て姿の室から申し分なく見える、すると默習時間は勉强とお月見と半分宛になつてしまふ。

○樂しき我家　淸國大連　林　正　子

一日の中て一番樂しいのは、夕飯後夕顏棚の側て、青田から吹いて來る涼風に吹れながら、私は父上のお腰を撫て妹は母樣のお肩を叩きながら、兄樣のお讀みなさる新聞を皆て聞く時てある。

○嫌なもの　東京　冷　花　女

下駄の齒の曲たのと、後のへつたの、髮汚れた匂ひ、ハンカチの汚れたの、手洗鉢の水の少くないのと、糸屑の散らばつているのと、遲い人力車、飼つて居たものゝ死んだ時と、つまの無いおさしみは物足り無くて嫌いてす。

○三人の審風　土佐　最石女史

兄上は故巌谷一六翁の書風がお好だとてお習ひなされ。弟は村田様の海石流が美しいからよいとて暇さへあらば一生懸命で稽古して居ります。ソレて妾は何流をと兄上に尋ねましたらお前は自分の景石流てよいつて。

○例へば　東京　好子

梅を良妻賢母とせば櫻は美人ばらは交際社會の女王、百合を女神に譬へんか海棠は閨へる少女白蓮は尼さるすべりは田舍娘山吹は若き未亡人。

○希望　大阪市　島田ひろ子

此間花子様の御希望を伺つたら、美しい着物を着て、物見遊山をするのが何よりの樂しみだつて仰つたけれど、私は景色の好い土地て風月を友として清く靜かに、汚がれなき一生を送りたい。

○好きなもの　芝區　鶴岡かつ子

美しき花、淸き空、凉しき風、晴れた日、新らしき襯、古き書、小供、寫眞、天麩羅に茶漬飯。

○湯浴み　岩代　丹治はるみ子

妾が燈火を點けないで、湯を浴みて居ますと、窓からお月様の光がさし込んだので、湯の中が綺麗に見えました。

○花に感謝　上毛　綠野董子

滿洲朝顔が一輪咲きましたが花は非常に大きくて色は眞白、私は此美くしい花に向つて感謝しました、去年の今頃は彼不潔極まる滿野をかざつて如何に軍旅の士を慰めたてあらうと。

○やつこいか　神戸　まさ子

東京から始めて來られた伯父様つたら、妾の學校通ひの風（筒袖）を見て、「まるでやつこいかの様だ」なんておつしやるのよ、東京てはどんな長い袖の着物を、着ていらしやるのか知らん。

○朝飯前の仕事　富山縣　酒井常子

私の家は親子六人て、毎朝五時半に起き七時半まて、父は兄と次男を連れ田圃へ草刈に、母と妾は朝飯の仕度に室内の掃除、三男は學科の復習のが、毎日朝飯前の仕事です。

○七夕　喜美子

夕飯終り椽側から外面を見ると、赤燈籠が彼方から二つ此方から一つ、見る〳〵中に鬼面だの色々のが來た大奘の擘にフト見ると、漸く四才に成る弟の寶、つけ髯して大威張其れもよいが、今年豐年乳母乳出せよ。

○下關名所　下關市　山本はな子

前は彦島左は巌流小門の海峽を澤山の漁船が夜焚しますと魚が皆火の傍へよつて來ますそれを網てすくつて料理して食べますの其味のいゝ事……又火が水にうつつて實に美觀です一度皆様へ見せたい。

向岸（選外）　沼津町　井上靜子



○無情の親　下谷　伊庭いそ子

私學校の歸りがけ不忍池の所に大勢人だかりがして居ましたから何事かと思まして一寸のぞいて見ましたら嗚呼無殘々々生後五十日位の捨兒てした何と無情の親ては有ませんか貰子迄して育てる親が有ますのに。

○墓參　高知　ふた葉

弟の好は四つ妹の文は三つになります二人を一しよに連れて一昨年戰死なされた親父様の墓地へ參りまするど好は親父様が切石におなりだと云ひ文は無闇に花をねだります。

○散りし花　越後　瀧澤みつ子

今日は亡き姉様の命日だから御花でも上げ様と庭に行つて見ると萩も尾花も昨夜の雨て皆な散つてしまつた。

○くやしきこと　石川　をばな

明日は遠足、それお辨當よそれお菓子よと、騷ぎまはつてやつと十一時に床についたが、さてどうしてもねられん。曉の鐘に驚いて窓押し開く

途端、破芭蕉をたゝく雨の音。

○變りぬる世

和歌山縣　太田田鶴子

昔の行燈は今の電燈、昔のお駕籠は今の馬車、昔人車の大井川も今は汽車、昔丸形の人の心も今は儘に正方形。

○正午鐘

上毛　柳つぎ子

今迄降つて居た雨が小止みに成つて少し明く成つたと思ふと正午の鐘が鳴り出した、何處の家を見ても烟がしめつぽげに屋根の上にたゞよふて居る、少し經つと機織の筬も蓑打つ音も止むだ、そして何處の家でも同じ午食の膳に樂しく向ふのであらう。

○涙

日本橋　尾崎雅江

私はこの年になつて、他人の家に働く身となつて始めて悲しと云ふことを知り、涙と云ふものを覺えました、昨日までは世間も知らず身も知らず、唯だ母親の裏に温められしが、げにや浮世は辛い者である。

○操行査定

越中　夫名女史

體質强健、學力上等、動作敏活、言語明瞭温雅、評定甲、噫嬉しい哉、不正の極なりし、秋田實の操行も、今では安心、斯あつてこそ、日頃熱中して、敎鞭を執りつゝある、妾の志が達するのである。

○花火屋

本郷　曾我露江子

露店の玩具やの花火がはれつして屋臺はめちや〳〵、集まつた人々は聲を揃へて、けがはしませんか危ない〳〵、まあ大事にならないで結構だ、それにしても可哀そうに明日からは商法が出來ないなあ。

○その君

陸奥　芳の江

風の神も無情なるかやと打ちかこちたりし時、お顔に袖を當て給ひし君の詩集といふもの、拜見せしに、運命の神を初めとして夕の神森の神るては女神男神などありがたきかず〳〵。

○四季の神

牛込　山崎靜枝

花、鳥、月、風、いづれもすぐれて、いづれもゆかし。げに、美はしく、心地よく、淸く、樂しく、いかばかり吾人を、慰め、はた、勵ましむるか。

○嬉しい事

和歌山縣　津田久子

朝起きて一番嬉しいのは、早かつた時、四方晴れ渡てあつた時、垣根の朝顔は美しい花を開いてあつた時、皆さんより早く學校へいつた時が一番嬉しいの。

○朝起

羽後　伊藤幻

これからは寒くなつて朝に起き難いものですが、それを我慢して起きると、曉風顔を吹いて、寒むからず、熱からず、冷たからず、また暖かならず、實になんともいふにいはれぬ心地よいものです。

○夜道

鳥取市　上山千重子

一陣さつと冷たい風裟沙と桐の葉が落ちた、ハツと思ふまに蠟燭がつきて頼みの火も消えた、暗の小徑の氣味の惡い事、今少し行けば首つり榎がある、思はず身採ひ一つ、噫母の薬を如何して求めやう。

○日本の字

相模　ふたば子

七八つの徒ら盛りの小供が三四人集まつてゐる内の一人が「やあ支那人が日本の字を書いてるから見給へ」と叫んだ見ると支那人が荷物に香港行と漢字を書いてゐるのでした。

○お産

府下千住　露洲

誰さんはお産で死んだのお産後身體が惡いのと惡い話許りに、私はお産は嫌ですからお嫁になんか行くまいと言つて居りましたら今朝幾姉さんが私の起きぬ中にお産を傍に可愛い赤さんが寢かしてありました。

○無邪氣

波島　工藤以津子

小さいお池の水を妹と弟と二人で替へて居たが替へてしまうと妹が中位な石を三つばかり水中へ入れた故如何するのと問へばお鯉が鬼ごつこをしてかくれる處がないと困るから……

○待ち遠い

臺灣　内村たけ子

妾は兄樣と二人臺灣に無事に日を送りて居ますのよ兄樣は通信局に御勤務妾は本年女學校に入學させてもらつたのよだから雨降る朝も風の日も通學して居ますわそこで兄樣の御昇級と妾の卒業期日の待ち遠い事。

新年以後の女子文壇豫告

全國大小の都會は申すに及ばず、如何なる山間僻地と雖も、本社發行の『女子文壇』愛讀者のある事は、本誌の發行高が最も多く、從つて各地方に能く廣まつて居る證據です。之れ本社の光榮として愛讀諸孃に誠意の感謝を表する所以でありますが、聊か其愛顧に酬ゆる爲に、新年以後の『女子文壇』に新計畫を立てました、則ち懸賞の方法です、雜誌が多く出れば出るだけ内容を善くし體裁を美くしたいのは、本社年來の主義てすから、何時の號にても全力を盡くして善美にしたいと存じて居りますが、新年と云ひ、本社創業第三年と云ひ、旁々一月一日發行の雜誌からは、先づ懸賞法を左の通り改正します

大懸賞品

甲種

- 第一等　新形婦人持銀側懷中時計……（價格金拾圓　天賞堂謹）
- 第二等　新柄反物……（價格金參圓　三越呉服店）
- 第三等　縮緬半襟……（價格金壹圓　ゑり治商店）
- 第四等　本社出版圖書切符……金七拾錢
- 第五等　同……金五拾錢

乙種

- 第一等　流行絹張洋傘……（價格金五圓　仙女香謹）
- 第二等　流行帶止……（價格金壹圓　大西白牡丹）
- 第三等　化粧品……（價格金五拾錢　佐々木商店）
- 第四等　本社出版圖書切符……金參拾錢
- 第五等　同……金拾錢

（甲種とは）短篇小説　抒情文　評論文　叙事文　書簡文　新體詩

（乙種とは）和歌　短文　新笑話　俳句　新歌謡　圖畫

（課題及び各種の字詰行數は從前の通りです）

右に依りて讀者は更に新鋭の氣を鼓舞して詩歌文章の投書を願ひたい、即ち十一月二十日締切の原稿から新年に出るわけです

新年以後の女子文壇豫告

◉新年大附錄と記事

懸賞方法の改正、文藝遊戲の新設、其外新年の本誌は創業三年の祝意を表する爲め、特別大附錄として當代第一流の洋畫家に托し、艶麗鮮美なる石版極彩色の附錄を添へます、外に口繪の選擇、名家の記事等種々既に着手中てありますが、詳細の豫告は十二月の紙上に於てする事とし、今暫く讀者の想像にお任せいたします

文藝遊戲 姉妹合せ

［興味ある新案＝別種の懸賞文］

他に類の無い一種の面白き方法を以て讀者の文才を試み合せて興味を惹く爲に新年から「文藝遊戲」の一欄を增設します、左の説明を詳しく御覽下さい

○問ひ。假に斯う云ふ事があるとします、或る母君が二人の娘に向ひ「今年からお前達に學校へ遣る外に、何か一藝を敎へてあげやうと思ふが、好みを言つて御覽なさい」と問ひました、兩個の姉妹は何と答へるてせう。と云ふやうな時に諸孃の答へは何うてせうか、假に其答を作つて頂きたいのてす。

▲答は右の問に相應するやう成る可く談話體に面白く作つて頂きたい、つまり御自分の習ひたいと思ふ一藝（單に遊戲に止まらず、實用的の技藝てもよろし）譬へば生花音樂裁縫其他細かに言へば澤山ある諸藝の內て學校ばかしてなく專門的に深く習ひたい一藝を指すのてす▲我儘でも何てもかまひません思ふ通りに習ひたい理由や注文や場所やさま〳〵に作つて下さい▲文章は餘り長いのは困ります十行內外を限りとします▲選者は其中から最も似合うた二人を姉妹とし而して最も優れた二人を一等にするのてす▲一人て姉妹になる事は出來ません又姉とか妹とかは選者の方て定めるので作者は只答さへ出して下されば宜しい▲賞品は甲種乙種以外の別種のものとして扱ひます、其方法は答に因んで例へば琴なら琴曲指南の書物とか繪畫なら繪の具と云ふ類てす賞品も文章と共に發表し發表二ヶ月の後に贈呈します▲原稿には「姉妹合せ」と題を書き半紙に限ります▲都合にて紙上へは匿名でも原稿には住所姓名を明記して下さい▲實際世間の同胞と云ふ者は心の合ふのもあり合はぬのもありますが是は誌上て理想の姉妹を作るのて、知らぬ方どうしが姉となり妹となる處に面白みがあるのです、何卒澤山に投書して下さい

△投書締切、第一回は十一月二十日

誌友俱樂部

○お小遣（課題）

○本郷　山姫

妾は毎月一圓五十錢宛貰つてゐます、そして使つたお金高と買つた品は皆小使帳に附けて、父母のお目にかけます、妾の買ふものは、女子文壇切手ハガキ雜記帳ペン鉛錐リボン畫用半紙ハミガキ粉などて、月々一圓ばかり懸ります、それてこれから殘りの五十錢はお父さんやお母さんのお許をうけて、妾の嫁くまでためて見やうと思ひます。

○秋田　建部ひさ子

私は毎日、家から一錢五厘づゝ貰ひ、學友三人とかはり番になりて貯へるのてありまして、其中から分けて學用品を買ふ、餘りますと郵便局に貯金して、修業旅行の そなへ金にして居るのです。

○徳島　齋藤菊子

父樣から一圓、母樣から五十錢、兄樣から五十錢、之れが毎月戴きますお小遣ひよ、其内から一圓は郵便貯金にしまして、殘りの一圓が女子文壇と、誌友の諸嬢と交際する郵税と、投書用の雜誌紙とを買ひます、てすけれど月によれば十錢か、八錢位遣ひ殘る事があります、夫れは阿波國慈惠院へ寄付しますのよ。

○千葉縣　八木澤津枝子

妾は二女の身であるからといつて兩親樣から鷄十羽を戴いて尙ほまた豚一匹を妾のに宛てゝ今は一生懸命に養育中てす鷄はもう五羽丈けは卵を產みますから毎月一圓位はてきますよ妾は別にほしいものはありませんから七十までも八十までも女子文壇を購讀する丈けあれば外は時々の小使が入る切りてす是は實地てす。

○信濃　島岡新子

妾は誠にはづかしいけれ共製糸の工女でありますが毎月大凡八圓ばかりづゝ賃金を取りますので、お小遣ひが先づ儉約した處で髮道具櫛油元結かんざし髮結錢等其外履物洗粉石鹼などの小使ひが毎月平均三圓四十錢位づゝの支出で收入と差引き殘金は貯金してお嫁入り道具の準備金と定めて保存して置きます。

○羽前　渡邊智惠子

妾の家ては一月元日父上の室て家內一同あつまり茶を呑み其の年の小遣を頂戴するは家禮となつて居ります妾は米拾五俵頂いて其內衣服料は百貳拾圓交際費は二拾圓書代は拾圓雜費は四拾圓かゝります何時も年末は七八拾圓不足して父上に請求致しますと父上に小遣帳を一ッ一ッ調べられますあまり金錢の遣方が荒いと云はれますそれても自分はよほど儉約したつもりなのです。

○静岡　貞水子

御小遣ひ如何との御尋ねに聊か途方に暮れました、正直正銘に申上ます、三節句、盆正月、壹茶貳茶、米の秋、其他緣日祭禮、などの時、御父樣から家內一同へ少し宛渡るのです、爲元結、かんざし、シャボン、手拭襟前掛足袋下駄、針縫糸小切其他の小品は之て買うのです、衣服求める時や機織る絲は別に父樣から與れ升がお小遣ひとしては些少ですから、父母の教訓などはありません。

○千葉　絹枝

妾、お小遣の事などはみつともなくて。ですが折角のお尋ねですから——ても妾、支拂や收入、費用の細目はいひません。只父樣は冗費するてないよ、一錢だつて皆親の脂肪だからと、母樣は陰にひそみて燒芋にと、祖母樣は袖の下から少してすけれどもと下さいます。て妾は成丈使はん積りですがぢきにパースは輕くなつて。

○赤坂　武代子

私の內では六兄樣から小さい妹迄それぞれ月はじめにお小遣が渡りますけれどいつてもたりなくつてこまりますが父母は金錢の遣ひ方を上手にする樣にとわざと少なくするとおつしやるのそれて月の終りに小遣帳しらべますと半分はいつも切手をかつてあります末の妹は一番のお金持てすの。

○長崎　入重子

兄さんは醫學校の四年生次は妾下に弟と妹があるきりてすお小遣は毎月一日にお母樣から戴くのですよ兄さんはお一人て五圓妾等は三人て五圓其を妾が主任となつてちやんと金箱に入れて置きます弟や妹は毎朔其日入要だけ品並に金高を小紙片に書いて妾の前に差出すのです妾は其を見はからつて金を渡すのです月末にはちやんと出金高並に品物を詳細に認めて母樣にお目に

かけるのです。

○　中京　淺野左月

お留守に妹の芳子(十三歳)の「お小遣」を見ましたら、八月一日姉上樣より金一圓五十錢頂戴した、同月二日六錢鉛筆三本、九日二十錢リボン、十一日五錢毛糸、十五日五十錢郵便貯金……只今……餘り熱心に見て居たので妾には聞えなんだのよ……ア、イヤヨ姉さんは、人のを見ちや、それじや姉さんのを見せて下さいな。

○　秋田　松田せい子

妾毎月の小遣は五圓お父樣から頂戴いたしますが足りませんてこつそりお母樣から頂くのよお菓子代は第一ばんそれから繪葉書と切手月々支出の極まつてるのは本誌と婦人世界其他、ローヤル水二瓶福原のエリノイン平尾のパール各一本花ムスク一個とキリスト教會の會費二十錢なのですよ。

○　福岡　すぎ子

夫が戰死して後實家の方に寄食してゐるのですが元來妾は病身者ですから樂に牛乳ははなした事はない其の他新聞に雜誌に愛國婦人會に慈善婦人會に佛教婦人會などの會費も少くないが内職におはりの師匠してゐるので御下賜になる扶助料には別に手をつけずに銀行の方に預ける入費は家政簿記の内に記入しておいて月末に計算すると收入が十圓位で支出が六圓位其の内時々衣服を新調するとまあ餘りと云てはないのです。

○　京橋　鎌子

今度は中々面白い題です事私は早く父に別れ母一人故十七才の時より或る一の職業を求め自身は尚更母をも養ひ十年此方一厘たりとも人の助力を受けたることなく女子としては過分の收入又支出あり小遣帖は日々記し月末に算し餘金は幾分たりとも不時の用意に貯蓄なし親なき身決して衣食共に奢りません。

○　秋田縣　武田春子

妾は素より貧乏ですから殆んど收入は無いと云ふ位、只今鷄の卵を賣つて月に三十錢や三十二三錢位得るのみそれて本誌の一册買つた後と切手貯金するばかり。

○　福岡　錦水

妾は毎月に五十錢ときめて置きます、されど交際の都合で其上行く事もあります、つれ〲父母からけんやくの事耳にして居りますから、無用の物は一つも買ひません、妾は涙弱き方ですから、孝子貞婦の談しや貧しき人の事やきくと同情にたへないて十錢二十錢づゝ送ります。

○　牛込　菜花

私の家は貧しくありますから晝間通學致す事は出來ません、其れ故毎日某會社に事務員として通勤致し毎月僅か九圓宛月末に貰つて參ります此の内六圓は父上に差上ます四時半より教員講習會に通學致しますから月謝一圓五十錢、半紙筆類、女子文壇、女學世界等五拾錢、貯金五拾錢、殘金の五拾錢にて降雨雪、暴風の際の電車賃、湯錢、下駄代、好きなリボン等に遣ひますと毎月かつ〲にて誠に心細き境遇であります。

○　美濃　無名

私は田舍者ですから、小遣もたくさんはいたゞきません、一月にたゞ一圓いたゞくきりです、けれどもこれで充分です、少しの買物でも皆出納表に記しおき月末に計算しまして餘りがあれば貯蓄し不足なれば貯蓄から補ひます、それで特別の時でなければまして下さいません。

○　東京　こてふ

私はお小遣を一ヶ月に五圓づゝ頂きます、そしてそれで女子文壇、婦人畫報、女學世界、とを買ひます、小説は父に叱られますから買ひません、それからリボンや、簪、一番澤山買ひますのは繪はがき、郵便なども出します、其の外手なぐさみ物は、皆自身で買ひます、大低はお小遣殘した事ありません。

○　櫻井　せい子

私は自分が思ふだけ勝手にいたゞいて勝手につかひますの、ですからいくら入るか分りませんわ、でもそんなにつかへる物てはありません矢張り入るだけしか入らないのですもの。

○　小倉　林近子

昨年の秋に兩親に逝かれてよりは他家の仕立物をしそれにて女子文壇とリボンと買ひます日記帳を設け、あとの月は何と何としるし一ヶ年になれば計算をします入用の物を買ひし餘りはみな貯金にいたしますよ。

○　滋賀　小永井恭子

私はお小遣ひといつてまだ親掛りですもの、いつでもお月樣なので、月末には五圓ぐらゐ頂く事も、又、一文も頂かない事もあるの、其れは皆銀行に運び、學資からすつかり御母樣のお計ひ、祭禮の時などは、お小遣がなくなると宅へ歸つて來ますのよ。おほゝゝゝゝ淋しくなるからよ。

○　博多　白百合子

交換手ども勤めてゐる妾ですけど、矢張人並に

希望もあれば理想も持つてゐるので御座います、僅か十圓たらずの給料、それは少しも手をかけないで貰ふと直銀行に持つて行ますの、そして、四季に頂く六圓ばかりの勤勉手當、是が即ち妾のお小使ですがれ女子文壇に女學世界、リボンも月に一度位は買ますし、それに服の洗濯賃、他局の方々との交際費（繪はがきや切手代）が四十錢位、婦人會費二十錢に三十錢の御花代、マア是れ位ですから、一ヶ月二圓あればよさそうなものですけど、やはり月末にはどうしても足りないのですよ。

○　奈良　白ふぢ

八月中支拂日記

一金壹圓也　本月分小遣として貯蓄預金より引出す。

金拾錢	女子文壇代	三日
金拾五錢	大和書店支拂 下駄一足	五日
金拾錢	工場にて入用の 上草履一足	同
金八錢	第三工場の人負傷 する皆より見舞金	七日
金貳錢	女子文壇投書郵税	十三日
金貳拾錢	リボンと かんざし代	十五日
金拾貳錢	山形の渡邊ちえ子様 初め七ヶ所へ通信其 他の郵税	同
金五錢	工場にて お菓子を買ふ	同
金八錢	ミシン部の井上様 御安産御祝ひの割付	廿五日

○　陸中　森　　子

記者様、眞實でございますの、お懐中が冬枯ていらつしやるつて……、妾もさうですワ、收入といつて別段定つてありません、入用の時は、「お母さん、どうぞ……」と請ふてお父さんにいつたことはありません、だつてネ、一圓下さいといへば八十錢？位なんですもの、そして餘りは郵便貯金、十錢未滿は切手を買つて臺紙に貼り、お釣錢中の穴のあるのは貯て燐火代。

○　田舍娘

お恥かしいがまあ云ひましよー笑つちやあいやですよ、私は病身で今はどつこもいつてません家の中計りてすから小遣は貰ひませんのよ、だけど一番よく使ふのはハガキとキツテです、其外は、髮結ふサチヒモかヒン位なもんです、田舍者はこんな物て、すませますのよ、お姉様方から見ればほんとに、おかしいでしよう。

○　千葉縣　林　よれ子

私のお小遣はいつも御母様からもらひます、そして澤山いたゞく時には、御父様から、大方金高は、一圓位て、其の入用は、糸類針紙筆其の他、日用品てす、又一圓以上の入用の時や、文壇の代は、御父様から貰ひます。

○　兵庫縣　田村　秀穗子

妾は、只今女學校の寄宿に居るのです、毎月父から十圓頂くのです、其内六圓は寄宿費、一圓は月謝、五錢は淑女會及び同級會、十五錢は茶と花てす、殘りの二圓八十錢が、妾の小遣となるのです、毎月買つた物は小遣帳に記入して、錢のあまつた月は、たらぬ月におぎなひ、決して父にねだつた月は御座りません。尙親類の人から頂きますが、皆貯金して居ります。

○　本郷　さくら子

私はお小遣を毎月みそかに御伯母様から二圓頂戴致します直に計算にとりかゝり御花が四度て六十五錢學校用具四十五錢交際費三十錢種々合せて買物が五十錢と定めて後の殘り十錢にて女子文壇を其殘り二錢は貯金して山の內一豐の妻の樣に致したいと思ひます。

○　伊豫　望月　あき子

私のお小遣は御はづかしながら月五拾錢です其れて買ひ物はどんな物かと云ふと筆墨エンピツ巻紙半紙切手リボンレース糸當世流行の櫛などて其中に十錢は貯金にするのです。

○　豐橋市　靜　枝　子

私は每月母樣から一圓づゝもらひます、郵便切手が毎月三十錢位後筆墨紙代雜誌代髮の油室を飾る花代などてすがこんな田舍てすから澤山ありますよ、都の姉上樣達御笑ひ下さいますな。

○　陸奥　志らゆき

妾は入用の時だけ頂戴します一ヶ月平均三圓位てすその中より裁縫の月謝三十錢生花の月謝五十錢女子文壇の代は毎月同じてす一番多いのは筆墨紙切手薬書の代次は洗湯石鹼齒磨粉御菓子代てす最も菓子は朋友の尋れてきた時の外買ひません小遣帳は別にありません日記帳に日記と共に付けておきます

○　岩代　石川　みどり

私の父母は小遣錢を妄りに與れません食べたい物やほしい物は母が求めて與れます唯私の使ふ金は差し支へた學校用具代とか同窓會の會費と授業料と貯金廿錢だけてありまして其他は父母

が嘗求めて私に與へます。

○　安藝　手島　まさ子

私のお小遣は月に五十錢と定めてお父様から頂きます其の內十錢を女子文壇に二十錢を身に付く雜費に致します殘金二十錢では私の樣な通信交際の好きな者は中々足りないつて申しますと身に付く雜費があまり多過ぎると仰る、私は成程と思つてへしましたら其月から少々づゝあまる樣に成りました。

○　福岡　坂田　登代子

月初にお父さんからお小遣として頂くのが五圓學校生活の時代と比しては割合に少い雜誌が女子文壇に女學世界とて三十錢お友達や諸姉さま方の交際に一圓位は要する、其他給菓書にリボンに小說編物と一ヶ月平均三圓位で宅の規則がお小遣は日記につけ込んでおいて月末に明細書を別に認め御父さんの許に出して、餘りは貯金の方にまはすのです。

○　東京　芝野　水江

恐れ入りましたお尋れてすが一寸申上ます私は月に一圓頂き別に大いした入用も有りませんが主に書籍を買ふのに多くお金を使ひます理科學だのそれ和洋料理だのと云ふぐはいなの、殘りは貯蓄をするのよ。

○　東京　吉　江　子

私はなにもお父さんやお母さん亦姉たちに買つて頂くのでお小遣は別に入りませんのよでもお父さんから二十錢お母さんから十五錢姉さんから十錢頂くのよそれて皆なと溜めつくらをして居るの。

○　京都府　ふすみ

私は支出はあれど收入は皆無てすから每月の初に一定のお小遣を貰ひ其の外は一厘も戴きません、しかし衣服などこしらへるときだけは別に貰ひます、小遣帳をこしらへてありますから其の都度細大漏らさず書入して置き月末の日曜には乾度御兩親に見て戴きますお言葉通り入用の外は充分節儉をして殘つたお金は貯金に預けてあります、大低用途の七割は書籍殘りは雜費途にあたつて居ります。

○　秋田　角間川十三子

今日は廿八日、なんと云ふ事てせう、故鄕から每月二十五日まで送金の約束を……。先々月女子文壇へ送つた原稿は、今月のに載らないか知らんと、財布倒さにして買て見たらば、悲しいかな心細いかな六號活字で……。今度の姿が心中、あーあと云つて居る所へ勇しく階子段上つて來た女中、「書留來ました」。

○　越前　新保秋星子

每月母に一定して請求するのは七十五錢てすと言へばヘシタの樣てお恥いてすがまあ二ヶ月壹圓五十錢ときめてあるのてす、次に支出は第一書籍に月貳拾餘錢それから通信に廿錢內外殘りは、リボンや櫛かざし文具等て少々ても餘る月もあり又足らぬ月もあります、てすから例へ五錢なり共餘裕あれば貯蓄して不足を補ふのです、それは一々、「お古津花比」に印ろしてあります。

○　本所　すみれ子

一定しては居りませんが每月の費用は左の通りてす交際費一圓位談話會入用三十錢學校用品五十錢位りボンかんざし本等卅五六錢あと入用の時はお母樣から頂きます。

○　大阪市　伊藤　あさ子

私はかならず月に拾錢はキッと遣ひますのよ女子文壇を買ふのに、それから髮やリボンは母樣に買つて頂きますから私は小遣ちつとも入りませんのよたゞ本誌に投書する郵便切手代だけなのよ。

○　神戸　輝月女

私はお父さんに三圓とお母さんに二圓と戴ます買物は一日に女子文壇十錢と三日に婦人世界十五錢と切手絵葉書とともに一圓と其の他お友達交際に一圓ときめて居りますのこつたお金は銀行にあづけまして旅行や新に出ますためになる本を買ます伯父さんや伯母さんに戴くのは別に郵便局へあづけまして氣の毒な人やらかはいそうな人にわづかづゝ送ります。

○　武藏　小藤

一ヶ月一圓貳拾錢收入、各會會費に八十錢、各雜誌購讀三十錢、二十錢保管とす他に伯父より五十錢御仕事にて三十錢入る郵稅及文具求む、弟に月一度書かふて上ぐ、父母が使ふな〳〵、と進む故本月より保管は五十錢とす。

○　名古屋市　林田　糸柳子

お小使てすかお耻かしいてすが正直に申上ましよう今私は裁縫女學校に通ふていますが月謝の外に每月の始めに一圓のお小使ときめて頂くのてす夫て糸や針女子文壇女鑑繪ハガキ切手など求め或時はお友達と散步にも參りますので每月足りませんいつも五十錢位は前借もします時々音樂會などある時はそう〳〵氣まり惡くて申せませんから自分の預金出して內々使ふ事もあり

ます。

○ 武藏 波留子

妾はお小遣を入用の時許り戴くのです、然し日曜大祭祝日には不用でも戴かれます、入用と申しても、お友達はなし、おつき合はなし、極僅て、投稿の郵税、書物、女子文壇購入費、紙墨位が重だつた使ふものです、それから休日に戴いたのは可成使はないやうにして月末になると一所に纏めて、近所の銀行へ預けて居ります、澤山お金がいるものは大概兩親に買て戴きます。

○ 神戸市 秋月子

妾は或る事業に從事して居りますが其れは云ひますまい每月十三圓の收入、四圓宛の郵便預金、其の內より四圓五十錢の食料、遣りの內三圓のみは、お小遣と雜誌代女子文壇と、明星、愛國婦人とて一圓五十錢は妾は兩親が在りませんので、衣服調製の爲特に義兄に預けて置きます每月中旬になりましたら冬枯よ郵便預金が今月で丁度四九と三十六……。

○ 麴町 たちばな

私母樣から每月一圓五十錢頂きます其れで何を求めますと云ふと先づ最愛なる女子文壇を買ひ次ぎに小學校用品を其れから親友の定子樣と第一日曜には必ず遠足にまゐります其時の入用等に使ひまして餘りはためて置きます。

○ 流川

さる毎に歸宅してからお小遣金と云つて別に戴きません、入用の時はわけを母樣に申上げて御承知の上自分で店にあるお金を出しますの、控は內のと一所にしてゐます、紙や筆だの其他の品は大抵買ひ置きがありますし、目立つて私のお小遣は月に三十錢は是非入ります、女子文壇が十錢淑女會費が十錢二葉會費が十錢とです。

○ 名古屋 深美ふさ子

私は一ヶ月二圓半で學校用具友達との交際自分の裝飾日用品を求めるのですから中々殘金はありません少しても殘りは貯金して時々慈善寄附するのです勿論小遣帳に一々記して故鄕へかへつたとき父に見せ升一番多いのが學校用具少ないのは裝飾品一ヶ月リボン一尺位

○ 大阪 すみれ

私はいつも一日に父母から金二圓を戴きます一圓すぐ貯蓄致しますあとの一圓で雜誌に五十錢入りますそれから殘りて學校用なものにつかひますそしておこづかひ戴きます時にはかならず小づかひの日記を見せるを常と致してをります

○ 麴町 黑川かほる

妾は月初に壹圓宛戴き其の時二十錢は貯金と致し此れは無きものとし殘りの內から御隣りの男子さんの所で女子文壇を求め又繪端書が大好きで諸姉樣と御交換を致すもの故費用の多くは繪端書郵税代で次には造花材料を買ひますが其れや此れやは日々皆小遣帳に記して收支を明細にして置き可成徒費せぬ樣心掛けて居ります。

○ 越後 わかみ女

私は月々のお小遣を、お父さんより金二圓、お母さんより、金一圓戴くのよ、そして、茶や、花や、琴の月謝に、書籍や、筆紙を買ふたりいたしますよ殘りは貯金にして置きますよ、塵も積れば山となるの諺にて、今月で、やつと、金三圓二十錢となりました。

○ 越後 きい子

月々のお小遣は、點茶、活花、琴の月謝と、書物や筆紙等にて二圓位つゞ、入りますよ、雜費の多少は月によつて、違ひます。

○ 相模 遠藤吟子

私の土地は田舍ですからお小遣をつかふ事も餘りありませんお小遣は月々家からもらいますそして私一番使ふのは髮の物を買ふのと誌友の皆樣と御交際いたす郵便はがきを買ふのです衣服や帶又女子文壇の支拂とは家でして下さいます

○ 川越町 佐久間たまゑ

私の小遣は一ヶ月三圓、而して教科書は別、シヤボン、齒磨、髮のもの、寫眞、女子文壇、其外の雜誌など買ふとお金は遠慮なく出て行つてしまう、父に話すと又小言。

○ 伊豫 すみれ女史

妾は每月十圓の學資を受けます、其內食費授業料舍費のやうな一定したものが七圓其他雜費が二圓殘の一圓は貯金ときめて居ます、然し學期の始と終には意外に小遣の多くいるもので時には貯金の出來ない事もあります。何もかも自分の小遣から出しますから、御金の減るのが夢のやうですわ。

○ 新潟 閑竹

妾は別段小遣ひと云ふて金錢は貰ひませんが入用の品は何でも買求めて戴きます其の殘り僅々お友達と散步などに出掛けた時懷中におあしがお留守の爲め困る場合があります。

○ 陸中 登女

私の小遣帳の課目は先つ期、紙墨、郵税、被服雜費、旅行の六つに分けて置きます、その中旅行費が一番澤山なの盛岡へ月に二三回出るので

頭髮のものやはきものは皆被服に、お菓子などは贈費に入れます、弟に見せるとお飯のたべかたは月々違ふと見えると云はれます、下宿屋ばかり迷惑れ。

○　遠江　藤井淑子

甚だおはづかしい事ですが打あけてお話し致します私の一ヶ月間の支出金は多い時と少い時と有りますが先づ十圓以上十五圓以下が常てす月の始りに十圓は必ず父の手から渡されますもし其の月の支出が十圓以上なればこれ〳〵が入用だからと言ふて母から公に父へ申上て貰ひます而して支出收入はおちなくしるして置ます。

參考　萬朝報

日本橋區有馬小學校生徒局區蠣殼町一の四森貞二郞三女貞子（十二）は日々兩親より貰ふ小遣錢の中より五厘宛節約して郵便切手貯金をなし居たるが昨年より去月初旬までにて五圓になりたれば早速勸業債券の號一枚を買ひ保存し置きしに今度百圓の籤に當りたるも一錢消費せず十七歲になる迄全額を貯蓄し置き嫁入の費用に供する積りなりと、子供に射倖心を起さしむるは忌むべけれど儉約の結果と見れば辛抱が幸福を生むとして稱ふるに足らん。

新課題

各地の俗謠

はやり唄、盆踊歌、工女歌、稲刈歌、田植うた、馬士唄、遊戲うた、子守うた、其外、凡ての俗謠の類、各地の特色あるものにても古來より流行のものにてもよし（十一月五日締切）

○日記の初に（十二月五日〆切）

▲新年からは皆さん新しい日記をお用ひになる、一月一日の事を書く前に日記の初めに全體の前書とも云ふ樣なものを日記帳の初めの頁へお書きになると宜しいてせう▲既に其んな事を書かれて居る方もありませう、未だ書く事に氣のつかない方もありませう、此課題が出たのを幸ひ、皆さんが書く事におきめなさい▲偖て何を書いて宜しいか、それが考へものです、二三の例を擧げると單に詩歌の類や格言や座右訓を書いて置くのもあらうし、家族一門の名を書いて置くのもあらうし、進んては自分の希望今年は何々の事を勉强し、何う云ふ事を成し遂げたいとか、其目的を書くのも宜しいてせう、或は父母に仕へる心得とか、朋友の情誼に就いて新しく守りたいと思ふ處を書く事、或は日記のつけ方、或は一年の豫言、何てもよろしいが多少希望の意味が含ませたいてす▲以上の例の中にあらうが、なからうが日記の初に書かうとおもふ事を書いて七行ほどの文章を投書して下さい、一月一日の誌上に於て披露いたします▲文體は隨意、書式は凡て每號の課題の通りてよろしい。

○諸孃と記者

○記者さんお變りなくて、私ね今度都合に依て當地へ參りましたの然しどこ迄行ても文壇は愛讀して居ますのよ（大阪利子）（記者曰何處まで行つてもはありがたいお言葉でした、御用紙の事は仰つた通りてよろしい）○記者樣私は此度始めて投書したのですがこれてよろしいてすか五色の花は本當にあつたことてす（内山まつ子）（記者曰、別項ハガキ文欄の通り選者は御作を天位に選びました、初めてお作りになつて、天になるなどは餘りない事てす、本當の事て、而かも詩趣のある事に眼を着けられたのがお手柄てせう）○記者樣私今度から投書致して見ようと考へましたので先づ始めてかゝるものを作つて見ました然し始めてゞありますから少しもなれないて住所を何處に書いてよいやら用紙が是てよいやら少しも分りません然し當地の書店て用紙を買ひましたら此の紙と申しましたから今度は之に書いてあります何卒用紙を賣つて居る處を御知らせ下されませ御願致します（長崎市すみれ子）（記者曰、此原稿用紙て結構てすとも、いつても此れをお使ひ下さい又お名前の書く場所其他此通りてよろしい、投稿者から用紙は是ていけなからうか、書き方は是て規則に外れて居ないかと、お尋れになる方が澤山ありますが、第一能く分るやうにさへ書いて下されば、少しの事は、差支えないのてす、皆樣も餘り投書規則などは心配なさらずに、それより成るべく好い作を出さうと御心配なさいませ）○殘月女に答ふ博文館の「當用日記」は、女子の日記にもなります、最も自由な日記てす、それから稍理想的の日記は警醒社の「吾家の歷史」などてせう（記者）○大槻わき子孃に答ふ御病氣、大切になさいませ、皆樣に紹介いたしますが御手紙のとりやりてもなさらうと仰るのなら御住所姓名を

友俱樂部へお出しなさい（記者）○記者様女子文壇の定期增刊は何々ですか又何時發行になつてゐますか次號て何卒（九州の小娘）（記者曰、既に發行したのは「きさらぎ」「たちばな月」「をみなへし月」の三册で本月の十五日には「菊花月」と云ふのが出ます）○記者先生に御尋ね申します俗謠は一ッの歌を七行に書のですか又はいくつかの歌を集めて七行にしてもよいのですか次の誌上で御敎へ下さい（美濃無名）（記者曰、課題の俗謠でせう、それなら歌の長いのも短いのもありますから、一つて七行にならうと、幾つて七行にならうと、御隨意て、又必しも七行と限りません、二行や三行の長短は問ひません、最も此俗謠の分だけてす）○記者様皆様をお連れなされて地方へお遊びにゐらつしやい出雲大社へ御案内いたします（島根縣簸川郡高松村須谷千賀子）（記者曰、仰の通り本月は神無月で全國の神様も出雲に集まると云ふ事てすから供をして參りますか子）○記者先生私初めて投書いたしました可笑しくても御目を御とふし下さいな私一卷の九號から愛讀して居ましたのこの文は其時から今迄長い月日の間苦心してやう〳〵出來ました此後もどし〳〵投寄しますから何卒よろしく御願いたします（熊本市鍛匠町十三堀昝子）（記者曰、昨年の九月からとは隨分根氣がよろしい、それだけの精根があれば、必ずや上手になるでせう）○記者様私は小學校に通學して居りますが本誌を愛讀して居る者てす此度はじめて投書したのてすが此の樣な書き方てよいてすかお敎しへ下さい！（豐後大分郡東大分村九三番地田原秀子）（記者曰、よろしい）○扨て私は少々英語お習ひたいと思つて居ますのですが何様田舍の事て仕方がありません、それ故文壇中へ英文和譯、和文英譯の投稿欄を設けて頂く事は出來ませんでしようか（田舍娘）（記者曰、お心掛は誠に結構てす、紙上へは當分其欄を設けかねます）○記者様私は誌上て諸孃樣と御交際願ひたいのですが如何致して御願ひしたらよろしふ御座いましようか（埼玉縣登久子）（記者曰、誌友俱樂部原稿として其文句と住所姓名を詳細お書きになつて他の原稿と同封てお送り下されば出します、別にハガキてもよろしい）○記者さん、私、妹が三人あります、今後は四人て投書しますから私が十六て妹は皆一つちがひよ（常陸石岡町仲町秋山欽子）（記者曰、十六に十五、十四、十三てすれ、十三四ては少し投稿は覺束ないてせう）○記者様投書規定に「右當選者は賞品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ」とありますのは何時どのようにして御通知いたしますのてすか次の誌上てお知らせを願ひます（武庫郡の田舍なてしこ女）（記者曰、若し懸賞當選になつて其作が紙上に出ましたなら、當選した作者は懸賞品發送日、乃ち發表された翌々月の一日迄に本社へ住所氏名を通知する事てす、但し紙上に明記してある分は別に御通知あるに及ばず）○記者樣私は當市の書店から女子文壇を購讀して居りますが皆さまの樣に高等敎育はありません何卒々々愛讀者の一人として御敎を願ひます（横濱市扇町三丁目日下部方中西佐和子）（記者曰、高等敎育は無くても愛讀者となつて頂けば結構てす）

○繪葉書交換

○どうか御手紙下さいな筱山の繪葉書がございますの御望の方へは先着五名まで御送りいたします（丹波多紀郡筱山魚屋町上野豊子）○繪葉書の交換を願ます御送り下されば直に御返答致します（滋賀縣大溝町山田よね子）○みな樣御かわりもありませんか御交際のほど願ひます繪はがきたまへば繪はがきにて御かへしいたします、私郵書の新らしいのが不用になつて居りますからどなたにてもほしい方にさし上ます（四谷鹽町一ノ三三埜村なか子）○妾は田舍の事とて遺憾ながら戰役、觀艦式、凱旋觀兵式、赤十字總會等のスタンプ附の紀念繪ハガキ、萬國古切手、英、獨、佛、製の繪ハガキを持たんのてすから皆さんの中て以上のどれかを惠んて下さる方には御禮として左の品々先着二十名を限り御分申ます銀婚式、日清戰役、東宮妃典等の紀念切手、米國切手各繪ハガキ又石器時代の矢の根石、メノウ性の天狗のメンサシ、其他古物石器各種に上等繪ハガキを以て送り上げます（陸前栗原郡眞坂二三九大場さだ子）○愛讀者諸姉上樣妾に美麗な繪はがきをたくさん御送り下されて妾は誠に悦こんで居ります これも皆々樣が御交換下されし御かげと深く御禮申上ます此の上は益々繪はがき及び御寫眞又は玉章なぞの御交換を御願ひ致します（大阪市東區船越町貳丁目七拾八番地中島孝次郎樣方春本千代子）○私に松葉形の栞と他に不用に成つてる女子文壇拾册御座いますから、お望みの方は六錢以上の繪葉書へ可成紫インキて書いてお申込み遊ばしませ（北海道龜田郡七飯村字鳴川松井長子）○皆樣在米人と繪葉書交換して下さる方はございませんか御望みの方は一寸御知らせ下さい在所を御通知申しますから（長野縣東筑摩郡和田村萩原芳惠）○繪葉書やし

なりの交換を願ひますよ（山口町中河原徳地内山本芳子）○諸姉樣繪葉書有り難う御座ります。もし返禮漏のお方はお知らせ下さい、（臺灣嘉義廳官舍鶴田房子）○諸讀樣私にも繪葉書を交換して下さい（神戸下山手七丁目二三六廣澤武子）○諸姉樣毎々御文通下されて有難う而私子京都へ參て居りましたが去る月都合て自宅へ歸りました相變らず上等繪葉書の御交換してください子！此前繪葉書の交換を願ひましたとき後者の御姉上樣には繪葉書で御返事のみて失禮致しました許して下さい子！（近江八幡在牧田九東花子○誌友の姉樣妾は陸軍大觀兵式の紀念繪葉書甲種三枚乙種七枚（紀念切手にスタンプ付）都合拾枚持て居ります舶來繪葉書で申込下さい遠い方より上げます（栃木縣芳賀郡市羽村羽賀野芳子）○上等繪端書及び栞等の御交換を願ひます（大阪薩摩堀裏町四、中野敏子）○何卒自慢の繪葉書其他紀念舶來の繪葉書交換を願ます私も小院外觀兵式紀念スタンプ付當地共進會紀念栞等にて御禮致します（札幌區南三條四七丁目本田繁治方吉川すみれ）○繪はがきの御交換たれがひます、御返事は神にちかつていたします、（滋賀縣大津市有馬醫院にてかほる）○皆樣何卒編物繪はがきの交かんをれおひます（千葉縣東葛飾郡八幡町菅野石渡角太郎方蔡葉女史）○大の繪葉書狂てすの永久に御交際御交換を願ます御玉章もてすよ（大阪市南區上本町貳丁目五六增田方岡田とみ子）○眞實御好きな方があれば何卒永遠に交際願ひます餘り粗惡なものは止してれえ（神戸市北長狹通六丁目一〇五鶴田まさ子）○姉上樣繪葉書の交換をして頂戴な（京都市室町五條上る熊谷松次郎方さく子）○諸孃樣美い繪葉書御交換して頂戴れーまた編物大すきなのどーか御交換お願ひいたし升、一組送つて下さればお望みの物御返禮いたしますよ（廣島縣双三郡三次町菅原醫院内蝶子）○諸姉上樣の内唱歌御のぞみの方は美人繪ハガキや上等の繪ハガキと交換して下さい私は「輜重輸卒」「荒城の月」「忠臣」「女訓才女」「弔祭唱歌」「雪の行軍」「山里」「花鳥唱歌の花の部とを持つて居ります（埼玉縣北葛飾郡吉川村大字吉川會田啓造方會田むら子）○卒業の慰問として繪葉書の交換又栞の交換を御たのみ申ます（山城國木津町字鹿背山生田あさ子）○和歌及書道研究の爲め御自詠の和歌御染筆の繪はがき交換致し度候但し普通はがきにてもくるしからず候まゝ皆々樣御送付下され度願上候（岡山縣久米郡鶴田村黑瀨さち子）○妾が敬愛する諸孃樣よ願はくは繪葉書の交換を妾とも願ひます（山梨縣韮崎局區内龍岡村樓内寛子）○誌友の皆さん何卒繪はがき交換を願ひます（東京神田今川ばし四川つる子）○よき繪はがきを持て居りますから御交換を願ます（播磨國飾磨郡國衙村ノ内豐澤字南畝藝井とめ方青木文子）○妾は此頃澤山繪葉書を集めましたから何卒親愛な誌友諸君よ繪葉書の交換を願ひます（茨城縣東茨城郡小川町小川三五番地川野よし子）○天下の愛讀者諸孃にして繪葉書を送つて下さる御方には私の寫眞女學世界三册差し上げます但し先着の御方には編みものを送ります（伊勢國龜山町東町二三六小林ろく子）○繪葉書の交換を願ひます（神戸市伊藤町百〇七番エッチ、イ、リチル商會内齋藤讃子）○讀者の諸姉樣方よ何とぞ美しき繪葉書の御交換たれがひます（滋賀縣滋賀郡膳所町大字ノ庄久保謙旦方にて入貢子）○皆樣御交際兼て繪はがきの交換を願ます（京都市高辻西洞院西へ入野々口咨江）○妾日本葉書會發行の愛井に博文館發行の戰役紀念葉書へ凱旋紀念スタンプを捺してあるのを澤山持て居りますから御望みの方は舶來石入か舶來の光澤葉書を袋入て御送りの方へ差上ます（下谷區西町三、ホノ十九服部春子）○私の處に觀兵式紀念エハガキ（スタンプ付）三枚不用てすから御望の方は御申込下さい先着のお方に差上ます又栞も十ばかりありますが御寫眞かエハガキにて御申込下さいませ私はクリスチヤンてすから神にちかつて（静岡縣濱松町川合ゆき子）○誌友の皆樣よ何卒優美高尙な栞又は繪はがきを送つて下さい先着五名には戰役紀念繪はがき後の五名には阪神電鐵紀念繪はがき御送り申します（大阪市土佐堀裏町山内清子）○愛讀諸孃樣妾も繪はがき交換して下さいそして和歌俳句かを書いてれ先着五名樣へ上等の繪端書てお返事します（近江國滋賀郡膳所町助川ます子）○觀艦式觀兵式をはじめ色々のスタンプ付お送り下さいませお禮はきつといたします（沼津渡邊とよを）○賢こき女子文壇愛讀の諸孃よわらはは田舍育ちのふつゝか者なれども何卒繪はがきの交換を願いたいのよ（埼玉縣入間郡越生町文の家撫子）○寫眞繪ハがキ玉章など お送りの方には先着二十名までは韓國繪ハがキなど差上ます殊に寫眞お送りの方には必ず押花を添へます（韓國仁川居留地山本こま内にて松野しげる）○私は房州の海岸に繪ハがキ蒐みとして居るものです御[illegible]

には名所繪ハガキを差上ますから何卒送つて下さい（安房安房郡北條町六軒町二、二一九鈴木きせ子）○御交際を願ひます又繪はがきの御交換も願ますよ（群馬縣北甘樂郡富岡町東横町四九一竹内松子）○韓國統監府開廳紀念繪葉書お送り下されば關東州始政一週年紀念繪はがき（スタンプ付）を差上ます（神田駿河臺佐々木醫院木原たり子）○皆樣私に遞信省發行戰役紀念繪はがき第二回全部をお送り下されば富士山郵便局開設紀念繪はがき一組と五二共進會繪はがきを差上ます（神田區西紅梅町三、杏雲堂醫院沼邊千代子）○誌友の皆樣エハガキを澤山に有難ふ御此の上とも、だけど男の方には御斷りします（甲斐國東山梨郡中牧村廣瀨ちか子）○誌友の諸姉樣早速繪葉書誠に有がとう御厚志の程深く謝します尙此後共に御交換をねがひます（下谷區御徒士町一丁目貳拾五番地加藤方伊庭いそ子）○文才ある諸姉樣方妾にも繪葉書の交換願ます（靜岡縣志太郡六合村岸大下川合ぎん子）○繪葉書の交換を願ひます（熊本縣球磨郡大村那須天子）○諸姉樣先般は美しき葉書送下さいましてありがたふ御座いました今其概要を御報じます、先着一等は前橋伊藤さだ子樣二等は埼玉原田かれ子樣三等は當市柳川町安井はつ子樣以下略す何分意外の大多數にて十四日ロ便着六通ハ便にて二通ニ便にて二十六通ホ便にて六通着十五日は四十一通十六日は二十三通十七日は九通十八日は十七通十九日は八通廿日は十三通今日を以てメ切と定めて廿一日皆樣え御返信及び御約束の品をあげましたが餘り意外に多數な故用意葉書も盡きて終ひ返信丈あげた方もありますが總高百五十一通なれば返信漏れになつた方もありましたなら最ふ一度御申越下さい今後御どし／＼御送り下さい併し和歌若しくは俳句一首を御認め下さい都合に依り下記の所え轉宅しました（高崎市八島町杉本屋方鈴木ゆき子鈴木はるえ）○美しき繪はがきに何か面白い歌でも獻み下されてよ、それ／＼愚作の和歌添へお返し致し升（秋田縣平鹿郡角間川町、黑丸松學女）○皆樣是非肉筆の繪葉書の交換を願ます（小樽色内町六一、岩谷絲子）○妾は伊勢國飯南郡關町寶林寺内三井陵子と申します者ですが香水製造法を承知致し居りますから汽車の付いてゐる繪葉書に裏面に字を書かずに送り下さい御教へ致します○繪葉書か御玉章かを下さつた御方へは、日本三公園の一なる後樂園の繪はがきを添へて御返事します（岡山市四伊福堀川方永原多計子）○私文藝倶樂部附錄「名殘エハガキ雙六」をエハガキにこしらへましたからお入用の方は美しいエハガキでお申込み下さい但し十六枚限てす（備中後月郡高屋村倉田こふて）○繪葉書とか御しやしんや御玉章を御取りかゑ下さいませんか御承知の通り妾の國は山國で高山もあれば大川も有るのよ名高い天龍峽のゑはがきも持つていますから御送りするつもりなの（信濃國下伊那郡龍丘村時又いま村元子）○何卒皆さんも英文や和文て繪はがき交換願ひます返事は最新耶馬溪繪はがきを送りますよ（豐前中津もろまち二丁目清水みさを子）○磐城國亘理郵便局留置として繪はがきを澤山に大急ぎて送つて下さい妾よりは相違なくさしあげまする（磐城國亘理郵便局留置繪寸繪武女史）○誌友諸君繪はがきの交換を願ひます必ずきれいなにて返事差上げます。又新聞の交換をも願ひます者したる日の新聞にて返戻致します下名へ（岐阜縣武儀郡關町加藤裁法舍内西村秋子）○（品川新宿五拾五鈴木方小林のぶ子）皆樣どうか私も繪葉書交換の中間入れして被下さいな○新愛讀者の姉さんも一層進んで御地の嬉しい便り聞かせて頂戴よ繪端書の交換もね（埼玉縣北足立郡大砂土村大字大和田見富方細沼藤代子）○どうぞ繪はがきの交換を願ます、スタンプ、肉筆、印影繪はがきは誠によろこびます、妾は五千哩紀念スタンプ付のもの、又は谷汲山の印を取つたので御返事します（尾張中島郡奥町野田菊子）○肉筆の繪葉書交換を願て置きましたのに印刷のを御送りになる方がありますが以後は失禮てすが肉筆のでなければ御返事致しません。（横濱市南太田町長谷川波留子）○詩友の皆さん！御自分の揮毫された繪端書に、俳句一句と短歌（但し新派に限る）一首とを認めて住所姓名を明白に認めて下さい妾も直樣自分の書いた、繪端書て返事贈りますから！十號の誌友面影中。相模の萬壽子さんは御勉強な方、何か修身書でも讀んでゐなさる。羽後の渡部都子樣は白いいろの美しいお方。此外北海道の石垣久子樣と田中民子さんとは確か妾と同じく教師して居なさるのね。美濃の佐伯さださんは。テニスの上手なお方。讃岐の東原武子さんは散らし髮にしてつん！とすまして？北海道の伊東幸子と同錦子さんとは綺容のよい溫かなお方。それから妾と同縣て磐城の鈴木ちとせさんはやさしい靜かな顏立のよい美人！同縣で懷かしい心地がしますわ

(福島縣信夫郡平田第一高等小學校內、丹治はるみ子)〇皆樣と繪葉書の交換を願ひたいのですが、成るべく御筆跡を添へられたのを望みます、繪葉書丈の交換は、紀念とするに足らぬ感がしますから、何卒御察の上御惠み下さい、當方よりは交際の實を果たした上別に不用の雜誌を御送りします、無論御返證にも及ばぬ事、(東京神田猿樂町六丹羽芳野)〇皆樣美しい畫はがきを澤山有難ふ大抵返書差上げましたが猶もれて居ましたらどうぞ一報下さい尙此後も相變らず御交際下さいませ畫端書交換もとより編ものの交換も願ひます、(神戸市楠町三丁目二四ノ一石井方石井愛子)〇繪はがき、栞、寫眞の交換を願ひます(廣島縣安佐郡大林村山手元子)〇諸姉樣繪葉書を澤山御惠み下すつて難有御禮申上ます今後宜しく御交際を願ひますよ。(名古屋市替地町一三八戸田方、西村浜子)〇皆樣俳句や短歌か又は短文新體詩のかいた繪葉書を送つて下さい私しも仝等の品にて御返事いたしますから。(美濃關相生町加藤裁縫會內傍島美遊喜)〇皆樣繪葉書の交換を致して下され私もかならず返信致しますよ(加賀國鶴來町濟田勝司方濟田芳子)〇片田舍の無學な少女なのよ繪を友として淋しく世を送つて居るのよ何卒自筆繪葉書玉章をお送り下さい畫はがきは最も好きですよ(羽前南村山郡柏倉門傳村安達久子)〇妾も繪葉書が好きてすから交換を乞ふまた玉章、押花、栞も御送り下さい(岡山市內山下大平町三五今東琴子)〇最も美しいのを下すつた方へはリボン製及び紺製の栞を添ゑて差上ます(伊勢四日市々西町一番地內藤ひさの)〇露西亞製の葉書觀兵式紀念スタンプの捺したの其の外に舶來繪葉書水彩畫ハイカラ寫眞の繪葉書を持つて居ります、何卒優美高尙な外國製繪葉書を送つて下さい(神戸市加納町四丁目八十一瀬方、伴利子)〇此度は風變りな物と交換いたし度あります手許に小笠原流包物折り方百貳拾種ありますが其內拾五種丈美しい繪葉書か又ハイカラな金貨入か栞を送りて下さつたお方十名へさし上げます又御手紙も願ひます(福岡縣朝倉郡志波村足立奥野)〇肉筆繪葉書の交換を願ひます。(東京市芝區三田四國町二ノ一四藤井さき樣方郡小蝶)〇妾は七月も八月も諸姉樣と繪葉書交換願ましたが一向御返事も御座りませんが妾は左樣な不實者てはありませんから編物交換ても繪葉書交換ても宜敷願ます(常陸新治郡藤澤村沼野榮子)〇下總印旛郡臼井町角來無坂直太郎方さく子(文通も願ひます地方新聞の御交換もネー)〇常陸國高濱町東大橋酒葉常子繪葉書交換を望む詩歌又畫交換とだけ記す事先着五名へ自筆繪葉書六枚一組を呈します〇菫を「リボン」て結んだ摸樣の繪葉書を送つて下さつた花子さん住所を報じて下さい、伊賀名所繪葉書一組を差上ますから諸姉さん盛んに繪葉書あみ物の交換を願ます(伊賀國上野町大字丸之內百々光松方にて百々草子)〇上等繪端書三十日限りにて、くぢを抽き當たるものには、作文獨習書(寶圖)俳句作法、小說作法を送ります(神奈川縣高座郡相原村橋本柚木とよ子)〇郵便聯合紀念葉書に消印付を六枚一組十二組持つて居ますが諸孃樣の中に觀艦式滿洲軍凱旋の消印ある葉書か小說己が罪次郎島クリスマス御伽噺などおもちの方と交換したうおります(新潟市早川町二丁目岩瀨吉藏方ミタ)

〇寫眞編物造花交換

〇親愛なる諸孃樣御手紙の交換を乞ふ御寫眞御惠下さいまし私も同等の物で御返證致します(北足立郡草加町二丁目高山かめ子)〇編物寫眞御玉章の御交換を願ひます(千葉縣東葛飾郡八幡町背野石渡直子)〇諸姉樣よ寫眞及び玉章繪はがき等の交換を願ます(群馬縣吾妻郡中之條町大字中之條町田朋七方にて宮上富子)〇諸孃樣編物栞寫眞の交換を願ます御惠の方にて私の寫眞栞其他相當の品物にて御返し致します(札幌區南三條西七丁目本田榮治方吉川すみれ)〇愛讀者のみな樣よ編物の交換をして下さいな種々なる編物を御送り下された方には造花及つまみ細工等御送り申します(群馬縣前橋市南曲輪町九十三野澤鳳子)〇何卒御寫眞繪ハガキ玉章編物の御交換を願ます尙ほ御寫眞先着の御方には妾の寫眞と繪はがきにて御返事を致します(金澤市石浦町二十三番地澤村美代子)〇姉樣方栞造花繪はがき送り下さいませ佐世保名所繪はがきて御禮申ます亦御寫眞もどーぞきつと御禮は申上ます(佐世保市島瀬町七石田榮子)〇諸孃樣繪葉書や寫眞の交換をなして下さい、今月寫したのが御座ひ升から其れを差上升(東京市麴町區上六四十田部井新子)〇何卒繪葉書なり又寫眞なり御交換を願い升先着者より繪葉書なり寫眞な差上升よ(下野喜連川四町片岡賦子)〇諸孃樣よ寫眞の交換を願ひます先着十名へは妾の寫眞を差上ます、外は美しい繪葉書を以て御禮致します(茨城縣稻敷郡岡田村岡見橋本啓江)〇寫眞玉章繪ハガキなどお送りくださいな私の寫眞に世

界名勝繪ハガキと編物とを添へて御返し致し升但し十五名限り（周防都濃郡福川尋常高等小學校秋良榮子）○妾は片田舍に詫しく暮して居ますが給葉書など持て居ますから何卒諸姉の采なり編物なりと御取換へ願ひ升（千葉縣長生郡新治村秋葉英子）○皆さんどうぞ皆さんの御手でなつた給葉書や編物を交換して下さい先着皆二十名へは妾のうつしゑを上げます（大分縣速見郡御越町龜川四之湯通一丁目直木孫九郎方渡邊たま子）○寫眞下さつた方に私の寫眞必ず〳〵上ます取ぎりとは致しません學のつめ中の新しいのがありますからなにかと交換して下さい古本繪葉書交換大賛成（埼玉縣入間郡川越江戸町佐久間たま子）○ドーゾオ願ひてすが本誌愛讀の満天下の皆さんオ寫眞を御惠み下さい相當のお禮はキツト致しますから妾はキヨーダイ一人もなく誠にさびしいのよ憐れんで頂戴なそれから采も下さい御禮しますよ（信濃小縣郡川邊村山浦秋月子）○諸孃樣御寫眞に御名前を記して御送り下さいましな、御送り下さつた御方には私の寫眞に繪葉書を添へて御返事致します御自製の采の交換も願ひます（東京府南多摩郡南村和田てる子）○皆さんの中で御編物を御持ちの御方は御送り下さいませんの妾必ず舶來給ハガキで御禮いたします（長野縣下高井郡日野村更科豐田たかの）○皆樣本月十日迄に寫眞を（ご自分の）一枚づゝ送つて下さいさすれば遲速に關せず妾が寫眞と及び若菜集てふ小說一冊づゝ差上ます（越前三國町平木朝尾方新保勝子女史）○寫眞、編物、造花、白地リボン等送つて下さい先着拾五名には、小說五頁の擔玉手箱等御禮により御禮に差上ます（伊豫川之江屋川千賀惠）○寫眞や造花との交換を願ひます最も美しき造花と御寫眞を送て下された御方には上等ピンポン（一具）と妾の寫眞とを送ります（福井縣武生町な普婆區岡田牛次郎方河合花子）○皆さん御寫眞の御惠みを御願します、御送り下さる御方には私の寫眞に觀艦式の紀念給葉書に三十八年日本海々戰紀念スタンプ付繪葉書を添て御返し致します、（新潟縣鵜町五條通久保彌造方田口淸志）○皆樣繪はがきの交換を、また寫眞を送つて下さる方には、藤澤浮世談、作文錦嚢等差上ます（廣島縣安佐郡大林村玉川浪子）○親愛なる諸孃樣、御寫眞や繪葉書の交換を願ひます（山口縣都濃郡戶田村河津いと方才子）○諸孃の御寫眞に紀念スタンプ付の繪葉書を附し御送り下さい先着「塙保己一」一冊、妾の寫眞、名所寫眞五枚」次着「致名に名所寫眞三枚づゝ」を呈します（伊勢國鈴鹿郡關町寶林寺內若林はる子）○皆樣美しい繪はがきどうも有がとう今度は御寫眞あみもの交換を願ます（千葉縣長生郡新治村徒女子文學倶樂部會長小川ふみ子）

○諸孃の交際

○記者樣始め愛讀者諸姉樣に一寸披露かたく〳〵申上ます妾は至つて學問には淺い者ですから愚作てすが投稿致ます故何卒御引立下さるを願ひます（埼玉縣北葛飾郡吉川村月張とめ子）○誌友諸姉樣何卒御文通を願ます新しき智識を御與へ被下度希望致し升（和歌山縣那賀郡麻生津茶屋町西河のぶえ）○諸友の諸姉樣お美くしい繪葉書やみなさけこもるお玉章有がとうそれ〳〵お返し致した積てすが若もお忘れ申たお方は早速お答を願ひます男子のお方は御斷り申ます（下谷區仲御徒士町一ノ二五加藤方、伊庭いそ子）○諸友の皆樣以後は宜數交際をれがひ升給はがき御玉章なり御送り下さい御返事は必ずいたし升上海に居りますから（淸國上海新靶勒路第二百三十三號岩永くに子）○親愛なる誌友諸孃樣妾は周防の片田舍に住む不束者てすが以後宜しく御見捨なく玉章の御交換を願ひます、きつと御返しは致します、（山口縣周防國熊毛郡高水村宇淸尾西村しんじ）○諸姉樣お變りはなくつて以後よろしく御交際下さいまし（島根縣簸川郡高松村須谷千賀子）○妾は愛讀の一人てす給葉書文通を願ます御返禮は必ず致します行く末長く御交際を伏して乞ふ（羽前南村山郡黒澤渡邊智惠子）○諸孃の內て、九月發行の女子文壇御不用の方は知せて下さいそれから地方の學校寫眞葉書御送下さる方に本縣立學校のを送り升（埼玉縣入間郡川越石原町川岸佐久間旅館內白瀨生）○妾に多數のお方から御交際を求めくださいましたありがたう存じます誠に願つてもない幸なので一々御返し差上ました積りては御座いますが復た爰に改めて御禮を申上ます、どうぞ諸孃樣一時的てはなくつて永久的に御交際くださいましな（靜岡縣磐田郡岩田村尋高小學校內伊の藤比衣子）○皆樣私し之れ迄て「松江市北田町四八」に居りましたけれ共悲しい事には私の愚父が石州濱田の方に轉任に成りました爲め私迄て住みなれし故鄕を去らねばならぬ樣に成りました多分十一月の末てせう行きましてから宿が定まりましたら又お知らせ致しますから

どうぞ之れ迄交際して下さつて居る方はもとより之れからして下さる方も宜しく御願ひ申ます（寺本芳野）〇愛讀者の姉上樣不束者ですが御交際を願ます御玉稿を御惠み下さい勇んで御返事いたします（靜岡市靜岡宿羽根安子）〇諸姊よ私も愛讀の一人てすどうぞ御手紙の御交際を願ひます（日本赤十字社石川支部寄宿舍内矢尾茂登子）〇皆樣妾女子文壇愛讀するやうになりまして滿一週年になりますその間賢明なる諸賢姊に交際を願ひまして今尙絕へず文通して下さる方は六十名あります其中に男子の方が八名ありましたからすぐ男の方丈絕交しました今後廣く天下の誌友諸姉樣に交際をお願ひ申します御手紙へ寫眞を添へて送つて下さい妾も直ぐ寫眞と手紙て御返事致しますから何卒（紀伊日高郡藤田村吉田坂本修平方春江）〇私は肥前有田山間の地に生れ此度初めて投書致します諸嬢の姉樣方以後よろしく御交際御文通を願ひます（佐賀縣西松浦郡有田町法元寺秋月靜弱）〇皆樣久敷御目にかゝりませんれ、實はネ、温泉の叔父さんへ參つて手傳てゐましたので、誠に濟みません何卒皆樣の御親交を願ひます、（陸中和賀三光院蟲森子）

〇剽窃詩文の注意

剽窃家の正體を露はす爲に多大の紙面を費すは記者の忍ばざる處なれば成るべく簡單に報告すべし天知る地知る讀者知る此の如き輩は自ら社會の外に逐はれんのみ。

▲第十三號の分

▲常陸、百合子。　同人の叙事文秀逸「一樂しき家庭」は本社發行「貧文集」二三五頁太田あきつ子君の作を剽窃▲豐前、みさを。　同人の抒情文秀逸「あゝ月よ」は三十四年十二月「中學世界」第二賞森操君の文を剽窃、是も矢張同人の新體詩三二頁「旅中吟」は昨年「秀才文壇」木暮刀水君の作を剽窃▲橫濱、吉川英子。同人のハカキ文「燈火の美」は「百字文」二號二十頁の青森畠山君の同題の剽窃▲千葉、吉畑せい子。　の新歌謠「今日の朝顏……」は八月四日の「萬朝報」の俚謠の剽窃▲愛知、俊子。の新歌謠「風のあかり……」は八月二日の「萬朝報」の俚謠と下の句全く同じ上の句は聊か異れり▲王子、熊谷千枝子。　の俳句「螢飛ぶ……」の秀逸の分は「ハガキ文學」三ノ九志學武藤君の作に同じ。

▲第十二號の分

▲門司、岡芳子。　の叙事文秀逸「夏ぐさ」は「中學文壇」より剽窃▲佐渡、谷川桂月。　の新體詩「麥笛」は「秀才文壇」四ノ八より剽窃▲山口磯村せいじ。　の滑稽選外「農夫」は國定教科書尋常讀本の一ノ三三頁より剽窃。

▲取消。　十二號の新笑話地貧東京とき子君の「電氣のお湯」は「二六新聞」より剽窃せし旨發表せしが右は全く暗合にて剽窃にあらざる事確かなれば茲に取消す。

右の外剽窃詩文として疑はしきもの又は有力ならざる取消等あれど煩累を避けて發表せず心付きたる者は速に反省して罪を重ぬる勿れ、偖て例により綿密なる注意をたまはりし諸君の姓名を左に擧げて感謝の意を表す。

▲秋田、松田せい子▲岩代、一年生▲伊豆、ゆき子▲越後、岩本よし子▲長野、兒野榮子▲安房秀月女史▲磐城、一少女▲長崎、さだ子▲長野、岡田かづい▲秋田、黑丸とみ子▲和泉、みどり▲房陽、エムテー▲名古屋、おけ▲其他落名二人。

編輯だより

▲新年の豫告。　新年以後の新面目を施す事に就いては別項に詳しい豫告がありますから見落し玉ふな。

▲增刊「菊花月」。　例により本月十五日定期增刊「菊花月」を刊行します、揭載に洩れたる投稿は多くそれに出ますから樂んでお待ち下さい。

▲誌友倶樂部。　いつも誌友倶樂部は大繁昌て投稿を載せ切れず濟まない事でありますが本號の「繪はがき交換」の如きも全部前號に載らなかつた分てす、其以後の分は他の諸項と共に增刊「菊花月」に凡て揭載し埋合せをいたしますから左樣御承知下さい、又「闘畜換讀」の全部も增刊に讓りました。

▲寫眞に就いて。　誌友面影の寫眞は出來得る限り歡迎いたしますから諸孃も何うか奮つてお貸し下されたい、それから地方各女學校に於ける紀念日とか式の日とかに撮影された寫眞、女學校の先生方のお寫眞など諸孃のお手許にある分を拜借し得らるゝやうなら非常の幸福です、速に口繪に挿入いたします。

Saturday for a mushroom-hunt.

Waiting to hear very good news from you,

Yours lovingly,

Oct. 20. Kiku.

來る土曜を茸狩に當ては如何に候や.

嬉しき御返事を待ちつゝ,

可祝.

十月廿日 菊子.

Answer.

Yotsuya.

Dear Kiku-ko Sama,

Is it not queer that I too have been thinking about a mushroom-hunt? My family says that it is too late to go anywhere for mushrooms, but I do not care whether I find any or not if I simply go on a picnic, don't you? It is said that somewhere in Chiba and its neighborbrod we can find them. I shall find out definitely where it is, and let you know at once. By the way, have you any older person to go with us? We two young girls ought not go alone on a picnic outside of the city. We need a chaperon. Can you come to-morrow after-noon to talk about our plan? I shall be in any time after two o'clock.

In haste,

Lovingly

Oct. 21. Aki.

同返事

四谷

菊子様,

私も又同じく茸探の事思ひ居りしも不思議に候はずや. 既に時候の過ぎしと家內一同申候へども茸を採る採らぬは扨置きて, 唯遠足に參り得なば松は滿足に存じ候も思召如何に候や. 何處やら千葉附近には好き處ある樣聞き居り候間委しき事尋ねし上にて早速御知らせ可申上候. 就ては誰か年行かれし方の御同行なさるものに候や. 歲若き私共二人のみにて遠足などに參るべきにあらねば, 誰か御伴れ下さる人は入用に候. 色々御相談申上度候間明日午後御越し被下度, 二時過ぎならば在宅可致候.

大急ぎにて,

可祝.

十月廿一日 秋.

in my gloomy room when the air is so inviting! As I have not been out for several days, I was much surprised yesterdav to see the great quantities of mushrooms, chestmets and persimmons at every green grocery. They have reminded me so much of the country that I can hardly keep mind on my daily task.

Would it not be jolly for us to go on a mushroom-hunt somewhere not far from Tokyo? Is it too late for that? I have no idea when is the best time for it, neither do I know where we ought to go for mushrooms. Can't you suggest a good place for them? If you do not know it, do please ask some of your numerous Tokyo friends and find it out. Whenever I need any information, it is my privilege to come to you, isn't it? Do not simply give me the name of the place when you answer me, and say that you are not going with me. Do not stay in the house to get moldy. Come out and see the beautiful work of nature in the country. If it is convenient for you, let us spend this coming

陶しき室内にのみ閉籠り得べき。近頃須臾く外出せざりしに昨日市街を通りしに何れの八百屋にも栗,松茸,柿の堆きに驚かされ,且又郊外の趣思ひいて日々に課業に手のつかぬ次第に御座候

就ては東京市より程近き里に茸狩にと出づるも妙に候はずや。それには遅過ぎ候や. 茸狩の好時節も又好き場所も知らぬ私ゆゑ,何處が適當の地には何卒御教へ被下度候. もし貴女様にして御存知なしとの御事に候はゞ數多き東京の御友人等に御問合せ被下まじく候や. 何時も知らぬ事, 尋ね度事は皆貴姉の許へと持ち來る私こそ幸に存候. 斯々の處こそ好けれど,我は行かぬ等の御返事は決して欲しからず候間左樣御承知被下度候. 黴生ゆるまで家に閉ぢ込み給はで,是非とも郊外にて自然の美に御接し被遊度御勸誘申上候. もし御都合よく在せられ候はゞ

Golden Texts.

Take no thought for your life, what ye shall eat, or what ye shall drink; nor yet for your body, what ye shall put on. Is not life more than meat, and the body than raiment? Consider the lilies of the field how they grow; they toil not, neither do they spin. And yet even Solomon in all his glory was not arrayed like one of these. Wherefore, if God so clothe the grass of the field, which to-day is, and to-morrow is cast into the oven, shall He not much more clothe you? Take no thought for the morrow; for the morrow shall take thoughts for the things of itself. Sufficient unto the day is the evil thereof.

(Selected)

金言

生命の爲に何を食ひ何を飮み，また身體の爲に何を衣んと憂慮すること勿れ．生命は糧より優り身體は衣よりも優れる者ならずや．野の百合花は如何にして長つかを思へ．勞ず紡がざるなり．然れどもソロモン大王の榮華の極の時だにも其裝此花の一に及ざりき．神は今日野に在りて明日爐に投入らるゝ草をも如此よそはせ給へば，況して汝等をや．明日の事を憂慮するなかれ，明日は明日の事を思ひわづらへ．一日の苦勞は一日にて足れり。

Inquiring about a Mushroom-hunt.

Surugadai, Kanda.

Dear Aki-ko Sama,

After the long rain, I feel like a new being to see the bright sunshine again. When the weather is pleasant, I think there are nothing so beautiful as autumn days. How could I stay

茸狩問合せの文

神田駿河臺．

秋子樣，

降瀕りし雨の後再び輝き渡る日光に逢ひて別人の思ひ致候實に好天氣の節は秋の日程美しきもの又他に無けんと存候．空氣のかく心地よさに如何で鬱

女子文壇第二卷

英　　文

津田梅子閲　河井道子述

A Prayer for To-day.

Lord, for to-morrow and its needs
I do not pray,
Keep me, my God, from stain of sin
Just for to-day.
Let me both diligently work
And duly pray;
Let me be kind in word and deed
Just for to-day.
Let me be slow to do my will,
Prompt to obey;
Help me to sacrifice myself
Just for to-day.
Let me no wrong or idle word
Unthinking say;
Set thou a seal upon my lips
Just for to-day.
So to-morrow and its needs
I do not pray,
But keep me, guide me, hold me, Lord,
Just for to-day.
(Selected)

今日の祈禱

神よ我　明日の爲とて
祈らねど
罪の汚に　な渡しぞ
今日のみは。
業にいそしみ　心して
祈りしつても
言行に　厚からしてよ
今日のみは。
我意をなすは　遲々にして
仕ふなに疾く，
身を贄として　捧げ得しめよ
今日のみは。
不正の言葉　心なく
洩れえぬごとく
唇を　鎖し給へや
今日のみは。
然ればこそ我　明日のため
祈らずとても
主よ我を　導き護れ
今日のみは。

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

ネッスレス ミルクフウド

各國帝室及王家御用



歐洲諸國及ビ本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ小兒病者又タ平素不消化ニ苦ム者ニ適當ノ最良食物ナリ○最モ盛カンニ藥舖洋酒食料品店ニ販賣ス

世界無比
最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日目に必らず美麗に除去すること保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛にて除去し得らること確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥▲價は壹劑分壹圓、參劑半分三圓、六劑分五圓、拾貳劑分拾圓、送料各拾錢宛、必ず添送の事郵券代用二割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

明治四十年

文士日記

意匠奇拔携帶至便ハイカラ裝釘日誌記入の方式及び數多知名文士の作例を添ふ

文士とは何ぞや文章小說新體詩漢詩和歌俳諧川柳を作る人を云ふ?是等文學を愛する者の用に供すべき新警奇拔破天荒の趣味に富める明治四十年の日記帖生れたり本帖は知名文士の合同考案に成る

▲幸田露伴氏曰 日記は文章を作る最良法である

●本書購求者は誰でも得らるゝ懸賞金百圓の贈呈の獎勵法あり詳細は日記帖に發表しあり眞に是れ無比新案の大奮發なり

豫約 正價卅五錢送費六錢●來十月卅日迄送金注文に限減價廿五錢送費六錢郵券二割增

發行所 東京神田區小川町一番地 盛文館書房

女子家庭の新讀物

鈴木秋風君著　太田三郎君畫

小説美文　朝晴

〔好評〕

全一冊新式製本本綴洋装密畫入頗優雅

(正價四拾五錢　郵税四錢)

特別賣價四拾錢　郵税不要

目次

▲箏　木
▲髯そり
▲喧嘩停車場
音樂家(惻隱、寂寥)
▲枇杷の實
▲野性
▲春の悲
▲蟬時雨
▲手袋賣
▲青葉日記
▲遠潮
▲田舎道
▲江戸川
(花ぐもり、海酸漿、向の丘、
▲春のひかり
▲野菊

彩色挿畫

薔薇
潮の音
詩集
大川端

河井醉茗君著　山中古洞君畫

((三版))

女子懸賞文集

全上等紙
四百廿頁
廉價廿五錢
郵税不要

—目次—

〇短篇小説(廿七)〇消息文(三十五)〇抒情文(三十)〇叙事文(三十二)〇論文(十五)〇新體詩(廿七)〇和歌(三十五)〇俳句(四十四)〇はがき文(廿八)〇圖畫廿七〇附錄＝大家文集(七)計十一項…三百〇七題

〔好評〕

全一冊新式製本色クロース金箔、色箔入頗優雅

(正價金六拾錢、郵税六錢)

特別賣價五拾錢　郵税不要

詩と美文　玉蟲

目次

◎姉妹◎舞少女◎笛物語◎火の性◎木の葉◎昔の戀◎鍬を止めて◎哀江頭◎朝顔の葉◎紫苑

◎ちさな草紙◎廢城◎幼き富士◎詩人村◎眠らんとして◎夕暮日記◎懸想文賣◎手函の薔薇◎わが家の正月行事◎海の幸

◎渡りぞめ◎戀ごもり◎廢屋◎天なる戀◎大和三山◎故郷の家◎故國の音樂◎さゝやき◎くもり空◎繪師

◎夕燒◎天香山◎春意◎鶯のゆくへ◎夜の戸◎終點まで◎新年の家◎愛子の死◎五尺手拭

◎氷山◎暗き谷◎草刈◎林檎◎塔下の少女◎落葉を焚く歌◎我子◎いのり◎玉蟲の草紙

◎若葉の家◎濱名湖物語◎手紙の端に◎雨夜の占◎軍人町◎狸囃子◎歳の暮◎片羽を奪へ◎駿馬

◎吾行く道◎幹に刻める◎冬の日影◎詩人の家◎朝餐晩餐◎茗荷の子◎吾家の花◎高野街道◎晝顔

發兌元　東京京橋區大鋸町十一　女子文壇社　郵便振替貯金口座番號は壹七貳九番

新年以後の賞與品は本號に發表す就て熟覽を乞ふ

募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、與謝野柳浪先生、河井酔茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

○論文　○抒情文　○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以内）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以内）　○はがき文（半紙かな付廿四字四行）

○短篇小說（半紙總かな付廿四字六十行内）　○新躰詩（半紙十句以内）

○和歌（半紙一首）　○新歌謠（上全）　○圖畫（一寸の二寸判 風俗景色）

○新案俳句（半紙一句）

▲各欄「題」隨意一人佳作一章宛の事
但着色無用日本紙の薄きもの

○新笑話（賞與金、一等五拾錢二等參拾錢三等貳拾錢正金にて呈す）

（三十九年十二月迄）

賞與品

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小說○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○和歌○俳句○新歌謠の當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

右當選者は賞品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽賞狀を添へ贈呈すべし

【投稿〆切＝毎月十五日】

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には選の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○他人の作物を剽竊したる當選文は勿論無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○各種の原稿（同封）取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

【最寄書店になくば直接發行所へ總て郵送無料なり】

定價

女子文壇（毎號六彩畫繪端書寫眞口繪數葉挿入）每月一日發行

一册（大判百頁）	前金拾錢
八册（半年分增刊共）	前金七拾六錢
十二册（一年分增刊共）	前金壹圓八錢
十六册（一年分增刊共）	前金壹圓四拾四錢

郵税無料

定期增刊　二月十五日　五月十五日　八月十五日　十一月十五日　發行

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法是は半ヶ年分以上の前金拂込に限る「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば無代で呉れます（郵券代用は壹割增）

廣告料

改正

特等	一等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁十三圓	半頁十二圓
一行……	一行……	一行四拾錢

〆切毎月十五日也

【備考】特等場所は表紙四の面なり○壹等場所は色紙刷各區別の始終の頁、本文第一頁の對面、石版と寫眞口繪の對面なり○普通場所は本社が適宜に割込む紙面なり▲廣告面一行は五號活字廿四字詰、半頁は（一段）卅二行分、一頁は（二段）六十四行分也

明治三十九年十月廿九日印刷
明治三十九年十一月一日發行

定價金拾錢（無比挿畫）

（二卷第拾四號）

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話〔本局六〇七番〕　女子文壇社

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿八　東海堂
東京市日本橋區吳服町六番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區紺屋町九番地　良明堂

明治三十七年第三種郵便物認可



女子文壇 最廉無比 定價金拾錢 郵税壹錢

東京秀英舍印刷